
STAR MINE GIRL
1
著 大樹連司
原作 ニトロプラス
イラスト 津路参汰（ニトロプラス）
GAGAGA

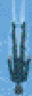
小学館ｅＢｏｏｋｓ

スマガ１

大樹連司

原作　ニトロプラス

イラスト　津路参汰（ニトロプラス）



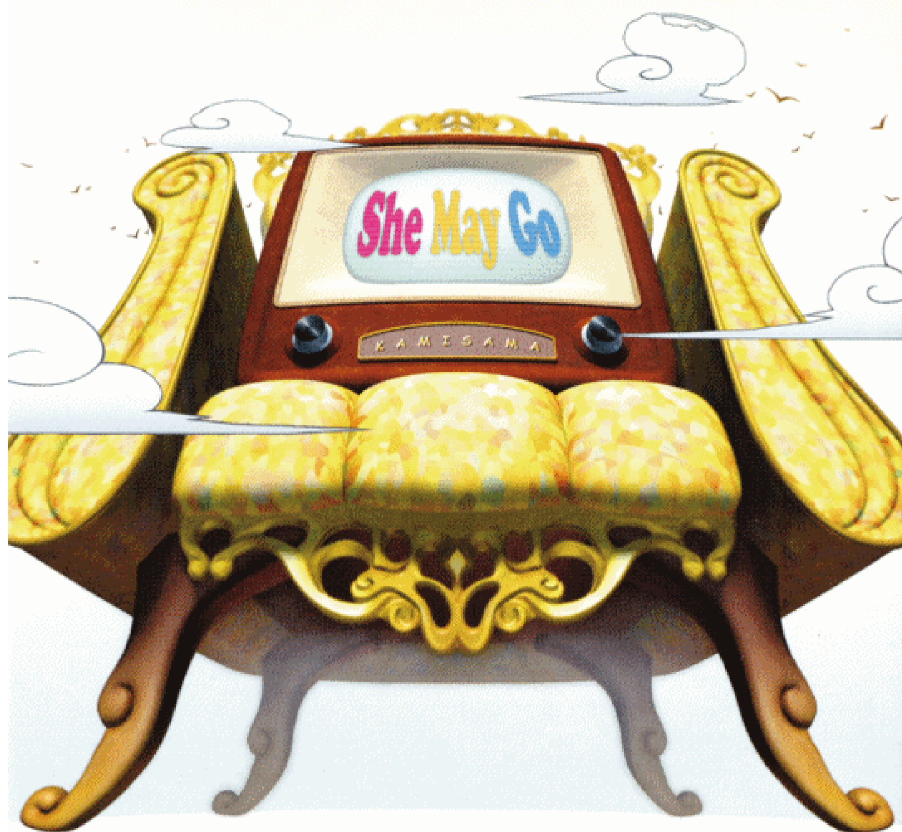




著 大樹連司

原作 ニトロプラス

イラスト 津路参汰（ニトロプラス）



スマガ❶目次

プロローグ 009
1 012
2 076
3 134
4 166
5 203

DESIGN: Mzk [Nitroplus]





カルテア
悪魔
沖姫々
ガーネット
スピカ
宮本武
アリデッド
うんこマン（仮）
神様
ミラ
日下部雨火

目次

プロローグ
1
2
3
4
5

登場人物

うんこマン（仮）、あるいはオザキキヨヒコ（仮）
伊い都と夏げ市しに出現した記憶喪失の主人公。

スピカ
名家出身にして孤高の天才魔女エトワール。

ミラ
元気溌はっ剌らつ、魔女エトワール特攻隊長。

ガーネット
健けな気げで我慢強い、魔女エトワールのまとめ役。

沖おき姫き々き
伊都夏大学園生徒会長にして自衛軍臨時指揮官。

日くさ下か部べ雨あま火ほ
伊都夏大学園新聞部部長（非公認）。

樋ひのケけ結ゆ花か
魔女エトワールを敵対視する主人公のクラスメイト。

宮みや本もと武たけし
主人公のクラスメイト。重度のおっぱい星人。

アリデッド
男勝りなカルデア指令。クラス担任も兼任。

襟きん在ざい一いち郎ろう

スピカの住む屋敷の執事。

神様

主人公が死ぬたびに天国で出会う、自称神様。

プロローグ

　ＣＱＣＱＣＱ。ＣＱＣＱＣＱ。
　あの繋つながってますよね？　聞こえますよね？　大丈夫、ですよね……？
　はじめまして、ですよね？　違ったら、ごめんなさい。
　あの、今日は、お話があるんです。少しだけ、聞いてもらえますか？
　あの、たとえば、なんですけど。一度過ぎてしまった出来事を、もう一度やり直したい。
　そんなふうに、思うことってあります？
　取り返しのつかないことなのに、あの日のあのことが恥ずかしくて、もう一歩も先に進みたくない、とか、そういうこと、あります？　私は……たくさんあるんです。
　あなたは、どうですか？　やり直したいと思うことありませんか？　それとも――。ええと、なんだかすみません。偉えらそうでしたね。ごめんなさい。
　聞いてくれて……ありがとうございました。
　それじゃあ、またいつか、会いましょ――え？　私？　……そうですよね、憶えてないですよね。あ、気にしなくていいんです。そうじゃないと、おかしいし……。
　だから……はじめまして。私の名前は……次に会った時で、いいですか？
　その時、私のことを思い出してくれたなら――思い出して、くれますか？

死にたいのかい？ 大丈夫、僕も消えたいから
生きてたいかい？ 大丈夫、僕も生きたいから
決めかねるかい？ 大丈夫、それ俺も得意

だけど、ねぇ、星座の名前は言えるかい？
星の名前を言えるかい？
マジシャンの名、呼べるかい？

『星座の名前は言えるかい』筋肉少女帯／作詞：大槻ケンヂ



1

夢を見た気がする。

だが、夢の中身は忘れてしまった。

気がつくと、空のまっただ中にいた。

マジで空の中だった。

耳元で風が轟（ごう）々（ごう）と鳴っていた。

文学的な表現ではなく、リアルに地上上空、恐らくは地上数千メートル。下には、普通に地面があって、大きな街が広がっていた。

海沿いの街である。中心部は、結構開発されてはいるが、緑も多い。季節は初（しょ）秋（しゅう）なのだろう、柔（やわ）らかな日差しに照らされ、紅（こう）葉（よう）が始まっているところもある。風（ふう）光（こう）明（めい）媚（び）な地方の中心都市ってところ。

観光にでも来たら癒（いや）されそうである——が、今のオレは観光中などではない。

物理法則は今日も絶賛営業中。オレは重力加速度ｍ／Ｓ２で好評落下中。

加速、もはや誰も止めるのは不可能。逆さまのオレ。

癒されるどころか、普通にこのままじゃヤバい。

——ついでに記憶もなかった。

意味がわからなかった。

記憶喪（そう）失（しつ）だけなら理解できる。主人公の設定としちゃ珍しくもない。

そりゃ人間生きていれば、卒業旅行中に犯罪組織に捕まって記憶を消され、気がついたらクールな美少女と戦わされて殺し屋に、なんてことくらいはあるだろう。

でもな。

気がついたら記憶を失ってて、上空ン千メートルって、一体、何だよ。

斬(ざん)新(しん)な導入っていうレベルじゃねぇぞ。

どうする。

間違いなくこのままでは死ぬ。

何かないのか？　この絶体絶命のピンチを救ってくれる〈素敵設定〉とか〈素敵アイテム〉とか持ってないのかオレ。実はサイボーグで空飛べるとか、青い石が光って反重力！　とか……。

体をたしかめてみる。

だけど奥歯に加速装置もついてなければ、首にペンダントもないようだ。

打開策なし。詰っんだ。どう考えても詰んだ。まじで死んだっぽい。

「バ――バルス!!」

絶望した！　一(いち)見(げん)さんお断りの無理ゲーに絶望した！

無理。こんなの無理！　こんな展開、どう考えてもナシ！　だから滅(ほろ)べ！　一回仕切り直しだ！　発(ほっ)作(さ)的に滅(ほろ)びの呪(じゅ)文(もん)を唱(とな)えだすオレ。わはは、世界なんて滅びてしまえ。さあ滅べ。滅べ。オレがラピュタの雷(いかづち)だ！（地面に落ちると潰(つぶ)れます、オレが）

「バルスッ!!　バルスッ!!　バルスッ!!」

刻一刻と迫る大地。一向に世界は滅びない。

だが、負けるもんか。まだオレのバトルフェイズは終了しちゃいないぜ！

「バルス、バルス、バールースー!!」

そして――。

「――何やってるの？」

そんなオレに声がかかる。

おお！　この不条理展開から、ようやくオレを救ってくれる誰かが！

「もしかして、滅びの呪文？　アンタ、オザキ？　思春期特有のアレ？　理由もなく世界を滅ぼしたくなるお年頃？」

と思いきや。なんだか、妙に冷たいツッコミ。手足をばたつかせて声の方に、顔を向ければ、そこには彗(ほうき)の上に仁(に)王(おう)立(だ)ちになって

一人の少女が飛んでいた。

「ま……魔ま女じょ？」

　思わず、素直な感想が口をつく。

　黒マントに黒帽ぼう子しに彗。どう見ても魔ま女じょだ。

　彗に跨またがるのではなく仁王立ちという点は違うし、それに、シワシワのお婆ばあさんってわけでもない。乗っているのも、彗というか、おもちゃ屋さんで売ってる魔ま女じょっ子ステッキみたいにカラフルだし。だけど、やっぱり魔ま女じょである。

　年の頃はオレと同じくらいだろうか。

　真っ黒な三角の帽子から長い髪がこぼれる。帽子と同じ色の漆しっ黒こくの外がい套とうの下には、学生服らしき服がのぞく。強い意志を感じさせる目が何より印象的。

　それが真まっ直すぐオレを——睨にらんでいる。オレ……何かした？

「そ。アタシは魔ま女じょで、アンタは悪あく魔ま。このセカイを滅ぼしに来たってワケ。

　——ちょっと羨うらやましいわ。口だけじゃなく本気で滅ぼしちゃうんだから」

　そうして彼女は彗の先端をオレに向ける。彗というより、まるで銃口を向けられた気分。

　どうやら、何か早世したロック歌手あたりと勘違いされたらしい。

　滅びの呪文なんて唱えてたせいか!?　オレのバカ！　余計なことするから！

「——違う！　んなわけあるかッ!!　オレはただの一般人だ！」

「違うの？　じゃあ何なのよ。アンタの名前は？　何でこんなところにいるの？」

「いや……それが、オレ、自分の名前、憶えてないんだ。記憶が……ないんだ」

　気まずい沈ちん黙もく。呆あきれたように彼女は言う。

「……つまりアンタは、上空ン千メートルからパラシュートなしで落下する、謎の記憶喪そう失しつの自称一般人、ってワケね」

　そうそう。そのとおり。
「誰が信じるか」
　全く道理だ。そんな一般人はいない。常識的に考えて。
「一般人は避難所にいなきゃダメなの。今、ここにいるは、アタシたち魔女(エトワール)か悪魔(ゾディアック)だけ」
「ぞでぃ……あっく……？」
　文脈的に、アメリカの殺人鬼でも、アクシズ製の欠(けっ)陥(かん)モビル・アーマーでもなさそうだ。悪(あく)魔(ま)と書いて、ゾディアックとルビを振るらしい。で……それがオレ？
「そ。悪(あく)魔(ま)のことね」
　と頷(うなず)いて勝手に納得する少女。いや、違うと抗議しようとした矢先、
『……スピカちゃん？　何かあったの？　予定位置に着いてないみたいだけど……』
　唐(とう)突(とつ)に、彼女の帽(ぼう)子(し)がしゃべった。……のではなく帽子につけられた星形のバッジが、光の点滅とともに声を発していた。どうも通信機の類(たぐ)いらしい。
「あ、ガーネット、ゴメン。作戦中止。怪しい人物発見。悪魔(ゾディアック)かも」
『悪魔(ゾディアック)!?』と星形バッジが跳ねんばかりの悲鳴じみた声。
「いや、だからそうじゃないって――」
「オザキは黙ってて」オザキ言うな。
「それともキヨヒコ？」違うって。
　いつからそっちのオザキになった。ていうかオザキから離れてくれ。
「うーむ、キヨヒコにしては、なんとゆーか、いささかもみあげ分が不足しているよーな」
　もみあげまで引っ張られるオレ。うるさいわ、オザキでもキヨヒコでもないと――って？
「ってうおっ！　また変なの出た！」

いつの間にか、もう一人増えていた。最初に現れて、今オレに彗（ほうき）を突きつけている彼女より、だいぶ幼い。小学生ってことはなかろうが、そうだと言われても信じる。ツインテールが、さらに幼さを印象づける。コスチュームは一人目の彼女と同じく三角の真っ黒な帽子に黒い外（がい）套（とう）、下に学生服、そして彗。こっちの子は、いわゆる普通の魔（ま）女（じょ）的に、ちゃんと彗に跨（またが）って飛んでいる。その……上下逆さまに、ではあるが——器用だ。

そんな彼女が、底抜けに明るい笑顔を浮かべて、オレにまとわりついてくる。じゃれついてくる仔犬のようだ。ってもみあげ引っ張るな。痛いって。

伸びないって！　おもちゃじゃない！

『ちょっと！　ミラちゃんまで！　二人とも、何してるの⁉　それにもう一人いるけど！』

「ミラが逆さまになって悪魔（ゾディアック）のもみあげをもみあげてる感じかな」

どうやら最初に現れた子がスピカ。こっちの小さい子がミラ。そんでバッジでの会話の相手がガーネットらしい。そして、そのスピカという子の言葉に——。

『悪魔（ゾディアック）！　今すぐ二人から離れて観念なさい！』

怒鳴り声が星形バッジから吐きだされ、

そして次の瞬間！

青い光が、オレの視界を染めた。何かがものすごい勢いですぐ近くを通過していった。

衝撃に、吹っ飛ばされてくるくる回るオレの体。

板（いた）野（の）サーカスみたいに激しく回転する視界の中、側（そば）をかすめた青いビーム的な何かが、眼下の海（うな）原（ばら）に着弾！　盛大な水柱がそそり立った。津（つ）波（なみ）も起こる。沖（おき）に停（てい）泊（はく）されている船が木の葉のごとく揺さぶられる——ヤバ。こいつら、マジ、ヤバ。

魔（ま）女（じょ）なんて言うから、もっとファンシーでハートフルなもん想像してた。あなたのお困りごとをなんでも解決！　人間界に夢と希望を

とり戻します的な。

　だけど違う。そんなもんじゃない。こいつらは、アレだ、ディバインなんちゃらとかスターライトなんちゃら的な、大きなお友達大喜び！　方面の魔法少女だ。

「あ、ガーちゃんだ」と、小さい方の女の子――ミラが空の一点を指させば、遥(はる)か遠くから、青い光が接近してくる。目をこらせばやはり彗(ほうき)に跨(またが)った女の子だとわかる。

　てか、さっきはあんな遠くから撃ったのか？　当たったらどうすんだよ！

　近づいてくる女の子の姿は、三角帽(ぼう)子(し)にマントと彗は他の二人と同じ。はちきれそうな胸が、外(がい)套(とう)の下からのぞく。下に着ているのは他の二人と違い、ジャージのようだ。

「さっきのは警告射撃ですが、離れないと、今度はあなたを撃ちます！」

　って、うわ、邪(よこしま)な視線を覚(さと)られたかもしれん！

　この眼鏡(めがね)の子が、ガーネット、なのだろう。眼鏡の奥の瞳が、強く、こちらを睨(にら)みつけている――だけど、なんだか似合わない表情だ。無理して、怖い顔をしているような……じゃなくて。撃たれる？　まずいって！

　オレはソクラテスじゃないので冤(えん)罪(ざい)で死ぬなんて御(ご)免(めん)である。だから必死に弁明。

「オレは悪魔(ソディアック)じゃない！　ただの記憶喪(そう)失(しつ)！　そもそも、えとわーるって何？　ぞでぃあっくって食べれる？　くらいの一般人！　気がついたら落下してて……」

　ガーネットの彗の先がチャージ中の波動砲のように、攻撃的な輝きを増す。

　だんだん小さくなるオレの声。

「み、認めよう！　自分でも無茶だと思う！　でも助けてくれ！　オレは悪(あく)魔(ま)じゃない！」

「はーい！　お助け魔女(エトワール)が助けるよ！　ミラちゃんの手に掴(つか)

まってねー」

「おいおい、騙だまされてどうするよ、アンタ」

「そうです！　こんな怪しい一般人、いるわけがありません。悪魔ゾディアックに決まってます」

「だから！　そうじゃなくて、オレは！　ただの記憶喪そう失しつの一般人！」

　無理ゲーの次は、ループゲーの始まりだった。

　悪魔ゾディアックだ→違う→じゃなんだ→一般人だ→そんな一般人どこにいる、悪魔ゾディアックだの無限ループ。

「むむむむむむむむむむ…………もみ――――ッ!!」

「ぎゃあああああああああああああああああああ!!」

　埒らちのあかない会話にキレたか。ミラが突然叫んで、オレのもみあげをグリグリする。

「くんくん……くさい。でも、嘘うそをついてる匂いはしない」

　な、何するんだいきなりと思ったが――もみあげの匂いでわかるのかよ。

「む……ミラがそう言うなら、そうかもしれないけど……」

　と、スピカ。わかるらしい。そういう特異な能力の持ち主のようだ……まあ魔ま女じょだしな。

　とにかく何でもいい、これでオレが悪あく魔まじゃないって証明されたろ？　さあ早く助けてくれ、と言おうとして――その刹せっ那な――大気が震えた。

　突とっ如じょ、鳴り響いた、獣けものの雄お叫たけびのような声。

　それは、音というより、もっと直接的な空気の振動と化してオレの肌をビリビリと震わせる。思わず、耳を両手で塞ふさぐ。

　ヤバイ。頭で考えなくてもわかる。何か、ヤバイもんが、来た。

　オレをとり囲んで、あーだこーだと言い合いを続けていた魔女エトワールたちの雰ふん囲い気きが、一気に緊張する。

　次の瞬間、人の背せ丈たけほどもある漆しっ黒こくの「何か」が、ものすごいスピードで、オレたちの直近をかすめ、眼下の街へと落ちていく。

そして――。
　着地――というより、それは着弾。まるで大きな爆弾が落ちたように、それは赤く弾(はじ)けた。黒と赤の爆炎とともに、衝撃波が円形に広がり、街並みが崩れていく。
　再び、上空から雄(お)々(お)しい唸(うな)りがあがる。
　間違いない。オレより上の空に、何かがいる。
　そして、今のは、それからの……攻撃？
　だけど――声が聞こえた方の空を見上げても、何も見えなかった。
「お、おい!?　今の声、何だ――」
　慌(あわ)てて周囲の魔(ま)女(じょ)たちに聞こうとするが――その姿は、既(すで)にない。
　オレはまた独りぼっちで空から落ちていた。
　赤、青、黄の光点が高度を上げていく。どうやら、行ってしまったらしい。
「ちょ、ちょっと、おい……一体何なんだよ……もしかして置き去り……？」
『あれが本物の悪魔(ゾディアック)よ。本体は、魔女(エトワール)にしか見えないけどね』
　呆(ぼう)然(ぜん)として呟(つぶや)くと、離れていったはずの――スピカの声。
どっから!?
『アンタの側(そば)に、落ちてるでしょ。星形のヤツ』
　あ。帽(ぼう)子(し)についてた星形バッジがオレのすぐ近くを、一緒に落ちていた。
『スターリットっていうの。通信機。場所もわかるから持ってて』
「あ、ああ。で、今のは一体……？　あれが悪魔(ゾディアック)ってやつなのか!?」
『詳しく説明してる暇(ひま)はないの！　今は手が離せないけど、絶対あとで助けるから！』
　切(せっ)羽(ぱ)詰(つ)まった口調。なるほど、彼女たちの言う悪(あく)魔(ま)――悪魔(ゾディアック)が本当に現れて、だから、オレは悪魔(ゾディアック)じゃないって納得し

てくれたらしい。でも、問題は……。
「いや、でも、もう結構地面が——」
　迫っていた。このままだとあと数分で激突だ。空気抵抗が最大になるよう、四(し)肢(し)を広げてじたばたするが、んなもん、焼け石に水。だけど。
『お願い！』だけど、それでも、彼女は言った。『アタシを、信じて』
　……。
　オレは記憶喪(そう)失(しつ)だ。いきなり空から落ちていたら悪(あく)魔(ま)呼ばわりされて、突然、下の街が爆発し、戦いが始まった。何がなんだか、サッパリわからない。けれど——、
「……ちゃんと、迎えに来いよ」
　なぜだか、彼女は信じられる気がした。
『アリガト』
　そして、オレが彼女を信じたことが、彼女にも伝わった気がした……。

『ガーネット、こっちは準備ＯＫ！』
『こちらも大丈夫です。ミラちゃんは？』
『いつでもどーぞ！』
　星形のバッジ——スターリットから、三人の少女たちの声がする。
『それじゃ、行きます！』
　ガーネットの言葉が合図となって。
『ＳＴＡＲ！』スピカが叫ぶ。
『ＭＩＮＥ！』ミラが叫ぶ。
『ＧＩＲＬ！』ガーネットが叫ぶ。
『ＡＥＲＩＡＬ——ＳＨＯＯＴ‼』そして、三人の声が、重なる。
　昼間だというのに、まるで打ち上げ花火のような極(ごく)彩(さい)色(しき)の三つの光が乱舞する。
　赤の光は、軽やかに。

青の光は、涼やかに。

黄の光は、華やかに。

放たれた光は、遥かな空に焦(しょう)点(てん)を結び——虚(こ)空(くう)から、咆(ほう)哮(こう)が轟(とどろ)いた——。

これは……悪魔(ゾディアック)の声……？　悲鳴……？　あそこに、いるのか？

彼女たちは、見えない敵と戦っているのか？

赤い光が大空を舞う。

変則的な機動で相手を攪(かく)乱(らん)しながら、優雅に弧(こ)を描く赤い光弾を連射する。

青の光が光線を放つ。

冷徹な狙(そ)撃(げき)手(しゅ)のように、幾(いく)筋(すじ)もの青い光条が、精確に、規則的に空を貫(つらぬ)く。

黄の光が突撃を行う。

自(みずか)らを黄金の弾丸に見立て、立ち塞(ふさ)がる全てを粉(ふん)砕(さい)すべく、突進していく。

わずかな間をおいて——突然、空が爆発した。

一(ひと)際(きわ)大きな咆(ほう)哮(こう)が轟(とどろ)く。

そこに混ざるこれまでにない声色の正体は、無念の想いか、怨(えん)嗟(さ)の憎しみか。

悪魔(ゾディアック)の姿が見えていないオレでもわかる。敵を倒したのだ。

「やったか！」と快(かい)哉(さい)をあげるオレ。

なのに……。

再び、空を、大気を、震わせる咆哮が響いて、オレは耳を塞(ふさ)ぐ。

『な……もう一匹いた？　なんで!?』

『ミラちゃん、戻って！　罠(わな)よ！　私たちの行動パターンが、学習されてる！』

会話から察するに……二匹目の敵が現れたらしい。

再度、交戦に入る三つの光。だが……赤と青の光が、心なしか弱くなったように思える。最初の一体を倒すのに、力を使いすぎたと

か？　一体目は、そのためのオトリだった？

　敵の放つ黒い球体を回避する三人。防戦一方なのがわかる。

　だけど、そんな中、果か敢かんに赤の光が敵に接近しようとする。まて、無む謀ぼうだ。

『スピカちゃん!!　いったん退ひいて、体勢を立て直しましょう！』

　そうだ、危ない！　やめろって……。

『ここで退いたら、間に合わない!!』

　え？　何を？　間に合わないって何に？　いいやわかっている。決まっている。オレだ。オレを助けるのが間に合わない。つまり、あいつはオレを助けるために無謀な突撃をやらかしているのだ。見ず知らずのオレのために。

「まて、やめろ！」

　スターリットに叫ぶオレ。だけどスピカからの返答はない。

　輝きを増した赤い光に、黄色の光が追つい随ずいする。慌あわてた様子で援護する青。

　スピカは、新たな悪魔ゾディアックを挑発するかのように、曲芸みたいに飛び回る。

　虚こ空くうから、憎々しげな咆哮とともに、無数の黒い弾丸が彼女に向かって飛んだ。

　きっと、それが隙すきとなったのだろう。

　スピカが攻撃を引きつけた刹せっ那な、ガーネットが放つ青の光線をつゆ払いにして、ミラが、再び金こん色じきの砲弾となって突撃していく。新たに巨大な爆発、そして爆音の中から、断末魔の叫びが漏れる。やった――今度こそ、倒したはずだ。

　だけど、赤の光ときたら、まるで敵を倒したことなんてどうでもいい、と言わんばかりの様子で、今度は全力で高度を下げ始める。

『ス、スピカちゃん!?　そんなに加速したら！』

　ガーネットが悲鳴みたいな警告。自由落下するオレはもちろん、先さき程ほど悪魔ゾディアックが放った黒い球体の速度も超える、猛烈なスピードでオレに向かって飛んでくる。

　つまり地面に向けて。
「いや、もう、いいよ。地面すぐそこだし。間に合わない」
　オレは妙に冷静に、判断して言た。常識外れの展開の連続で頭のどこかが麻ま痺ひしたか。
『絶対間に合わせる!!』
　だけど、スターリットから、そんなオレを叱しかりつけるようなスピカの大声。
「来るなって!!　やめろってば！　人の話聞け!!　話せばわかる!!」
　だから、オレは焦あせる。たとえ間に合っても、ガーネットの言葉どおり、この高度とあの速度じゃ減速が間に合わない。だからオレは叫ぶ。
「おまえら命を懸かけてあいつらと戦ってるんだろ！　なんか知らないけどヤバいやつで、戦えるの、おまえらだけなんだろ。おまえらがどんな世界に住んでて、どんな理由で戦ってるのか、全然知らないけどさ。おまえら、世界を守ってるんだろ？　だから、お前は死んじゃだめだって。これからも、世界を守ってやれよ！」
　自己犠ぎ牲せいとか、そういうカッコイイもんじゃない。
　それは違う。絶対違う。
　だけど、彼女たちが必死になって戦う姿を見ていれば、それくらいはわかる。彼女たちには使命がある。守るべきものがある。だから、彼女たちを殺しちゃいけないって。
　だけど、そんなオレの説得を聞き流し、スピカは問答無用とオレを追いかける。
『なんで、そんなこと言うのッ!?』
　だけど。オレの言葉は、彼女の声にかき消される。
『アンタ、悪魔ゾディアックじゃないんでしょ!?　ただの人間なんでしょ!?　こんなところで終わっていいの!?　このまま人生終わっちゃってそれでいいの？　まだたくさんやりたいことあるでしょ？　やってないことばっかりでしょ!?　遊びたいし腹を抱かかえて笑いたいし幸せになりたいし恋だってしたいし、こんなところで終わりなんてそんなの嫌いや

でしょ!?』
　視界の中で、彼女が大きくなる。その肩が、マントの下からのぞく制服が、血に染まっていた。オレと同い年くらいの子が、こんなに傷つきながら、それでも戦っているのだ。
　彼女には戦う理由がある。守るべきものがある。
　そんな彼女を記憶喪(そう)失(しつ)のただの一般人のオレのために殺しちゃいけない。
「だから、オレのせいでおまえが死ぬのはもっと嫌(いや)だ」
『――――ッ!!』
　その一言で、スピカは、減速するどころか、一層加速した。
「バカッ！　何して――！」
『アタシだって嫌！　こんな思いして戦って、あなた一人助けられないのは嫌なの！　誰かが死ぬのなんて、もう見たくないの！』
　そして続く言葉はもう、スターリットごしではなく、直(じか)に告げられた。
「アタシのせいで、死んでほしくない」
　彗(ほうき)に乗った彼女が、オレの身体を抱き寄せる。
　まるで母親に抱かれる赤ん坊のように、強く強く、抱きしめられる。
　ふわりと、自分とは違う匂いが、鼻(び)孔(こう)をくすぐった。
「――でも……ダメかも――」
　悲しげで、少しだけ諧(かい)謔(ぎゃく)を含んだ声が、仄(ほの)かな息の感覚とともに、耳元に告げられた。
　地面は本当にもうすぐそこで、彗は加速しきっている。
　彼女は懸(けん)命(めい)に制動をかけているようだけど、間に合わないのは明らかだった。
「ダメっぽいな」



　不思議と冷静な気分でオレは応えた。一人じゃないからかもしれない。側（そば）に誰かがいてくれる。柔（やわ）らかな身体と、暖かな体温は、死の恐怖を少しだけ、和（やわ）らげてくれる。

　——でも、こいつはどうなんだろう。

　いきなり、オレみたいなやつと死ぬハメになって、後悔しないだろうか。

「あのね……あの……」

　そんな思考が、頭をかすめた時、彼女が、まるで大切な告白でもする時のように少し、だけ言いよどんでから、こう言った。

「……ホントはアタシ、魔女（エトワール）になんてなりたくなかったの。好きでもないのに命を懸（か）けて、見返りは何にもなくて、ただ仲間たちが死んでいくだけで——そんなの嫌（いや）だった」

　絶対に秘密にしておかなければならなかったけど。

　本当は誰かに話したくて話したくて仕方がなくて。

　でも、もう隠す必要もなくなったから、最期の最後に白状した……。

　まるでそんな感じで、彼女はオレに告げた。

　でも、じゃあ、なんで、その、えとわーるに？　なんでこんなに傷ついてまで戦ってるんだ？　だけど、オレのそんな疑問は、続く言葉に永遠に打ち消された。

「ね、キスしよう」

　轟（ごう）々（ごう）と耳を叩く風の音に、聞き間違いかと思ったけど。

「最期だし。初めてだし」

　その細く長い指が、オレの目（ま）蓋（ぶた）に触れる。視界がそっと閉ざされる。暗闇の中、風の音だけが鳴り響く世界で。

「記念にとっといて」

　彼女の声がそっと鼓（こ）膜（まく）を震わせた。

　唇に、柔らかく、少し濡れた感覚があった。

　きっと、オレも初めてだったんだろうな、なんて、記憶もないくせに、なぜか思って。

そして。

激突した。

そうして、オレは死んだ。
はずが……ここは、どこだ？
気がつくと、何もない白い空間にいた。
見渡す限り真っ白な空間だ。精神と時の部屋みたい。何もなければ、誰もいない。真っ白なそこには、巨大なテレビ、というかテレビ型の建造物とでも形容したくなるような代しろ物ものがドーンとそびえていた。他には——他には何もないのか？
——なんだよ、ここは。死んだっていうと、天国か？
「天国でち」
そうか。天国か。……ていうか——。
……ちょっとまて。オレ、誰としゃべってる？
その声に、振り返れば、顔を上げれば、テレビの電源がいつの間にか入っていた。
丸みを残した年代物の巨大ブラウン管に映ったのは、一人の幼女。三つ編みのおさげに、水色の園児服スモック。黄色の帽ぼう子しにカバン。これから幼稚園に行ってきますって感じ。
「正確には、その入り口でちが。もうすぐお迎えがくるでち」
……誰か教えてくれ。どうして、気がついたら記憶喪そう失しつで転落死したあげく、テレビとおしゃべりせねばならんのか。一体、オレが何をしたというのか。
「本当に知りたいでちか？　世の中には知らない方が幸せなこともあるんでち。見たくないものは視みえない。聞きたくないものは聴こえない。憶えていたくないものは——」
しかも幼女は妙に口くち達だっ者しゃだった。
オレが昔、とり返しのつかない間違いを犯し、罪つみの意識に苛さいなまれて、自みずから記憶を失ったかのような言いざまである。

「…………」
　いや、そこで黙るな。否定しろ。そんな憐あわれみの目でオレを見るな。あと鼻もほじるな。
「まあともかく、臭くさい物には蓋ふたというやつでち」
　ふざけるな。オレは臭い物か。
　蓋をされるのか。肥こえ溜だめか。うんこか。
　うんこマンか。
「くはははは！　うんこマーン！　ぶりぶりうんこ男！　ぶりぶりっ！　くしゃーい！」
　そんなオレの思考に突とっ如じょ笑いだす幼女。どうもお気に召めしたらしい。
　賢さかしらぶったセリフを吐いてはいても、所しょ詮せんは幼児、下ネタ大好き、という本質は隠せまい……なんて思ったのが幼女の気に障さわったらしい。
「あたちは、幼児などではないでち！　かみしゃまでち！」
　胸を張ってそう、宣言した。
　は……？　神様？　おまえが……？
　いや、でもな。たしかにここは天国っぽいしな。
　上空数千メートルを落下する記憶喪失の一般人がいるなら、幼女の神様がいてもおかしくないかもしれん。実際、オレは、この幼児とテレビごしに話してるしな。しかもテレパシーっぽい何かで。何らかの力を持っているのは間違いなさそう……だが……。
　……そうすっと、マジか？　マジで、こいつは神様なのか？　ていうと、なら……。
「……別に信じなくてもいいでちよ。では、そろそろ時間なので、もういくでち。
　トーエン準備完了でち。いってくるでち」
　ハンカチやら何やらをカバンに詰めて幼女が言う。
　いやまて！　行くな！　おまえ、神様なんだろ？　じゃあ、オレを生き返らせたりできるんじゃないのか？　だって、これで終わりじゃ

物語としてメチャクチャすぎるよ！　オレを復活させてくれて、もう一度、チャンスを与えてくれるんだろう？

　とにかくサクッとザオリクとかリレイズ・デッドとかかけてくれよ。

　Ｄｉ(ディ)は勘(かん)弁(べん)な、失敗すると灰になるから。

「えー。めんどくしゃいでち」

　そんなこと言わないで！　だって気がついたら記憶喪(そう)失(しっ)で、落下して死亡、ですよ？　不条理すぎるでしょう？　不(ふ)憫(びん)すぎでしょ！　理(り)不(ふ)尽(じん)でしょ！　こんな甲(か)斐(い)のない生き方、神は認めないですよね？　さっすが、神様！　慈(じ)悲(ひ)深い！　生き返らせてくれますよね？　それとも、こんな不幸なオレを復活させてくれないってことは、もしかして、できない？　そんなことないですよねー？

「誰がそんな挑発に乗るんでちか？　もっとたのちく挑発してほちいでち。

　そもそも理不尽な死に方をする人は、うんこマンだけじゃないでちよ？　ムササビを撃ってて死ぬ人もいれば、膝(ひざ)くらいの高さから落ちて死ぬ人もいるでち。うんこマンの死に方は十分理屈が通ってるでち。人間の一生は平等ではないのでち。生きるってことは不条理ってことでち。問題は死んだ理由じゃなくて、生き返りたい理由でち。どうして、うんこマンは生き返りたいんでちか？　それにどんな意味があるんでちか？」

　いや、死ぬのは誰だって嫌(いや)だろう。常識的に考えて。

「そんなの理由にならないでち。

　かみしゃまのあたちは、いろんな死人を見てきまちた。いろんな人を生き返らせまちた。でも、みんな感謝するのは最初だけ。すぐに生き返ったことなんて夢みたいに忘れ、また同じ日常を繰り返すんでち。そして、しがない一生を終えるんでち。

　どうしてそんな人のために、あたちが力を貸すんでちか？　本当に、生き返る意味があるんでちか？　それは、かみしゃまも、見ていてたのちい理由でちか？」

　マジなんだか、バカにしてるんだか、わからない質問を投げかけてくる神様。

　生き返る意味。目標の目標。そんなものが今の自分にあるのか？　ない。あるわけない。今のオレには記憶がないのだから。

　記憶がない。つまり自分というものがない。達成するべき目標も、守るべき誰かもいないはずだ。だから未練というものがない——と。

　そのはずだった。たしかにそうだ。なのにオレは、まるで小骨が喉(のど)につかえたように、どうしても天国に行くというのが納得できなかった。

「だいたいでちね、そんなに生き返りたい生き返りたいといいまちゅけど、本当にいいんでちか？　死んだ時のこと、ちゃんと憶えてまちか？」

　それは神様の力か、それともオレの記憶の暴走か。

　その言葉にうながされ。

　唐(とう)突(とつ)に、最期の瞬間の感覚が。

　地面に激突した時の痛みが。

　甦(よみがえ)った。

　死んだ瞬間の感覚が、無限に引き延ばされて、再現された。

　痛いやだイタイ痛い痛いやだやだ痛いイタイイタイ痛い。

　全身がどうなっているのかわからない。感覚だけは研(と)ぎ澄(す)まされて、刺すような千(ち)切(ぎ)れるような潰(つぶ)されるような痛みが全身を苛(さいな)んでいた。目は見えていたけど全てが何だか赤くて、腕が変な方向に曲がっていて、なんか白いの突きだしてて、でも、そんなことを認識する以前に、痛くて痛くて堪(たま)らなくて、だけど痛いと叫ぼうとする口はゴボゴボいって血がとめどもなく溢(あふ)れていた。どうしようもなく息苦しかった。折れた肋(ろっ)骨(こつ)が肺(はい)に突き刺さって、その機能を完全に奪い、オレは地面の上で溺(でき)死(し)しようとしていた。痛いやだイだ痛イイタイ痛いやいイタタイ痛だやい痛い。気を失いたい。でも痛くてそれもできない。だから早く死にたい。死なせてくれ、とそれだけを願うオレがいた。

「忘れてまちたか？　死ぬっていうのはこんなに辛(つら)いことでち。こんな思い、繰り返してまで生き返りたいでちか？　生き返って、本当にいいんでちか？」

　嫌(いや)だ。拒否。否定。否認。ネガティヴ。こんなのは嫌だ。

「ま、そろそろ、お迎えもくるはずでち。こっちの世界も、住み心地は悪くないでちよ」

　生き返ってどうするんだ？　また、この痛みを再体験するのか？　嫌だ。絶対嫌だ。身体は原形をなくし、散乱した死体がそこにあった。二人の身体は完全に、ひとかたまり。赤いのやら白いのやらドロロの脳(のう)髄(ずい)やらが混ざって、どっからどこまでが自分かも……。

　……二人の身体？

　再来する過去の痛みと、死の直前の光景の中。

　ようやくオレは小骨の正体に気づいた。

　オレが、生き返らなきゃならない理由。人生、やり直さなきゃならない理由に。

　思いだしてしまえば、なんで忘れていたのか、と思うくらい、自明だった。

　オレは、あの子を、スピカとやらを助けなきゃいけない。

　だっておかしいだろう？　よくわかんないけど、彼女はたぶんオレと同い年くらい。なんでそんなコが、なんで世界の全てを背負ってるみたいに、エトワール、だっけ、になって、嫌々戦わなきゃいけないのか。おかしい。絶対におかしい。

　彼女は、最後に、その人生の最期に、オレにキスをしてくれた。

　思いだせ、彼女の言葉を。

　このまま人生終わっちゃってそれでいいの？　まだたくさんやりたいことあるでしょ？　やってないことばっかりでしょ⁉　遊びたいし腹を抱(かか)えて笑いたいし幸せになりたいし恋だってしたいし、こんなところで終わりなんてそんなの嫌(いや)でしょ⁉

あれは――彼女自身の悲鳴だったのだと思う。あれは、自分のことだったのだと思う。

やりたいことがある。やってないことばかりだ。遊びたい、笑いたい、幸せになりたい、恋をしたい――そして――こんなところで終わりたくない……。

彼女はきっと、そう思っている。

あの子は、きっと、恋愛なんてできるような立場になかった。命を懸(か)けて、戦って、戦って、戦って、戦い続けなければいけなかった。もうその戦いの中で、擦(す)りきれてしまいそうになるくらい戦って、でも、結局、望んでいた幸せは得られなくて――。

だから最期にキスくらいはって。

その大切な思い出を。ただ空から墜(お)ちてきただけのオレに、預けて、死んだ。地面に叩きつけられて。あの綺(き)麗(れい)な顔も、柔(やわ)らかい唇も、温かな肌も全部、真っ赤な肉片になっちゃって、終わった。

そんなの、アリか？　それでいいのか？

決まってる。アリなわけない。いいわけない。

彼女は幸せになるべきだ。普通の日常を手に入れて、それから好きな人を見つけて、ちゃんとキスして、家庭とか作って、いろいろやって、年をとって、死ぬ前にいろいろ思いだして、ああいい人生だったなって、最期に笑ってから死ぬべきだ。あいつにはそうするだけの権利がある。あの眼を見ればわかる。あいつは、それくらい辛(つら)い思いをしてきた。

だから――。オレは、生き返る。

人生をやり直して、彼女を幸せにしてみせる！

だから、お願いだ。オレを生き返らせてくれ！

「いい顔になったでちね。でも、うんこマンに何ができるんでちか？　うんこマンはただの人間でち。彼女の代わりに戦ってあげる力はないでちよ？　本当にいいでちか？」

念を押すように、神様（幼女）が言う。

その問いの意味がオレにはわかる。オレは特殊能力を持ってるわけ

じゃない。ごく普通の人間だ。そんな人間が、分不相応な望みを抱けば、待っているのは絶望と挫ざ折せつ、そして敗北だろう。だけど。

——このまま人生終わっちゃってそれでいいの？

だからといって諦あきらめることなんかできなかった。

「それでも生き返りたいと思うなら——あの扉とびらをくぐればいいでち。左でちよ」

神様（幼女）が指さすそこに、三つの扉とびらが、いつの間にか現れていた。

「そろそろ、お迎えもきたようでちね」

神様（幼女）の言葉に導みちびかれるように、遥か後方、虚こ空くうに渦うずが巻いた。悪魔ゾディアックを連想させる闇が、周囲に広がっていく。蒸じょう気きのような音が、徐々に近づいてくる。

「いくか、諦あきらめるか、選ぶといいでち。あの痛い痛ーい思いをもう一度してもいいというんなら、あたちはもう、止めないでち」

再び甦よみがえる、最期の瞬間の苦痛。

痛いやだイだ痛イイタイ痛いやいイタタイ痛だ。

身体は正直だ。オレがいくら息巻いたところで、あの記憶が全てを拒絶する。もうあんな思いは嫌いやだ、二度とゴメンだ、と全身の毛穴から冷や汗が噴きだし、がくがくと脚が小刻みに震える。カクンと、膝ひざが、崩れた。

怖い。怖い。怖い。死ぬのは怖い。痛いのは怖い。

だけど。

ガクガクと震えるオレの脚は。それでも、立ち上がろうとしていた。

ガタガタと震えながら、それでも、立ち向かおうとしていた。

オレの魂たましいが言っていた。

怖い。痛いのは怖い。怖いよ。だけど。何もしなかったらヤバイってわかっていて、それでも何もしないで……やっぱりそのとおりになってしまう方が怖い。

そう言っていた。

そうだ。そのとおりだ。オレは諦めない。

「立つでちか。恐ろしくないのでちか」

恐ろしいに決まっている。けどな。それがどうした。人生はバスカーヴィル家の犬だ。恐ろしいのが当たり前なんだよ。

それにな。オレは、思いだす。彼女の最期の顔を。全てに疲れたような、もうどうでもよくなってしまったような顔を。きっと彼女が今日まで経験してきた絶望に比べれば、オレの痛みなんてたいしたもんじゃない。だから——。

「行ってくるぜ、神様！」

オレは口に出して叫ぶ。

オレは走りだす。後ろから迫る黒い闇の音は、どんどん大きくなってる気もするけど全力で無視。この世界の遠近感はなんだかデタラメで、いくら走っても扉の大きさは変わらない。一生近づけないんじゃないか、なんて不安がちらりとよぎる。

後ろから迫る闇は鋭い歯で噛(か)みついたりはしないし、太い身体で締めつけたりはしない。ただ深く静かに広がって、何もかも呑(の)み込んでいくだけ。一度、その腕に捕らわれれば、待っているのは、苦痛ではなく安らぎだろう。

だから、本能は従おうとする。闇の中に身を預けようとする。破裂しそうな肺(はい)が、もつれそうな脚が、止まってしまえと誘惑する。

闇は勢いを増し、近づく音は耳を包むほど。そして目指す扉(とびら)は、遥(はる)かに遠い。

それでも、立ち止まるわけにはいかなかった。

「んなわけあるかアホ！」オレは叫ぶ。「うらららららららららららららららららららら!!」

叫びながら走る。叫ぶことができるなら、オレはまだ存在している。まだ死んじゃいない。走ることができるなら、やり直せる。そして走る理由は確かにある。

オレは生き返らないといけない。彼女が、あんな終わり方をしていいはずがない。

「マンガみたいに世界を救わなくてもいい！　つまらない日常でも構わない！」
　かすれかけた喉のどから最後の叫びを振り絞る。
「何回バッドエンドを迎えても、オレはリベンジしてやる！」
　オレの身体が加速する。闇を引き離す。目指す扉が一気に大きくなる。
　左の扉を、光の速さで突き破った。
「それで、最後に辿たどり着くのは――誰にも文句を言わせたりしない――
　ハッピーエンドだッ!!」

　夢を見た気がする。だが、夢の中身は忘れてしまった。
　オレは、記憶喪そう失しつ。上空ン千メートルを、紐ひもなし、パラなしスカイダイビングしていた。
　混乱の中、滅ほろびの呪じゅ文もんを唱となえていると、突然、彗ほうきに乗った少女がやってきて、「じゃあ何なのよ。アンタの名前は？　教えて」と問いかける。
　その瞬間。
　唐とう突とつに記憶が戻ってきた。前回もこうして落下していたこと。目の前にいる魔女エトワールの名前が、スピカで、悪魔ゾディアックと戦っていること、二人でキスして死んだこと、オレは天国に行って、生き返って戻ってきたということ。
「……急にどうしたの？　なんか変な顔。キモい」
　唐突に甦よみがえった記憶に戸と惑まどっていると、そう言われた。
　キスまでした相手に言われると、結構グッサリくる言葉である。
「それより名前。ま、言いたくないなら始末しちゃうだけだけど」
　スピカの彗の先に光が灯ともる。まずい。撃たれたら死ぬ。死ぬと痛い。
　考えろ。前回はどうして死んだ。
　オレは「記憶喪失のただの一般人」なのに、悪魔ゾディアックと疑われ、

あれこれ問答している間に、本当の悪魔ゾディアックがやってきて、しかもその悪魔ゾディアックは二体一組だったために、彼女たちは苦戦し、気がついた時には、オレはどうにもならないところまで落下していた。

　それを変えなければならなかった。まずは早さっ急きゅうに身の潔けっ白ぱくを証明し、オレが前世の記憶を持っていることを知らせて、悪魔ゾディアックについての情報を彼女に与えなければならないのだが、どうやって――。

「アタシもあんまり暇ひまじゃないからさ。さっさと終わらせちゃうわよ」

「げぇっ、ちょ、ま」と焦あせったオレ、

「あ――――――――ッ!!　あ、あ、あそこに悪魔ゾディアックが――――――――――――――――――――ッ!!」

　もう、ヤケクソ。渾こん身しんの力で叫びながら空を指さす。

「アンタさ、小学生？　今時誰がそんな手に――」

「あー、ホントだ。すげー！　あんな遠くの、よく見つけたねー」

　いつの間にか、ミラも側そばに来ていたらしい。つられてスピカもそちらを眺める。

「マジ？　ガーネット、ちょっと見てくれる？　方位３００、高度75――くらいかな」

『――あ、はい。悪魔ゾディアック、確認しました』

　スターリットでガーネットと交信するスピカ。ほっとするオレ。どうやら、悪魔ゾディアックは前回と同じ位置から同じようにやってきているようだ。これが変わっていたりすると、さっきの記憶なんて、何の役にも立たなくなってしまう。

「ん。しょうがないか……。なーんか納得いかないけど、とりあえずアンタは白シロ」

　全然、納得できてない顔だった。今日はとりあえず釈しゃく放ほうしてやるが、真犯人がお前だってことはわかってるんだぞって顔でオレを睨にらんでいる。

「で、アンタはなんで空から墜ちてきたの？」

「オレが聞きたい。オレ――記憶喪(そう)失(しつ)なんだ」
「は？　何言ってるの？」
『スピカちゃん、いい？　そろそろ出番よ。いつものように、上空で迎え撃つ――』
「ちょっと待った！　――それはまずい！」
　反射的に大声で割り込む。言い争っている場合ではない。
　いつものように、ではマズいのだ。たぶん。
「悪魔(ゾディアック)は、学習してるんだ。前回と違って、こっちの作戦が読まれてる。だから……」
「アンタ……記憶喪失じゃなかったの……？」
「それは、そうだけど!!　オレには前世の記憶があって、今日をすごすの二回目で、だから、オレは、オレのこれまでは知らないけど、この世界のこれからは知ってるんだよ!!」
「……アタマ大丈夫？　さっきから言ってることおかしいんだけど」
　前回、最期に見せてくれた表情はどこへ行ったのか、呆(あき)れたようにスピカ。何かヘンなモノを見るかのような目。いや、オレが逆の立場でもそうだと思う。だけど詳しく説明している時間はもうなかった。
「もみー！」
　ぎゃぁぁぁぁぁぁ！
　前回同様、ミラがもみあげに飛びついてくる。
「くんくん……うー、嘘(うそ)をついてる匂いじゃないけど」
『……真(しん)偽(ぎ)を確かめる時間をちょうだい。まず悪魔(ゾディアック)の進路を変えるから』
　ミラの判定を受けて、スターリットからガーネットの声。
「地面に落とすの？　こんなヤツの妄(もう)想(そう)、無視しちゃえば？」
『アリデッド先生の決定よ。嫌(いや)なら、スピカちゃんが交(こう)渉(しょう)してね』
「……了(りょう)解(かい)」
　会話の内容から察するに、どうも、半信半疑ながらも、オレの話を

聞いてくれたらしい。

　魔女エトワールたちが高度を上げる。傍かたわらには、前回同様、スターリット。

『すぐ戻るわ。これ、スターリットっていうの。通信機。場所もわかるから持ってて』

「わかった。気をつけろよ」

『アンタに言われるまでもないわ。遠くから撃って天象儀カール・ツアイスへの直撃を回避するだけの単なる時間稼かせぎ。それより、アンタの言ってたことが嘘だったら、覚えてなさいよ？』

　かーる・つぁいす？　時間稼ぎ？　と聞き返す間もなく、魔女エトワールたちの攻撃が始まる。迎げい撃げき地点が早かったのだろう。前回より、遥かに高い位置で、黄金の華が咲いた。

　オレはといえば無事を祈るしかない。

　三つの光が乱舞し獣けものの叫びがあがる。大空に、マグマの華が咲く。

『やたー！』と、スターリットからミラの歓声が聞こえている。やった――のか？

『安心してる場合？　オザキを！』

『スーちゃん、オザキって誰？』

『オザキキヨヒコ。落ちてるあいつの名前』

　――いや、だからオザキじゃないんだが――

『あ、忘れてた！　キヨヒコ、待っててねー！』

　もう、オレの名前はオザキキヨヒコに決定らしい。が、まあ今はそんなことはどうでもいい。諦あきらめた。既すでに地上は迫っていた。前世の記憶と大差ない距離だ。こんな高度で、果たして助けが間に合うのだろうか。これじゃ前回と同じで――なんて思考した矢先――。

「ばびゅ――――ん！」とミラはもう、オレの側そばまで到達していた。早い！　速い！

「ミラちゃんのスピードは全てを置き去りにするのさ！　まさに超特急！　別名シベ超！」

いや、まて、それは置き去りにしすぎだ。

「っつことで、避難所に連れてくから。レッツらゴー!!」

「ぐおっ、が、ぁあぁあぁあぁあぁあぁあ——————!!」

ミラの彗ほうきは、絶叫マシンもかくやという暴れ馬。無事、地表に辿たどり着いた時には、三さん半はん規き管かんがいい案あん配ばいにかき回されて、世界がぐるんぐるんに回っていた。

辿り着いたそこは、〈伊い都と夏げ大学園〉と校門に記された学校らしき施設だった。

「今は避難所だけどねー」

避難所……ていうか大学園って何？　大学院じゃなく？　と思考を巡めぐらした矢先。

またも、悪魔ゾディアックの雄お叫たけびが空を震わせる。

「おー、落ちてる落ちてる」

ミラにつられて、空を見上げる。相変わらず、その姿こそ見えないもの、その身体から発せられた煙が、かなり近づいていた。

「ほいじゃ、ミラは続きがあるから」

「え？　アレで終わりじゃないのか？」

「そんな簡単じゃないてばさー。目玉レセプターを潰つぶさないと、終わらないよ。……あ、そうだ、スターリット返して。そいじゃね。ばびゅ——ん！」

オレから星形バッジを受けとると、ミラは効果音つきで、青空へと戻っていった。

たしかに、大学園という名に嘘うそ偽いつわりはないようだった。幼稚園から各種専門校まで、いろいろ一緒になった施設のようで、遠くを眺めても、キャンパスの端が見えない。一体、どれだけの生徒が通っているのだろうか？　そんな学園が、今や市民の避難所と化している。老ろう若にゃく男なん女にょ、様々な人々でごった返し——奇妙な活気を呈ていしていた。

姿は見えないが、悪魔ゾディアックは恐ろしく強大だ。あんなものが襲っ

てきたら、ひとたまりもないだろう。だというのに、人々の表情には、不思議と不安の色が見当たらないのだ。石造りの通りには露店まで立ち並び、人々は、プラスチックパックに入った弁当やら何やらを手に談笑している。これでは避難所というより縁(えん)日(にち)のような……。

不意に大地が揺れる。オレは思わず身をすくめる。街の遥か向こうに湧き上がる、土煙。

「悪魔(ゾディアック)が……墜(お)ちたのか……？」

だが周囲の避難民たちが恐怖に震える様子もない。多少、音の方向を振り返っただけ。またすぐに、おしゃべりを再開する。

「ホントに緊急時なんだよ……な？」

不安がっているのは自分だけ。まるで世界からとり残されたような感覚。

今、あの空では少女たちが命を懸(か)けて戦っている。それはなぜだ。この人たちを守るためではなかったのか。なのに、そんなこと、全く知らないふうに……。

そんな人たちの姿に耐えきれなくなって、一番手近な建物へ足を踏み入れるオレ。

少しでも、彼女たちの近くにいたい、彼女たちのいる空に近づきたい、そんな衝動に導(みちび)かれるよう階段を上がり――。

屋上では、一人の少女が、カメラを構えていた。向こうも気づいたのだろう。しかし、ちらりとこちらを見やっただけで、またすぐにカメラを構え直す。そのまま、シャッターを押しながら、「あなたは先(さき)程(ほど)、魔女(エトワール)に助けられた？」と声をかけてくる。

なぜ、それを知ってる？　というオレの戸(と)惑(まど)いを察したか、

「……ここから見ていました」

そう言った。彼女の腕には腕(わん)章(しょう)。〝ＰＲＥＳＳ〟の文字。

「おまえ、新聞記者――いや、新聞部……か？」

「日(くさ)下(か)部(べ)雨(あま)火(ほ)。部長です。あなたはなぜ空から墜(お)ちてきたんで

すか？　悪魔ゾディアックですか？」

　こちらが質問に答えたのだから、今度は、そっちの番。そんな感じで彼女が言う。

「違う、と思う。オレ記憶喪そう失しつで……ホントのところは、わからないけど……」

「前からこの街に住んでたんですか？　それとも天蓋グレンツェンの外から？」

「ぐれん……つぇん？」

　何というか、この世界は本当に独特の固有名詞が多い。

「――本当に記憶喪失なんですね。天蓋グレンツェン――グレンツェンというのは――」

　彼女の言葉を、悪魔ゾディアックの唸うなり声が遮さえぎった。

「悪魔ゾディアックが目覚めました」

　オレは彼女につられるよう、屋上から身を乗りだす。駅の辺りに、朦もう々もうと立ち昇る煙。恐らくあそこに、悪魔ゾディアックが落下したのだろう。立ち昇る煙の中から、真っ赤なマグマが湧き上がる。灼しゃく熱ねつの流体が、何かの輪りん郭かくを伝うように落ちていく。

　――見えるのは、輪郭だけ。本体は、見えない。

「悪魔ゾディアックを見るには悪魔ゾディアックの目が要いる。悪魔ゾディアックを倒すには悪魔ゾディアックの手が要る」暗号でも呟つぶやくように日下部。「悪魔ゾディアックを倒せるのは魔女エトワールだけ。だから、あいつらはお呼びじゃない」

　――あいつら？　なんて問いを発する間もなく、地上から、一筋の光が、悪魔ゾディアックに向かって流れた。続けざまに轟ごう音おん。これは魔女エトワールの攻撃じゃない……戦車？

「自衛軍です。でも無駄。人間の武器じゃ傷一つつけられません。まあ、悪魔ゾディアックも、視覚情報を元に動いてるようですから、目くらましくらいにはなるでしょうが」

　日下部の言うとおりなのだろう。大通りに展開した戦車部隊が、悪魔ゾディアックに向け、一いっ斉せいに砲火を放つ。だけど、不可視の悪魔ゾディアックに、効いているようには思えない。

軍隊は怪獣に敵かなわない。怪獣映画の鉄則だ。ここから見ていても、ダメだ。無理だ。早く逃げろ、と叫びたくなる。

ふと……そんな戦車隊の先頭に、人影が見えた気がした。戦車の上に仁に王おう立だちになり、何か槍やりのような棒を振り回している。

女……だろうか。どうして、あんなところに……？

「な、あそこに変なのがいないか？」

「ああ。沖おき姫き々きですか。気にすることはありません。ただの役立たずな生徒会長です」

素そっ気けなく日下部——生徒会長？　なんでそれが戦車隊の先頭に？

「それより、いよいよ真しん打うちのお出ましです」

その言葉どおり、上空から三つの光がマグマの流出元に向けて急降下する。戦車の攻撃とは違う。光が瞬またたくたびに悪魔ゾディアックが叫びをあげ、表面のマグマが爆はぜる。だが……。

「悪魔ゾディアックが、歩いてる？」

黒煙が、マグマが、ゆっくり移動している。見えない何かによってビルが次々に崩れる。

「恐らくは……真実を視認できるのは、魔女エトワールだけですが」

その言葉にはどこか、悔くやしげな響きがある——嫉しっ妬と？　羨せん望ぼう？　のような。

そうこうしている間にも、マグマ滴したたる透明な「何か」から、容よう赦しゃなく黒球が魔女エトワールたちに襲いかかり、流れ弾が市街地のビルを次々と倒壊させていく。そうした悪魔ゾディアックの熾し烈れつな攻撃に対し、魔女エトワールたちの反撃は最低限で、まるで遠慮しているように見えた。

「どうしたんだ……調子でも悪いのか……？」

「悪魔ゾディアックの罠わなを警戒していますね。天象儀カール・ツアイスギリギリまで、探りを入れる気です」

「なんでそんなことを……わかるんだ」

「カルデア司令部の通信、盗とう聴ちょうしてますから」

「カルデ——？」って何？

「黄(こう)道(どう)観測機関カルデア。魔女(エトワール)が属する組織の名前です。伊(い)都(と)夏(げ)大学園天文学部から発足した研究機関という名目ですが、実際には、悪魔(ゾディアック)と戦う戦闘集団ですね」

——ッ！　日(く)下(さか)部(べ)の説明も半(なか)ばに、オレは堪(たま)らず、その耳からイヤホンを奪っていた。

『おいガーネット！　大丈夫かッ！』

『あ、はい、なんとか。でも——そろそろ、限界です』

イヤホンから、聞き覚えのある声がした。フォローするように日下部。

「片方はアリデッド。カルデアの司令。ガーネットを通して、魔女(エトワール)に命令します」

『罠の気配は……未(いま)だありません』

『畜生！　オザキとかいう野郎、デマ流しやがったか……？　だいたい、作戦が読まれてるって何だよ。おい、他には何か言ってなかったのか!?　それだけじゃわかんねーだろ!!』

そこでオレは自分のとんでもないマヌケさに気づく。

オレは肝心な情報を、悪魔(ゾディアック)が一体ではなく二体だということを伝えていなかったのだ。これでは、ただ現場を混乱させただけ。無駄に戦いを長引かせ、彼女たちの力を逆に消(しょう)耗(もう)させているだけである。

「違うんだ！　そうじゃない！　敵はそいつだけじゃない！」

「受信専用。向こうには届きません」

「クソッ！」と、思わず叫んでしまうオレ。対して、日下部の声はどこまでも冷静だ。

『まあいい。どのみちこれ以上は待てねー。攻撃開始だ』

『了(りょう)解(かい)！』という返答とともに、周囲を旋(せん)回(かい)していた魔女(エトワール)の動きが変わる。マグマの中心に向け、一(いっ)斉(せい)に光の弾丸を放った。

魔女たちの彗(ほうき)の色と、放つ光は同色。

赤の光は、機関銃のような、深(しん)紅(く)の連射。

　青の光は、光線銃のような、紺(こん)碧(ぺき)の一(いっ)閃(せん)。
　黄の光は、大艦砲のような、黄金の拳(げん)骨(こつ)。
　戦車の砲弾の時とは違う。敵は確実に苦しんでいた。
　苦しみにのたうつ悪魔(ゾディアック)から、マグマが周囲にまき散らされる。
　そして、黄の光――ミラの光が一(ひと)際(きわ)、輝きを増した。
　前回と同じ、止(とど)めの一撃だ。金色の光に包まれてミラが、自身を弾丸に変え、マグマの中心へと突っ込み――そして、突き抜けた!!
　世界の全てを憎むような、憎(ぞう)悪(お)の叫びが街に響く。
　巨体が倒れたのだろう。付近の建造物が盛大に倒壊した。
『いよっしゃあああああ！　よくやった！　おまえら、よくやった！』
　賞賛の声。だけど違う、違うんだ。まだ終わってない。敵はまだあと一体いる！
「知っていたんですか――？」
　日(くさ)下(か)部(べ)が、別の方向にカメラを向けながら言う。
「さっきのは――囮(おとり)ですね。あなたは、どこでそれを――？」
　つられてそちらを見れば、反対側に、新たなマグマが見えた。
『っ！　ガーネット！　まだだ！　もう一匹いやがった！』
　舌打ちが、ノイズまじりの盗(とう)聴(ちょう)器からもはっきりと届いた。
『ミラは消耗してる！　おまえら二人でやってもらうしかねぇ！　畜生ッ！』
　大地を揺らす巨大な足音。耳をつんざく悪魔(ゾディアック)の絶叫。
　輝きの失(う)せた黄の光を庇(かば)うように、赤と青の光が、悪魔(ゾディアック)を押し止めようと舞う。
　だが二人では、劣(れっ)勢(せい)だ。その歩みを留(とど)めることすらできない。
　悪魔(ゾディアック)は、何かに導(みちび)かれるように、一路、こちらを目指している。
「狙(ねら)いはあそこです」と、日下部のカメラのレンズが、オレたちの後ろ――学園の背後にそびえる小高い山を向いた。その頂上に、巨大

な建造物があった。

　一見すると、学園の分校とも見えるその建物の屋上には、プラネタリウムと大望遠鏡を足して二で割った、巨大な大砲のような何かが設置されていた。

「天象儀（カール・ツアイス）。この世界を支える礎（いしずえ）。あそこから発せられるリネアが、この空なきセカイを支えている。もしも悪魔（ゾディアック）があれを壊したら——セカイが終わります」

「んな」——バカな、という、オレの言葉を先取りするかのように日下部。

「私も、馬鹿げたことだと思います。ですが、少なくとも魔女（エトワール）たちはそれを信じている。そのおかげ——と言うべきか、まだ天象儀（カール・ツアイス）は壊れていない。……だから本当にセカイが終わるかは誰も知らない。終わるのはこのセカイだけか、それとも世界全てかも……。

　でも、それも今日まで。私は、ようやく真実に辿（たど）り着けそうです」

　マグマの侵攻は止まらない。

　オレたちのいる伊都夏（いとげ）大学園のすぐ近くに、見えない悪魔（ゾディアック）の足跡が刻まれ、オレのいる屋上も、絶えず地震じみた振動に襲われている。天象儀（カール・ツアイス）まで、目と鼻の先。

　虚空（こくう）から生まれた黒球が、天象儀（カール・ツアイス）に向かって放たれる。

　それは、不可視のバリアのようなものに弾（はじ）かれたようだが……。

「あと一発、もつかどうかでしょう」と、まるで他人事（ひとごと）のように解説する日下部（くさかべ）。

　いや、むしろ悪魔（ゾディアック）が天象儀（カール・ツアイス）に到達することを期待しているような。

「畜生！　どうにかならないのか！」

「無理ですね。黒槌（スヴァアスティカ）でも駆けつければ、別ですが——」

　だから、そういう固有名詞わかんないってば。

「二十年前、伊都夏市の空から星が消えた大異変（アヴォン・レプス）——。その時この世界に舞い降りた最初の魔女（エトワール）。ですが彼女はもういません。

全ては手遅れです」

「やあああああああああ――――ッ!!」

　その時、オレは、盗(とう)聴(ちょう)器ごしではなく、直(じか)にスピカの叫びを聞いた。

　赤い光をまとい、オレたちのすぐ上を猛スピードで飛び越えていく。ボロボロの外(がい)套(とう)をはためかせ、マグマへと肉(にく)薄(はく)しようとするが、援護が足りない。

　青と黄の光はどこに？　まさか、もう墜(お)とされた――？

　満(まん)身(しん)創(そう)痍(い)のまま、悪魔(ゾディアック)に立ち向かっては、まるで蠅(はえ)のように黒球に追い払われるスピカ。それでも彼女は諦(あきら)めない。自(みず)から(か)らの身を挺(てい)して、悪魔(ゾディアック)の進撃を止めようとしていた。

　そんな決死の努力を、傍(かたわ)らの日下部はどこまでも冷静にフィルムに焼きつけていく。まるで他人事のように。魔女(エトワール)がいくら墜ちようが知ったことじゃないと。

　自分は写真が撮れればそれでもいい、そんな様子だった。ジャーナリストの姿勢としては、それで正しいんだと思う。だけど、この時のオレは、スピカが傷つき、セカイが滅(ほろ)ぼうとしているのに、何もできない自分に苛(いら)立(だ)っていた。

　思わず、日下部に突っかかっていた。

「おまえは、なんでそんなに冷静なんだ!?　このままじゃセカイが終わるんだろう!?」

　恐らく、そんなふうに非難されるのも慣れたものなのだろう。日下部は言う。

「ここで生きれば、人の無力さにも馴れます。

　私は世界の真理を見るんです。セカイの最後の姿を、ファインダーに収めます」

「全部をあいつらに任せて、自分は見物か!?　スピカは、あんなに傷ついても戦ってるんだぞ!?　あいつらはおまえらを守って戦って――」

「黙れ」

　それはことさら大きな声でもなく、激しい口調でもなかった。ただ、ひたすらに冷たく有う無むを言わせぬ言葉だった。初めて、日くさ下か部べが、ファインダーから目を離す。左目は髪に隠れて見えない。だけど、全てを貫つらぬき通すような光を宿した右目が、オレを射い貫ぬく。日下部の背はけして高くない。むしろ低い方だ。オレは圧倒されたように言葉も出ない。
「私たちにできることがあれば、とっくにやっています」
　告げて、カメラと自分だけの世界に戻る日下部。まるで、オレなどここに存在しないかのように。そして、それが——日下部と交わした最後の会話だった。
「たぁぁぁぁああッ!!」
　凜り々りしい声とともに、傷だらけの魔女エトワールが、もう一度、悪魔ゾディアックに飛びかかる。
　だが——もう、手遅れだった。再び放たれる黒球が、不可視の障しょう壁へきを撃った。
　青白い雷かみなりとともに、膜が消える。悪魔ゾディアックが、天象儀カール・ツアイスに到達する。
「やっと……やっと、真実を、視みられる……ああ……！」
　ファインダーを覗のぞき込んだ日下部が歓喜の声をあげる。
　それは、まるで快楽の絶頂に達したかのような、うわずった叫びだった。

　嗚お咽えつするような悪魔ゾディアックの悲鳴。
　灼しゃく熱ねつの涙を流し、天象儀カール・ツアイスを覗くように——。
　虚こ空くうから姿を現すのは——瞳。
　黒い瞳が、深しん淵えんを覗いた。

　世界が、瞬またたいて、消えた。

　で。気がつくと、また、あの真っ白な空間――天国にいた。
「あれだけタンカを切って出ていったのに、もう、帰ってきたんでちか？」
　テレビに見覚えのある顔が映しだされた。神様（幼女）だった。面(めん)目(ぼく)ない。
「早い男は嫌われるでちよ」
　何の話だ。幼女のセリフじゃねぇだろ。
「というわけで、もう、一度生き返らせてあげたんでちから、文句はないでちよね。アナタの人生は今度こそ、ここでおちまい。ジ・エンドとなったのでちた。ぱちぱち」
　ぴんぽーん、という間の抜けた音が、テレビの中で鳴った。
「お友達のオオアリクイちゃんがお迎えにきたでち。あたちはいくでち」
　え、ちょっと待って！　せめてもう一度チャンスを！　お願い!!
　だけど神様（幼女）は無情で――ブツンと、電源を落とした。
　拍(ひょう)子(し)抜けするほど呆(あっ)気(け)なく、世界は静(せい)寂(じゃく)に支配された。
　本当に、行ってしまったのだ――たぶん幼稚園に。
　つまり、今度こそ、死が確定したってこと？　　あれだけ決心したのに……。
　オレは彼女も救えず、自分が誰かもわからず、死ななければいけないなんて。
　がっくりと膝(ひざ)をついてorz ったオレ。その時。
「安心しろ」と、不意に頭上から声が降ってきた。
「おまえに過去はない。オレが保証する。おまえの記憶が甦(よみがえ)ることはないし、おまえの過去が何か物語上で重要な役割を果たすことは絶対にない。おまえにあるのは未来だけだ。だから未来は、おまえが選べ。お前が掴(つか)め」
　さっきまでの舌足らずな幼女じゃない！　ハードボイルドな声だった。

　もしかして、オレに救いの手を差し伸べてくれる、ちゃんとした神様が現れたのか！

　地獄に仏（ほとけ）という心境で顔を上げる。そこに。ブラウン管の中に。

　眉毛を描かれた犬がいた……。秋（あき）田（た）犬（けん）だろうか。

　期待した分、壮絶に脱力……。一体犬に何ができるのか。

「ユミが神様なら、オレが神様でどうしていけない？　……ああ。あの子どもだよ」

　さっきの園児か。たしかに園児が神様でいいなら、犬が神様でも問題ない気はするが。

　……でも眉毛はどうにかならないのか（笑）？

「——この眉毛はオレの誇りさ。オレの今は、全てここから始まった。オレの過去、オレの証明、オレの歴史、おまえにはない全てが、この眉毛にはある」

　風格を漂（ただよ）わせ、きっぱりと告げる神様（犬）。

　笑いたいバカは笑わせておけ。オレはオレの道をゆく。そう言っていた。男だった。いや、漢（おとこ）だった。……負けた。笑ったオレの負けだ。犬に負けた。眉毛に負けた。

「まあ、オレのことはいい。おまえの話だ。それで、まだやる気はあるのか？」

　その言葉とともに何もなかった空間に三つの扉（とびら）が現れた。前回生き返ったのと同じ扉だ。

　生き返らせてくれるってこと？　……この、眉毛が……オレを……？

「い、いいのかよ？　ご主人様に怒られたりしないのか？」

「あいつも、本当はおまえに期待しているんだよ。おまえだったら、この世界を変えてくれるかもしれないって。なにせ、あんなふうに言った死人はおまえが初めてだからな。だけど、望みがデカイってことはハードルが高いってことでもある。あいつはやさしい子だからな。がんばれ、なんて、言えなかった。そんなふうにおまえを励（はげ）まして、おまえが何度も何度も生き返って失敗し、絶望するのを見るく

らいなら、いっそ……そう思ったんだろな。オレももうあいつと長い。言わなくても、考えていることくらい、わかるさ」

　カッコよすぎる眉毛（犬）。

　けれど、それは、同時にオレへの忠ちゅう告こくでもあるんだろう。辛つらいぞ、と、そう簡単じゃないぞ、と言っている。やめた方がいい、と少なくとも神様の一人は判断したらしい。

　それでもやるかと、この眉毛の神様は言っている。

　たしかに、オレはただの人間だ。だけど、オレの望みはそんなにデカイものか？　オレはただ、スピカに普通の人生を送らせてやりたいだけ。それくらいなら、ただの人間のオレだって、何回、死んでも生き返る覚悟さえあれば――できるんじゃないか？

「――そういうセリフは、誰もいないところでやるものだぞ」

　なんてモノローグを呟つぶやいていたら、心を読まれていた。恥ずかしいことこの上ない。

「まあ、いい。どんな勘違いも、最後まで貫つらぬき通せば立派な真実だ。おまえの本気を見せてみるがいい。おまえが挫くじけない限り、おまえは何度でも生き返れるはずさ」

　あ、ありがとう、眉毛！

　――遠くから、あの闇が迫る音が聞こえる。

「それじゃあ、オレ、行ってくる。ご主人様によろしくな！」

　オレは、はっきりと、自分の口で言って、走りだす。

　扉とびらは遠かった。

　けど、オレは知っていた。どれだけの距離を走ればいいかわからない。けれども絶対に、辿たどり着くことはできる。挫くじけさえ、しなければ――。

　そうして、オレはまた伊い都と夏げ市の上空数千メートルに、生身の身体で放りだされ、そこで彼女と再会し――記憶をとり戻す。

「あんた名――」

「オレの名前は！　オザキキヨヒコッ！　しかし、記憶喪そう失しつなの

でそれ以外のことは不明！
　何を聞かれてもさっぱり全然わからないので質問タイム終了！　ってことで——。
　あ————————ッ!!　あ、あ、あそこに悪魔（ゾディアック）が——————————————————ッ!!
　しかも悪魔（ゾディアック）は、二体重なってるぞ——————————————————————————ッ!!」
　スピカと話していても埒（らち）があかないのは二度の経験でわかっている。もう、ここは一気にかっ飛ばして、ウヤムヤにしちまうしかない。怪しいと思いつつも、一応、オレの言葉を信じてくれることもわかったし。
　そんなわけで伝えるべきことを、強引かつ一方的にしゃべって、オレは、前回同様ミラのスーパーアクロバット飛行で伊都夏大学園に、到着。
「なあ、ミラ。このスターリット、もうちょっと借りてていいか？　オレが直接、スピカに返したいんだ。その、えーと。……直接お礼が言いたい——」
　もちろん、嘘（うそ）である。魔女（エトワール）たちと通信できれば、オレにも何かできるかもしれないと思ってのことだ。が……。大丈夫だろうか、ミラのあの能力の前では、こんな言い訳……。
「もみー！　くんくん……うー、やっぱり嘘だ！　何か、企（たくら）んでるね！」
　やっぱりもみあげられた……どうする？
「あとでちゃーんと、返してあげてね。約束！」
「え？　借りてて、いいのか？」
「悪いこと企（たくら）んでるわけじゃないでしょ？　そんならいいのさー。もしかしたら、何かの役に立つかもだし。じゃあね、生き残ったらどっかで会おー！　ばびゅ——ん！」
　前世の記憶どおり、効果音つきで飛んでいくミラ。
　空から、煙を上げて悪魔（ゾディアック）が墜（お）ちているのが見えた。

　さて。街が危ない、火が迫る、帰ってきたぞうんこマン、なわけだが。

　あいつらが二体だと伝えることができたが、伝えたところで、魔女（エトワール）たちが一体の悪魔（ゾディアック）で手一杯という事実は変わらない。知っていたから倒せるというものでもないのだ。

「このまま指くわえてて、たまるか」

　もう、死ぬのはゴメンだった。死なせるのはもっとゴメンだった。

　オレは〈伊（い）都（と）夏（げ）大学園〉と書かれた校門に、背を向ける。向かう先は——大通りだ。

　オレはスターリットをしまい、全力で走る。

　前世で屋上から見た街並みを思い出しながら、目指す場所に向かう。

　入（にゅう）道（どう）雲（ぐも）のような黒煙と土煙を上げ、真正面から、悪魔（ゾディアック）の影が姿を現す。

　そして、ビル群に反響する金属音。振り返れば、怪獣の侵攻を阻（そ）止（し）せんと立ち塞（ふさ）がる戦車隊。捜していた連中と合流できたわけだが——オレは、自分の目を疑った。

「全隊止まれ——ッ!!」

　その先頭車（しゃ）輛（りょう）の装甲の上に乗って指揮を執（と）っていたのは、一人の少女だ。薙（なぎ）刀（なた）を構えセーラー服の上から学ランを羽（は）織（お）っている。威（い）風（ふう）堂（どう）々（どう）としたその姿は女サムライのごとし。だが、年だってオレとそう変わらない子が、なんで戦車の上に……？

　日（くさ）下（か）部（べ）の言葉を思いだす。これが、沖（おき）姫（き）々（き）——生徒会長？

「撃てぇ————ッ!!」

　だけど、そんな疑問は砲撃の風圧と爆音にかき消された。

「うぉっ！　ちょっと、ちょっと待て！　危ないだろッ！　ここに人が——」

「撃てぇ————ッ!!」

　再び一（いっ）斉（せい）射（しゃ）。戦車の砲塔は仰（ぎょう）角（かく）を上げて巨大な悪魔（ゾディアック）に照（しょう）準（じゅん）を合わせているから、オレに当たることはなかろうが、

怖くないわけがない。鼓こ膜まくも痺しびれる。オレは慌あわてて戦車に駆け寄り、その装甲に這はい登る。

「あ、あ、あ、危ないだろうがッ！　オレに当たったら、どうする気だ！」

「知るか。貴き様さまが勝手に立っていただけのことだろう。一般人には避難命令が出ているはずだ。貴様何者だ。場合によっては、拘こう束そくさせてもらうぞ」

「オレの名前は――オザキキヨヒコ。記憶喪そう失しつだ！　気づいたら、空から落下してた！」

「ほう……先さき程ほどミラが引っ張ってきた……。面白い。外からの来訪者、か……」

　近距離から響く悪魔ゾディアックの叫び声に、オレは思わず身をすくめる。

　だけど、沖おきは、まるでかかってこいと言わんばかりに悪魔ゾディアックに対して胸を張り（驚くほど平へい坦たんだった）――それからオレを見て、不敵に笑った。

「私は沖姫き々きだ。この軍の臨時指揮官をしている」

「指揮官!?　なんで？　大人は、いないのか――？」

「この年で悪あく魔まと戦うのがおかしいか？」と、うながすように空を見上げる沖。

　空に舞う魔女エトワール。入れ替わるように戦車の砲撃はやんでいた。

　沖が薙なぎ刀なたを振ると、戦車隊が後退を始める。

「あの魔ま女じょどもは、沖よりも年下だぞ。そして実際、世界を守るのは、あの魔ま女じょどもなのだ！　柳楽山やぎらさんからは自じ粛しゅく要よう請せいが来る。同士撃ちを避けろとな。そして我われ々われは、ヤツらに従わねばならん……」

　吐き捨てる横顔は、なんだか非常に悔くやしげだ。

　てっきり、オレは、自衛軍は魔女エトワールたちの味方だと思っていたけど――。

「あいつらと、仲悪いのか？」

「当然だ」と断言する沖。「なぜ我々が自みずからの運命を、他人に任せねばならん。そもそもヤツらは、悪あく魔まの手先かもしれん。魔ま女じょは悪あく魔まと契けい約やくするもの。古来からそう決まっておろう？　悪あく魔まが来る限り魔ま女じょたちはこの街を支配できるのだからな——」

　そんな言葉が返ってくるなんて……まるで予想もしていなかった。

「どういう意味だ。じゃあ……これはあいつらの自作自演とか言うつもりか？」

「沖はそう睨にらんでおる。悪あく魔まが現れて二十年。だが未いまだ天てん象しょう儀ぎが墜おちぬことに、都っ合ごう良さを感じるのは、この沖だけか？　この二十年、悪あく魔まは飽あきもせずに戦力を逐ちく次じ投入しては、毎回、撃退され、魔ま女じょたちは魔ま女じょたちで防戦するだけ。本気で勝つ気があるのなら、戦力の一いっ斉せい投入、敵策さく源げん地ちの殲せん滅めつ——双方とも戦略はいくらでもあるというのに、これではまるで戦いのための戦いではないか。まるで魔ま女じょがこの世界で権けん益えきを得るため——」

「ふざけんなッ！」

　予想もしていなかったから、思わず、後先考えずに本気で反論してしまう。

　飛びかかりそうになったオレの胸元に、薙刀の刃が伸びる。それでも言葉を続ける。

「……あいつらが、好きで戦ってるっていうのか？　あいつらの何がわかる!?」

「貴き様さまにこそ、何がわかる？　おぬし、記憶喪そう失しつなのだろう？」

　そうだ。だけど。そんなオレでも、スピカたちが戦う様を見れば、彼女たちが命いのち懸がけで戦っていることはすぐにわかった。本当は戦いたくないことだってわかった。なのに、どうして、こいつはそれがわからないんだ？

「だけど…おまえらも、悪あく魔ま退治の役に立ちたいんだろう？」

「それが無理だというのも理解している。我われ々われの兵器は悪あく魔まに

対して無力だ」

　じゃあ、なぜ、戦っている、と言いかけて。

　結局——こいつも日下部(くさかべ)や学園に避難して談笑していた人間と同じなのだ、と理解する。魔女(エトワール)が自分を、世界を守ってくれるのは当然だと思っている。だから、彼女たちの気持ちなんか考えず、好き勝手なことをしていられる。街の人間たちが出店で買い食いをしているように、日下部が無責任にカメラを覗(のぞ)いて野次馬(やじうま)をしているように、こいつもまた、単に戦っているという名目が欲しいから、役にも立たない大砲をぶっぱなしてるにすぎないんじゃないか？　世界のことなんて本気で考えちゃいないんだろう⁉

　だけど、そう叫びたい気持ちをオレはグッと堪(こら)える。

　それでも、世界を救うためには、コイツらの協力が必要だ。

「本気で……悪魔(ゾディアック)を倒したいとは思わないのか……？」

「どういうことだ？」

「あんたらの力を、借りたい。悪魔(ゾディアック)を倒すのに、必要なんだ」

「無用だ。じきに悪魔(あくま)は倒れる。かあてんこおるの準備でもするのか？」

　たしかに、ここまでの展開は前世をなぞっている。沖(おき)の言葉を待っていたかのように、悪魔(ゾディアック)が倒れた、記憶どおりに、街中に真っ赤なマグマがまき散らされる。

　だが——まだカーテンコールには早い。

「悪魔(ゾディアック)は、もう一匹いる。二匹一緒に落ちてきたんだ。けど、ミラは一匹目で力を使い果たした。おまえらの助けが、必要なんだ」

「どういうことだ。ただの記憶喪失(そうしつ)が、なぜそこまでのことを——」

　その言葉を遮(さえぎ)ったのは、地を揺るがす振動と轟音(ごうおん)だった。

　遠方で舞い上がった土煙の中から、再び、悪魔(ゾディアック)の咆哮(ほうこう)が伊都夏市(いとげし)を包む。

　高層ビルのガラスがビリビリと振動した。

　それが何よりも雄弁(ゆうべん)に、オレの言葉を証明していた。

「なぜ——わかっていた？」

　どうする。真実を話すには、時間がかかりすぎる。嘘（うそ）でもいい、何かうまい説明が……。

『ちょっと、オザキ!!』

　悩む矢先に、スピカの声がした。ポケットに入れたままのスターリットからだった。

『アンタ、そこで何してんの！　なんで沖なんかと一緒に!?　避難所に連れてってもらったでしょ！　そこは危ないから——』

「……なるほどすたありっとか。それを通じて、最新の情報を知り得たのか」

　都合（つごう）よく解釈してくれる沖。オレはそれに乗る。

「……あ、ああ！　そうだ！　そのとおり!!　わかるだろう。魔女（エトワール）は、今疲れきってる。このままじゃ、二匹目は倒せない。敵に近づけないんだ。だけど、目潰（めつぶ）しがあれば……悪魔（ゾディアック）の視界さえ遮（さえぎ）れば、勝機はあるはずだ！」

『ちょっと、なに勝手なこと言ってんのよ！　そんなのなくてもアタシたちは——』

　沖（おき）は、スターリットからのスピカの抗議は無視。目を閉じてほんの数瞬思案したのに、

「射撃用意！　目標、新たなる悪魔（あくま）、弾種、煙幕（えんまく）!!」

　と、薙刀（なぎなた）を振る。すぐさま、戦車隊と、随伴（ずいはん）する歩兵隊員が応答する。

　突然の指示にも、何一つ、乱れたところは見せない。

　まるでジャンヌ・ダルクに率（ひき）いられた義勇軍のようだ。

　自（みずか）らの巨体によって巻き上がった粉塵（ふんじん）の中から、身体を出そうとする悪魔（ゾディアック）。視界が晴れれば、すぐにでも天象儀（カール・ツアイス）へと向かうだろう。

「撃てぇ——ッ!!」

　そこに戦車隊の放つ発煙弾が、一斉（いっせい）に殺到した。

　まるで足下の大地が噴火でもしたように、悪魔（ゾディアック）を覆（おお）うように

して、真っ黒な煙が、入(にゅう)道(どう)雲(ぐも)のように立ちこめる。

『な、な、な……オザキ、あんたたち、何やってんのよ！　余計なことしないで！』

「ミラが疲れてるんだろう！　一匹目みたいにはいかない！　自衛軍と協力しろ！」

『そんなの、やってみなきゃわからないわ！　誰が好きこのんで沖なんかと……』

　スピカの言い分もわかる。自分たちを嫌っている相手と協力するなんて御(ご)免(めん)だろう。

　オレだって、さっきの沖の言い分には腹が立つ。

　だけど、このままじゃ悪魔(ゾディアック)に勝てない。背に腹はかえられない。

「仮定の話はそこまでだ。今は言い争ってる場合ではない。ここは共闘すべきだ」

　沖が割って入る。先(さき)程(ほど)までの魔女(エトワール)に向けた悪意は、不思議なことにさっぱり消えていた。スピカにも、それが感じられたのか。スターリットの向こうで黙り込む。

「ミラじゃなきゃ、止(とど)めは刺せないのか？」とオレは聞く。

『近づけば、アタシでもやれる——。でも、誰かが注意を引きつけてないと』

「今なら、視界がない。悪魔(ゾディアック)はこっちが見えないだろ」

『でも、こっちも手探りよ。真ん中を探ってる間に、やられるわ』

　つまり、場所さえわかればいい、と。簡単じゃないか。

「スターリットの場所はわかるんだよな。なら、オレが悪魔(ゾディアック)に近づいて、目(め)印(じるし)になる」

『な——アンタ、なにバカ言ってるの!?　何考えてるの!?』

「そういうことか。よかろう、オザキ。悪(あく)魔(ま)の近くまで送る」

「頼んだ！」と、オレが叫んだ時には、オレと沖の乗った戦車は、巨大な煙幕の雲に向けて走りだしていた。タンクデサントだ、ウラー！

『ちょっと、オザキってば！』

　スピカの呼びかけは無視。というかキャタピラの音は思った以上に大きく、スターリットに耳を押しつけないと聞こえない。
『アンタ、バカ？　信じらんない……どういう頭してるのよ？』
「うるせ！　いいから、悪魔ゾディアックに突っ込む準備しとけ！　それとも怖くなったのか？」
『バカにしないで。死ぬような思いは、何度もしてきたわ。でも、それは魔女エトワールの役目よ。アタシたち以外がそんな思いしなくても――』
「一人でカッコつけんなっつーの！」
　おまえは知らないだろうが、オレは知ってるんだよ。そう言って、おまえがどんだけ無理してきたか。無限軌道が唸うなりをあげ、戦車が、地上の入にゅう道どう雲ぐもに向けて進む。
　煙えん幕まくに巻き込まれる直前で、停止。視界が狭く、小回りの利きかない戦車ではここまでだ。
　オレは戦車から飛び降りる。
「武ぶ運うんを祈るぞ、オザキ！　天てん佑ゆうを確信し突撃せよ！」
　沖おきの薙なぎ刀なたが、オレの先を指し示す。礼を言って走りだすオレ。黒煙の中に飛び込む。
「おまえ魔女エトワールとか言うけどな――結局、ただの人間だろ？」
『違うわ。アタシたちには悪魔ゾディアックが見える。アンタには見えない』
「煙に入りゃ、意味ねーよ」
　視界はまっ黒に閉ざされ、頼りになるのは音だけだ。いつ、踏み潰つぶされてもおかしくない。怖くないと言えば嘘うそになる。というか正直怖い。踏み潰されるのは、空から墜おちるのと同じくらい痛いだろう。想像しただけで腰が抜けそうだ。
『オザキ！　やめてってば！　死にたいの⁉』
「死にたくないし、死なせたくない！　だから走ってるんだ！」
　そう。だけど、オレには走る理由がある。止まれない理由がある。
　今度こそ、オレはスピカを救う。オレはやっと自分にできることを

見つけたのだ。
『だから、それはアタシの仕事なの！　アタシはもう、誰も巻き込みたくない！　誰かが死ぬのを見るの、もうたくさんなの！』
　ああ。なるほど。こいつは、ずっとそうやって戦ってきたんだ。街を守るために仲間が傷ついて、だから誰も傷つけたくなくて、そのためには自分が傷つくしかないと思っている——。でも、それは終わりだ。オレが終わらせる。終わらせてやる。
「んな簡単に諦あきらめんな！　なんでそう決めつけるんだよ！　いいか、よく聞け！　もう誰も死なない！　オレは生きる！　だから、おまえも生きる！　みんな生き残る！　そんでハッピーエンドだ？　わかるか？　わかるな？　わかるよな！　ていうか、わかれ！」
　オレは黒煙の闇の中を走る。追い縋すがる死から逃のがれるように——って、うお！
『オザキ！　大丈夫!?』
　目と鼻の先で、アスファルトが沈む。不可視の身体は、もう、すぐそこに在あった。
　崩れたビルのコンクリート片が、頭上から降り注ぐ。
　——オレは辿たどり着いたのだ。
「……スピカ、聞こえるか？」
『う、うん！　聞こえる!?　もうやめて！　逃げて！』
「もう無理だ。悪魔ゾディアックはオレの真上。逃げようとしたら逆に危ない。だから……おまえが、なんとかしてくれるか？　真っ暗で何も見えなくて、命いのち懸がけかもしれないけど、コイツをやっつけて、オレを助けてくれるか？」
　一瞬の間まがあった。深呼吸して、息を整えるくらいの。
『アタシがなんて呼ばれてるか、知ってる？』
　もう、そこにはさっきまでのとり乱した声のスピカはいなかった。
『……知らないか。記憶喪そう失しつだもんね』
　迷いを吹っきったようにスピカは高らかに宣言する。
『アタシは天才魔女エトワールスピカ!!　視界ゼロ？　そのくらいちょうど

いいハンデよ！』
　その声に、オレの心の中から、一(いち)抹(まつ)の不安が消えていく。
　オレたちは勝つ。そう信じられた。
　あとは、その確定された未来を、現実にするだけだ。
　しっかりとスターリットを握り、天に翳(かざ)す。
　あたりは黒い煙に閉ざされ何も見えず、悪魔(ゾディアック)の地獄からの呼び声のような、重く低い唸(うな)りが響くだけ。そんな闇の世界を――。
『アタシの天才たるゆえん、見せてあげるわ！』
　叫びとともに、赤い光が、引き裂いた。
　闇が晴れる。切り払われた黒煙の隙(すき)間(ま)から、空の青さが目に飛び込んでくる。
　陳(ちん)腐(ぷ)な言い方だけど、それはまさに闇を払う赤い騎(き)槍(そう)。
　オレのすぐ上で、悪魔(ゾディアック)の苦しげな叫びがあがった。
『やった！』『撃破だあああ！』
　ガーネットとミラの歓声がスターリットから流れてくる。
　オレも同調したいが、そうもいかなかった。悪魔(ゾディアック)のまとっていた灼(しゃく)熱(ねっ)のマグマが、虚(こ)空(くう)から滝のように流れだしてきたのだ。慌(あわ)てて、その場から逃げようとする。
『オザキ、だいじょぶ!?』
「うおっ！　あつっ！　……ああ。オレはなんとか。それより、おまえは？」
『よかった。うん、アタシは平気……』
　力を、使い果たしたのか、声は弱々しかったが、無事なことに違いはない。ホッとしたその瞬間。頭の中身までかき回すような、悪魔(ゾディアック)の叫び声が響いた。
　驚いて空を見上げれば、瞳が――。
　前世で最期に見た悪魔(ゾディアック)の瞳が、オレを見下ろしていた。
　――おまえだけは、許さない。そう、悪魔(ゾディアック)が告げたような感覚。
　瞳はゆっくりと、近づく。オレから視線を外さず。まるで、倒れ込

むように。
「おいおい……ここまで来て……嘘うそ、だろ……？」
　肌に刺さる、灼しゃく熱ねつの視線。
　その目からは、マグマが血けっ涙るいのように流れ落ちていた。
　視界を完全に覆おおう瞳。時間の感覚が、引き延ばされていく。無限にも等しいと思える一瞬の中で、意識がゆっくりと遠のいていって……。
　オザキ！　オザキ!!
　——誰かがその名を呼んだ、気がした……。

2

　そして。目を覚ませば、そこはあの真っ白な空間——ではない？

　カーテンから朝の光が差し込んでいた。そこは見知らぬ部屋、というか物置、物置というより粗そ大だいゴミ集積所だった。なんだか得体の知れないモノがはみだした段ボールが、乱暴に積まれていた。

　唯ゆい一いつ、まともなものは、床の上に置かれた、綺き麗れいにアイロンのかかった——というよりおろしたての学生服。これに着替えろ、ということだろうか。

　なんだかよくわからないが、それを着て部屋を出る。

　——汚い家だった。尋じん常じょうじゃない汚さだった。一歩間違えば、ゴミ御ご殿てん呼ばわりされて、テレビが取材に来たりしてもおかしくない……。もしも、オレが大だい財ざい閥ばつの総そう帥すいだったら、今すぐここにマッチョな変態メイド男を派は遣けんしているだろう。

　まあ、とにかく着替えて階段を下りれば……リビングにはその元凶とおぼしき女性がいた。年の頃は、オレより一回りほど上だろうか……素肌の上にワイシャツ一枚という格好で高いびきをかいている。色気もへったくれもない。純粋な少年が見たら、女という存在に対する全ての幻想を打ち砕かれるであろう様だった。

　テーブル、床の区別なくスナック菓子が散乱し、ペットボトルの蓋ふたは開いたまま。ドクター・ペッパー。点つけっぱなしのテレビには「ビデオ３」の文字。床に転がったＤＶＤのジャケットは、ドアの隙すき間まから、すごい笑顔で覗のぞくオヤジ……『シャイニング』か。

　それにしても、オレは記憶喪そう失しつのはずなのに、どうしてこういうどうでもいいことは憶えているのか。まあ、実際、記憶は失われても一般常識とかは忘れないものと聞くが……。

　なんて思っていると、

「ヒャーズジョニィィィィィ————————————————————————ッ!!」

　彼女が突然バネ仕掛けの人形のように起き上がった。この声はたし

かアリデッドという人ではなかっただろうか……なんて冷静に考える暇（ひま）もなくオレは逃げる。アリデッドがどこからか彗（ほうき）を持ちだしてきて、例（くだん）の映画の斧（おの）よろしく振り回し始めたからだ。

　どうやら完全に寝ぼけて、映画の中の主人公になってしまっているらしい。

　オレと彼女の追跡劇は、スピカが家に来てくれるまで続いた。マジ、勘（かん）弁（べん）してくれ。

　迎えに来てくれたスピカの話によれば、昨日、オレは危（あや）ういところで彼女に救われたらしい。で、なんとか悪魔（ゾディアック）の撃退には成功したものの、オレの正体は未（いま）だ不明。てなわけで、カルデア司令にして、伊（い）都（と）夏（げ）大学園の社会科教師であるアリデッド（さっきの女だ）の家で引きとることにしたそうだ。しばらくは、アリデッドや魔女（エトワール）たちの近くに置いておく、ということらしい。スピカが朝、迎えに来たのも、アリデッドの指示によるもの。監視の一環なのだろうか……？

　まあ、そんなわけで、今日からは、オレも彼女のクラスメイトとして、伊都夏大学園に通うことになった。ミラやガーネットとも同じクラスだ。ていうか、ミラがスピカやガーネットと同い年という事実に、ビビったが。

　しかし、そんな驚きもつかの間、オレは担任として現れたアリデッドに、学校から引っ張りだされた。初日から速（ソッ）攻（コー）で、早退である。今、オレたち二人は天象儀（カール・ツアイス）へ向けて山道をえっちらおっちら歩いていた。

　それにしても、この女、背も高いしスタイルもいいから、身だしなみに気をつかえばモデルと言っても通用しそうなのに、本人には全くその気がないらしい。シャツの裾（すそ）は半分はみでているし、髪もぼさぼさ。そんでタバコをスパスパやっている。

「ウシ！　ここを渡ればすぐだ」

　目の前に、渓（けい）谷（こく）を横切り柳楽山（やぎらさん）へと渡る橋があった。

「……なんか、気持ち悪い橋だな」
「なにせ、伊都夏市イチの自殺の名所だからな！　今はまあ年に二、三人だが、二十年前、初めて悪魔ゾディアックが来た時は大変だったぜ！谷底、赤く染まってやがんの」
　と、不ふ謹きん慎しんな笑い声。このとおり、性格だって、デリカシーのカケラもない。
　橋の先には、フェンスと頑がん丈じょうな扉とびら。その前で立ち止まり、彼女は見覚えのある星形の物体を掲かかげた。
「こいつは、柳楽山の鍵かぎ代わりにもなる。天象儀カール・ツアイスは一般人が入れねーようＥｓ層でガードしてる。気をつけろよ、スターリットを持たないヤツが触れたら、即死だ」
　と物ぶっ騒そう極きわまりないことを言うアリデッド。Ｅｓ層？
「まあ、なんつーか、リネアで作った光子力バリアーみたいなもんだな」
　彼女の説明によれば、リネアというのは、簡単に言えば魔力のことだそうだ。魔女エトワールが彗ほうきの先から撃っているのもそれらしい。
　普通の物体に対して、その干かん渉しょうは一方通行。魔力は物理に影響を及ぼすが、物理は魔力に対して無意味。悪魔ゾディアックに人類の兵器が通用しないのも、そういう理屈らしかった。
「やっぱ慣れねーことはするもんじゃねー！　説明なんかしたから疲れたぜ」
　教師らしからぬ暴言を吐いて、山登りを再開するアリデッド。オレも続く。
　少し息が切れてきた頃、オレたちはようやく天象儀カール・ツアイスに到着した。
　だが間近で見る大きさに圧倒される間もない。
　オレは有う象ぞう無む象ぞうの機器で埋うまった部屋に放り込まれ、身長体重血圧や血液検査は当然、変な模様のついた色紙を見せられたり、尻ケッの穴に指突っ込まれたり。
　――で、数時時間後。ようやく解放されたオレはカルデアの中ちゅう枢

すう、司令室にいた。

　いろいろな機材が設置されているが、元は大学の講義室か何かだったのだろう。

　本棚に囲まれた、年季の入った部屋だった。

「まあ、検査の結果だが……」ぞんざいに書類をめくりながら、アリデッドが言う。

「空から墜ちてきたくせに、なんの捻ひねりもねぇっつーか。

　普通期待するだろ、実は殺しても死なない人じん狼ろうでしたとか、無機知能搭とう載さい型のアンドロイドでしたとか、首筋に穴が二つあいてて血中にＶ酵素あり益マス、とか、心臓がありません、とかよー！　なんつーかナァ、そーゆーのが必要なワケですよ‼」

　報告書の乗った机をバンバン叩くアリデッド。どうやらオレの身体には何一つ変わったところがなく、それが不満で堪たまらないらしい。

「だが、諦あきらめねーぞ。てことは秘密は別のところにあるってこった。何一つ異物がない身体で、相手を油断させようって肚はらだろう？　おまえ、アレ、使えるんだよな？」

　左手をワキワキさせながらアリデッド。アレってなんだよ、アレって。

「隠すなよ、紫し電でん掌しょうだよ。電磁発はっ勁けいだよ。サイボーグを一撃な内ない家けの絶技。使えんだろ？」

「んなわけあるか」

「んじゃ、刈かり流りゅう兵へい法ほうか？　それとも、ミスカトニック大学神秘学科中退？」

「記憶喪そう失しつだって言ってんだろう。それにたぶん絶対そんなもんじゃねえ」

「まさか‼」と、ビクっと椅い子すから飛び退のくアリデッド。

「おまえ……アタシらの姿とか、目に映る景色とかが、ドロドロでデロデロでイアイアな化け物にしか見えない、とかそういう体質じゃねぇだろうな⁉」

　アホぬかせ。おまえの部屋はたしかにそう見えたが、あれは単に事

実としてそうだろう。
「つまり……マジで本当に、ただの記憶喪失の一般人なのか？　現代学園無能なのか？」
「だからそう言ってるじゃんか」
「つまんね────────────────────────────────────！」
　絶叫するアリデッド。こっちの鼓(こ)膜(まく)まで震えるほどだ。呆(あき)れて、
「別に、アンタを喜ばせるために降ってきたワケじゃない」
　と言い返せば、
「言ってくれるねぇ、坊っちゃん」
　アリデッドがマジな顔でじろりとこちらを睨(にら)む。
「こちとら悪魔(ゾディアック)のクソ野郎が墜(お)ちてきてから二十年、勝てない戦(いくさ)を戦ってきたわけ。今まであいつらの空襲(メテオライト)がどんだけあったと思う？　四百八十九回だよ、四百八十九。二十年で割れば、年に二十四回以上。単純計算で月に二回だ。あんなやつらが、隔(かく)週(しゅう)で空から降ってくんだぜ？　ばんばん街が壊されて、どんどん魔女(エトワール)が墜ちていく。それを二十年だ」
「やっぱり……そうなのか？　魔女(エトワール)って、最初はもっといたのか？」
　スピカは、誰かが死ぬのを見るの、もうたくさんなの、と言っていた。
　つまり、彼女は、もう何度もそういう光景に立ち会ったのだろう。
「あ？　言ってなかったっけ？　魔女(エトワール)は最初、八十八人いたんだよ。それで、今、三人」
　──この意味わかるよな？　そんな視線をこちらに向けてくる。
「敵はどんどんここに肉(にく)薄(はく)するし、こっちは打つ手なし。ここまで来ると、もー笑うしかないっつーか」と、ヤケクソ気味に言うアリデッド。
　それもそうだろう。最初は八十八人で倒してたのを、今は三人で相

手にしなければならないのだ。過か酷こくな消しょう耗もう戦の果て、いよいよ、どうしようもなくなっている……。

　それがこの街なのだ。実際、オレが助言しなければ、前回で街は滅ほろびていた。というか、オレがいても二回滅びたし。

「アタシたちに勝利なんてものはない。敵をぶっ潰つぶすなんて夢のまた夢。最高で引き分け。負ければオシマイ。そりゃ、柳楽山やぎらさん橋からも飛び降りるだろうよ！」

　彼女の憤いきどおりは、正直言って、八つ当たりも甚はなはだしいものだった。けれど、オレは少しだけ、安心していた。アリデッドの怒いかりも、焦あせりも、演技とはとても思えなかった。この女は、たしかにガサツで不ふ謹きん慎しんでデリカシーのカケラもないけれど、それでもこの街を真剣に守りたいと思っているのは確かだった。

　沖おき姫き々きは「全ては魔女エトワールの自作自演」なんて言っていた。だけど、このアリデッドの姿を見れば、そして実際に何十人もの魔女エトワールが死んでいったという事実を考えれば、それが中ちゅう傷しょうじみた言いがかりにすぎないことは明白だった。

「だからよぉ……。期待したんだぜ……突然空から舞い降りてきて、魔女エトワールを救った男には。期待しちゃいけねぇかよ……。おまえ、なんで救きゅう世せい主しゅじゃねぇんだよ……」

　激げっ高こうしたと思ったら、こんどはカラミだす。

　いやたしかに、こんな状況なら、事態を一気に打開してくれるような英雄ヒーローを求めてしまうのも確かだろう。オレだって、自分に力があればそうしたい。いや、でもただの一般人なオレだけど、一つだけ力がある。そう言おうとした矢先……。

「それがただの一般人なんてよ……。あーあ、結局、前世持ちくらいしか降ってこねぇのかよ……。救きゅう世せい主しゅなんて期待したアタシがバカだったのかよ……」

　アリデッドの愚ぐ痴ちめいた言葉が、オレの告白を押し留とどめた。

「——前世持ちって……？」

「——いや、な。天蓋グレンツエンの外から来たヤツには、たまにいんだよ。

オレは選ばれた人間だ！　神様に生き返らせてもらった！　——ってのが」

　バカなこと言うヤツがいるもんだろう？　と、つまらないジョークでも紹介するように、アリデッド。だけど、オレの心臓は、ドクンと跳ねた。

　オレのほかにも……そういうヤツが、いるのか？

「で、そういうヤツはこっから、排除しなきゃなんねー」

　続く言葉に、背中が寒くなる。できるだけ平静を装(よそお)い、質問を続ける。

「へー、な、なんでだ？　オレはよくわかんないけど……便利そうじゃないか？」

「そういう問題じゃねぇ。口で言ってもわかんねーから、ともかく憶えとけ。ここにはここのルールがある。前世の記憶なんてのを持ってるヤツがいたら、一大事だ。アタシたちは全力で、
そいつを天蓋(グレンツエン)から追いだす。アタシたちのセカイを守るために、な」

　正直、納得が行かない。

　これだけ救世主を望んでいるアリデッドが、そんなルールなんてものに従うなんて。

「ナァ、オザキ？　ほいで、訊(き)くんだがな？　ショージキな話、どーなのよ？」

　背筋に氷を突っ込まれたような気分。やっぱり来た。

「いや、アタシ、速(ソッ)攻(コー)で忘れっからさ！　ホントのトコロ、聞かせてほしいんだよナ。
　……おまえ、ホントは前世の記憶あるだろ？」

　そりゃ、そうだろう。

　オレはただの一般人なのに、悪魔(ゾディアック)の出現場所や戦法を知っていた。前世の記憶がある、と考えるのが、一番自然だ。というより、それ以外の理由が思い浮かばない。

　だけど——ある、と答えたら「排除」されるのだという。

「……ねーよ、あるわけないだろ？　そんなもん」

　だから、そう答えるしかない。だけど、袋(ふくろ)小(こう)路(じ)に追い詰められたことには変わりない。「じゃあなんで悪魔(ゾディアック)のことがわかった？」と問われれば、あとがないからだ。

　だけど――アリデッドは、はぁ……、とため息をつく。

「わかったよ。おまえは、ただの一般人ってわけだ。期待したアタシが悪かったよ」

　なぜかアリデッドは、それ以上追及しようとはしなかった。オレも、誤(ご)魔(ま)化(か)せた、という安(あん)堵(ど)感で一杯。疑問に思う余裕もなく、とにかく、話題を逸(そ)らしたくて、

「なあ、ところでさ。天蓋(グレンツエン)って――なんだ？」

　先程から、何度か会話に登場する単語について質問する。

「そうだなァ――それはせっかくだし、おまえらに答えてもらおうかァ？」

　おまえら？　とアリデッドの目線を追って後ろを振り返れば、三人の魔女(エトワール)が、司令室の扉(とびら)からこちらをうかがっていた。

　覗(のぞ)いていたのを見つかって、バツが悪そうに出てくる三人。

　そのうちのスピカに、アリデッドが声をかける。

「珍しいじゃねぇか、サボり魔のおまえが訓練に来るなんて。そんなにコイツが心配だったか？　朝だって、ほんとに迎えに来るとは思ってなかったんだがな？」

「べ、別に……そんなんじゃ。朝は、別に、ケガでもされたんじゃ、後味悪いし……そんなことより、もう放課後よ。今日の訓練は何なの？」

「おうおう。たまに顔出したと思ったらやる気になりやがって。

　が、前向きのところワリィが、今日の訓練は中止だ。今日はオザキからの質問に解答する会。今までおまえらが学んできた知識の復習、ってことだな」

　なんだか……自分で説明するのがめんどくさいだけのような気もするが。

　そんなわけで、その後、オレは、三人の魔女(エトワール)たちからこの街についての説明を受けてすごした。とはいっても、ミラの説明はアバウトすぎてほとんど要領を得ず、結局、スピカとガーネットの二人から聞いたようなものだったが。

　わかったことをまとめると以下のとおり。

　まず、天蓋(グレンツエン)というのは、この伊(い)都(と)夏(げ)市をドームのように覆(おお)う、非物質的な膜(まく)のようなもの。完全な半球状で、凡(およ)そ半径五十キロ。このドームは物理的なものではなく光を遮(さえぎ)るだけ。だから、通り抜けようと思えば、簡単に通り抜けられる。

　実際、食料や、破壊された街を修復するための建築資材、それからテレビの電波なんかは、ちゃんと外からやってくる。……人間以外は。

　この膜を通った人間は、必ず全ての記憶を失うというのだ。それが、悪魔(ゾディアック)の襲撃が続くこの街から、人々が逃げださない理由だった。

「あれ、でも、じゃあ、オレが記憶を失ったのって……」

「たぶん、そう」と、オレの思いつきをスピカが肯(こう)定(てい)。

「あなたが、記憶を失ったのも、天蓋(グレンツエン)を通り抜けたから」

「なんだよ、じゃあ、記憶喪(そう)失(しっ)のやつが空から落ちてきても、おかしくないじゃないか。なんで、あんなに悪魔(ゾディアック)だ、なんだの疑われなきゃいけなかったんだ？」

　こんなにあっさりと謎の一つが解かれてしまうと拍(ひょう)子(し)抜けだ。

　記憶喪失の一般人がいても全然おかしくないじゃないか。

「そ、それは……問題は、記憶喪失ってところじゃなくて、生身で空から落ちてきたってことよ。一体どう考えればそんなことしようと思うの？　十分怪しいわ！」

　とスピカ。なるほど、たしかに理由が思いつかない。そんな行動をとる時点で、十分、怪しい。そりゃ、悪魔(ゾディアック)と思われても仕方がないか。

　次に、悪魔(ゾディアック)について。

　このドームができたのは二十年前。悪魔ゾディアックの襲撃と同時である。偶然とは考えられない。だが、肝心の悪魔ゾディアックについては、何もわかってはいないらしい。

　悪魔ゾディアックが天象儀カール・ツアイスを狙ねらっている。天象儀カール・ツアイスが壊されればセカイが終わる。この二つが、わかっていることのほとんど全てだという。

　そしてその襲撃はいまも続いている。

　若い世代にとっては、昼の後に夜が来たり、夏が終わって秋が来たりするのと同じくらい、時々、悪魔ゾディアックが攻めてくるというのも、ごく当たり前の生活の一部になっているのだ。それを考えれば、避難所となった大学園の、場違いに穏やかな雰囲気もたしかに理解できる。命いのち懸がけで戦ってるスピカたちのことを思えば、納得はできなかったが。

　――しかし、それにしても。

　オレが一般常識とかまでは失っていない、というのは、承知のとおり。この街で見かけたコンビニやファミレスチェーンの固有名詞なんかも、覚えのあるものばかりだった。だというのに、伊い都と夏げ市とか天蓋グレンツエンとか天象儀カール・ツアイスなんて言葉には全く覚えがない。いくらオレが外の世界からやってきたと言っても、二十年もこんなことをやっていれば、それなりに社会問題になっているはずだし、耳にしていてもおかしくはないはずなんだが……。

「あの……オザキくん、わかりにくかったですか？」

　ガーネットが、心配そうに聞いてくるので慌あわてて「そんなことはない」と返す。

「それで、あいつらの目的とか、どっから来たのかとか、本当にわからないのか？」

　オレの質問に魔女エトワールたちは顔を見合わせ、そして、ガーネットが詠うたうように言った。

「星は物語。星は人。星は神――ＳＭＧっていう、街に伝わる神話です」

「なんだ、それ？　ＳＭＧってーと、星Star？　……物語Story、人Man、神God？」
「昔々の大昔、物語を語るのは、星の神々だけでした。
　彼らは、気ままに物語を操あやつり、夜空を自由に舞いました。
　ところがある時、地球に『原器アルマゲスト』——物語の素そが落ちてしまいます。物語を得た人間たちは、夜空の星々を意味づけました。
『原器アルマゲスト』を保管し物語を操る者は、魔女エトワールと呼ばれました。
　一方、意味づけられた星の神々は怒いかりました。
　彼らは星座の糸に縛られて、もう自由に動けないのです。
　星の神々は、堪たまらず夜空から姿を消しました。
　自分たちを動けなくした人間から、物語を奪ってやる。星空から墜ちた彼らは悪魔ゾディアックとなり、『原器アルマゲスト』を守る魔女エトワールに襲いかかるのでした——」
「それが……悪魔ゾディアックの目的……？」
　ぶっとんだ話に、呆あっ気けにとられるオレに、
「まあ……お伽とぎ噺ばなしですけどね」と、ガーネットは言って、小さく微笑ほほえんだ。
「よーし、今日はもう遅い。ここまでだ！　解散、解散!!」
　そこでアリデッドの声が終了を告げる。たしかに、時計の針はいい時間を指していた。
　立ち上がるオレと、魔女エトワールたち。と、アリデッドがさらに告げる。
「で！　アタシは、仕事が残ってるからよ。——スピカ！　おまえ、送っていってやれ」

『伊い都と夏げを救った来訪者、魔女エトワールスピカとアツアツ登校!?』
『伊都夏校内新聞』、と題されたそれ。
　オレの手が、小さく震えているのが自分でもわかった。
　スピカと二人で、天象儀カール・ツアイスをあとにして山を下りた。
　忘れ物があるから、と教室へ戻ったスピカを下駄箱のところで待っ

ていた。
　その間のちょっとした暇ひま潰つぶしと、靴箱の上に読み捨てられた新聞を手にとった。ただ、それだけのことだった。そのはずだった。
　校内新聞というからには、あの日くさ下か部べという少女たちが発行したものだろう。その一面に掲載されているのは、オレとスピカの朝の登校風景だった。
　たしかに、今日の朝、オレはスピカと一緒に登校した。
　それも遅刻ギリギリだというので、仁に王おう立だちになったスピカが飛ばす彗ほうきの後ろに乗ってだ。でも、それだけだ。
　それが、なんでこんなふうに騒ぎ立てられなければいけない？
　この写真を撮ったのは、誰だ？　日下部か？　高速で移動する被写体をとらえる腕は、相当のものだろう。それに、今日の朝の出来事が既すでに新聞に掲載され、もう読み捨てられている、ということを考えればとんでもない早さだ。
　だが、それがどうした。日下部は言っていた。私は世界の真理を見る、と。
　だけど、オレとスピカに恋人疑ぎ惑わく、なんて書き立てることのどこが真理だ？
　さらには、生徒会長のコメントと題された「この伊都夏市存そん亡ぼうの危機において、訓練を放ほう棄きし、色恋沙ざ汰たにうつつを抜かすとは、魔女エトワールの自覚が欠けっ如じょしていると言うほかない。」という一文を読むにいたって、オレは反射的に、それを破り捨てていた。
　なにが魔女エトワールとしての自覚だ。彼女たちが、どんなに必死になって戦っているのか、知ろうともせず、勝手なことばかり言いやがって。魔女エトワールは恋愛もしちゃいけないのか。そこまでしておまえらに尽くさないといけないのか。
　怒いかりが、ふつふつと込み上げてきた。
　オレは、朝の教室での光景を思いだす。
　魔女エトワールはこの世界のために戦う存在だ。だから、この街にとっても英雄ヒーローに違いない。

そう思っていた。でも違った。

クラスメイトたちは、そんな彼女たちが、存在しないかのように他愛たわいもないおしゃべりに興じていた。まるで——昨日の避難所のように。悪魔ゾディアックと戦い命いのち懸がけで、伊い都と夏げ市を救った彼女たちに——滅ほろんでしまった前世の記憶では、実際に命を落とした彼女たちに——礼を言おうとするものは、一人もいなかった。

この街では、悪魔ゾディアックが襲ってくるのも当たり前。だから、魔女エトワールが戦ってくれるのも、戦って死ぬのも当たり前。そうとでも言うつもりだろうか。オレはただの記憶喪そう失しつだ。この街のことはわからない。でも、だからこそわかる。この街はおかしい。そんなんでいいわけがない。

「クソッ！」と、細こま切ぎれになった新聞を踏みつける。

スピカが戻ってきたのは、ちょうどそんな時だった。

「どうしたの？」と聞かれ、「いや、なんでもない」と、慌あわててとり繕つくろうオレ。

行こう、と声をかけて歩きだす。オレでさえこんなに苛いら立だつのだ。スピカ本人は、もっと大変な思いをしているに違いない。

果たしてオレは彼女に何ができるのか……考えているうち、無言になっていたようだ。

「あのさ、まあ、成り行き上、一緒に帰ることになったんだけど。黙って歩くのも、気まずいでしょ？　この際だから、いろいろ訊きいていい？」

そう、スピカが声をかけてきた。

「アンタさ、ホントになんにも記憶ないの？　なんにも、思いだせないの？」

「ない。ちっとも。一切、思いだせない」

ふぅん……と適当な相づちの後、スピカ、しばし押し黙る。なぜこんなわかりきったことを？　と思った矢先、

「……あのさ……最初会った時さ、なんか叫んでたでしょ？」

グサっとくる質問を投げかけられる。

「あー、アレは忘れてくれ。頼む」
　記憶が戻るのはスピカに話しかけられてからだ。だから、オレはこれまでの三回の人生全て例の滅びの呪じゅ文もんを唱となえながら落下しているところをスピカに見られているわけだ。
「恥ずかしがってるの？　アレって、やっぱり映画のヤツ？」
「普通恥ずかしいだろ。知るか。勝手に想像してろ」
　つまらないの、とスピカ。「それで」と話題を変える。
「――これからどうするつもり？　出るなら、今のうちだと思うけど。
　あなたは、今なら身軽でしょ？　まだ、こっちに来てから、たった一日だし」
　たしかにそのとおりだ。オレはたしかに前世の分を合わせても、二日とこの街にいない。
天蓋グレンツエンを抜けても、失うべき記憶は、たったそれだけ。だけど――。
「忘れろってのか？　おまえたちの苦しい思いを、見なかったことにしろってのか？」
「格好つけないでよ。本当は怖いんでしょ。アンタさ、昨日助けた時、震えてたわよ。死にたくない、死にたくないって」
　オレの質問を茶ちゃ化かそうとするスピカ。とはいえ、自分の怖がりっぷりは、もう承しょう知ちの上。痛いのが怖いんで生き返るのにも躊ちゅう躇ちょしちゃうヘタレなのだから。だけど――。
「……怖いとか、怖くないとか。そういう問題じゃないだろ」
「だって……夜も随ずい分ぶんうなされてたって、アリデッドが言ってた。
　別に、心配しなくても大丈夫。そもそも、あなた一人に救える世界じゃ――」
「でも、オレだって、おまえの手伝いくらいできる‼」
　叫んでいた。いや、できるかどうか、本当はわからない。ただの思い上がりかもしれない。でも、この世界に一人くらい、魔女エトワールのこ

とを真剣に考えている一般人がいても罰ばちは当たらないはずだ。
「ありがと。気持ちは、嬉うれしいよ……」
　スピカは、俯うつむいて、ちょっとだけ無言になって、それから顔を上げた。
「でも、意地で命失くすなんて、バカらしいよ。今からでも、外に送るからさ……」
　それから、諭さとすように、言う。
「いいって」もちろん、頷うなずくわけがない。
「よくない！　よくないってば！　時間が経たったら、行きづらくなるでしょ！　そうなったらもう手遅れなのよ？　本気でアンタの人生懸かかってるのよ!?」
「知ってる！　オレだって、本気だ！」
「出任せ言わないで！」
「出任せって決めんな！　オレは本気だ!!」
　売り言葉に買い言葉。ひとしきりやり合って、
「……頑がん固こなヤツ。もう知らない」
　拗すねたように言い捨てて、プイと横を向くスピカ。
　そのまま、黙って、微び妙みょうな距離で、歩く。夜の冷たい風が、オレの頭を少しだけ冷やす。夜風に誘われるようにして、ふと、視線を上にやれば……。
「あ……なんだ、この空？　夜空って、こんなに綺き麗れいだったか？」
　そこに広がっていたのは、今まで見たこともない、満天の星だった。
　空を舞うペガススの隣となりには、鎖くさりに繋つながれし美女アンドロメダと、それを救出せんとする勇者ペルセウス。そして霧きりのごとき天空の大たい河が、天の川が、夜を流れる。
「ああ、見るの初めてだもんね」
　雄大すぎる光景に、思わず足を止めてしまったオレに、スピカが言う。
「でもね、全部、偽にせ物ものよ。街は、天蓋グレンツエンに覆おおわれてるから、

本当の星の光は届かない。だから天象儀カール・ツアイスが光を出して、内側から、偽にせのサイクルを作ってるわけ。……幻げん滅めつした？」
　偽物の空——そりゃそうだ。普通に考えれば、こんな都市部で、こんなにはっきり星が見えるわけがない。オレたちが歩いてきた道を振り返れば、柳楽山やぎらさんの頂上で、天象儀カール・ツアイスが、夜の海の灯とう台だいのように光を放っていた。あの光が、天蓋グレンツエンの空に、この星空を作りだしている——つまり、この世界は、一つの巨大なプラネタリウムということか。
「綺き麗れいなのは、変わらないさ」
　偽物だろうがなんだろうが、オレのこの気持ちは本物だ。
　そして、記憶喪そう失しつのオレには、自分というものの根こん拠きょが、率直な気持ちの中にしかない。今のオレは本来のオレじゃないかもしれない。でも、オレは、スピカのための人間になりたい、魔女エトワールたちを助けたいって真剣に思っていることだけは確かだ。
「……たしかにね。星の中を飛ぶたび思うの。この世界も、捨てたもんじゃないって」
「——それは……綺麗だろうな」
「だからって乗せないわよ」
　クソ、自分から振っといてそれかよ。なんつートラップカード。
「別にいいけど。今が飛びたい時じゃ、ないなら」
「アンタさ。見かけによらず、意地っ張りね」
「しかも口から出任せばっかりだ」
「ホントにね」と、スピカは言い、そうしてオレたちはお互いの顔を見て笑った。
　ああ、そうだよ。オレはポッケのない猫型のロボットみたいなもんで、何もできないけど、強がることと、口から出任せを言うことくらいはできる。だけど、そんな出任せだって、誰かを救うことくらいあるだろう。あってほしいと思う。願わくはこの想いが、闇の中で迷う孤こ独どくな星エトワールを照らす、サーチライトになりますように。

　帰った家で、夜もだいぶ更(ふ)けてから帰宅したアリデッドとともに、オレは遅い夕食を摂っていた。食卓に並んでいるのはコンビニ弁当。アリデッドは実は料理が得意とか、そういう属性をオレに期待していたようだが、そういうのには、どっかで壊れたメイド型自動機械人形とか拾ってくるべきだと思う。

　つか「食卓に並べる」なんて表現が可能になっただけで褒(ほ)めてほしい。彼女の帰宅を待つ間、一(いち)念(ねん)発(ほっ)起(き)してとり組んだ掃除の成果は、オレにあてがわれた物置を、なんとか部屋と呼べるようにして、帰ってきたアリデッドが、家を間違ったと勘違いするほど。出てくるわ出てくるわ、ゴミの山。ナイフとか雀(じゃん)牌(パイ)とか盗(とう)聴(ちょう)器(き)とかピッキング道具とか手(て)錠(じょう)とか巨大着ぐるみとかピンクローターとか。アリデッド曰(いわ)く、「みんな、生徒から没(ぼっ)収(しゅう)した！」だそうだが、どんな持ち主だよ……。

「なあ、オザキ。学校は慣れたか？」

「教師っぽい発言で信頼度上げようとしてんじゃねー。今日は、検査で潰(つぶ)れて授業受けれなかっただろうが」

「あれー、そうだったかなァ」

「そうだったかなァ、じゃねぇ。期待外れだつまんねーだ散(さん)々(ざん)言ってたのは誰だ」

「いや、まあ、それはそうとよ、オザキ。アタシはおまえが一般人でちょっとだけよかったかもしれねーな、と思ってんだ」

「……そりゃ……いきなりどういう心変わりだよ」

　街を守るため、新たな戦力を期待する彼女の思いは、痛いほど理解できた。

　だから、その言葉は意外だった。

「お願いがあるんだよ」

　と、唐(から)揚(あ)げを口に入れたまま、しかし、存(ぞん)外(がい)、真(ま)面(じ)目(め)な様子で、アリデッドは言う。

「あいつらと友達になってやってくれ。普通でいいんだよ。普通のやつができる日常っての？　そういうの、あいつらにも体験させてやっ

てほしいんだ」
「そりゃ、言われなくても……でも、そんなのが助けになるのか？」
「あいつらは、もう、何年もずっと戦ってるんだよ。実際に戦ってる時だけじゃねぇ。授業中だって、飯食ってる時だって、あいつらの心はいつも戦うことばかり考えている。いつだって、あいつらは魔女エトワールなんだ——」
　アリデッドが何を言わんとしているか、スピカのことを考えれば、よくわかる。アタシは人間じゃない、魔女エトワールだ、彼女はいつもそう言っているように見える。
「でもな、人間ってのは、四し六ろく時じ中ちゅう、戦闘態勢でいられるほど強くねぇ。張り詰めたままの弓ゆみの弦つるみたいなもんだよ。毎日、ちょっとずつ、自分でも気づかねぇうちに弱っていって、ある日、突然、ぷっつり切れちまうんだ。何の前触れもなく、何もかもどうでもよくなっちまう。戦いの中で、むしろここで死んだ方が幸せかも、なーんて思っちまう。アタシは、そうやって墜おちてく魔女エトワールを何人も見てきたんだ……」
　その言葉に、オレはもちろん、前世での死の間ま際ぎわのスピカの顔を、何もかも諦あきらめたような表情を思いだしていた。
「人間は戦ってばかりじゃだめだ。いや、戦う時のためにこそ、戦いを忘れる時が必要なんだよ。だから、頼む。普通のクラスメイトとして、あいつらに接してやってくれ」
「……ああ、わかった。がんばる」
　オレにも、できることがある。そう、アリデッドから言われるのは嬉うれしかった。
　嬉しかったけれど……それと同時に、魔女エトワールたちを戦わせておきながら、そんな程度のことさえ、彼女たちにしてやれないクラスメイトたちやこの街の住民への怒いかりが、心の奥底でちらりと燻くすぶり音を立てるのだった。
　それから、ＤＶＤを観だしたアリデッドの誘いを断って、客室に引っ込むと、疲労が一気に襲ってきた。ひとまず今日はもう寝るべき

だろう。明日は土曜日、休日だ。いろいろ考えるのは、明日にすればいい。とりあえず、昼くらいまでは寝ていよう——。
　そんなつもりで、目を閉じて——。

　連打されるチャイムで目を覚ました。
　時計を見れば、まだ朝と言っていい時間。主（あるじ）のアリデッドは、いつまで経（た）っても応対する様子がない。仕方なく、もぞもぞと起きだして玄関に向かう。
　途中通ったリビングでは、ビールやらツマミやらが散乱する中、アリデッドが突（つ）っ伏（ぷ）して盛大なイビキをかいていた。掃除して一日経（た）たずにこのとおり。賽（さい）の河原（かわら）で親のために石を積み上げる子の気持ちがわかった。点（つ）けっぱなしのテレビには「ビデオ」の表示。どうやらまたＤＶＤで映画を観たあとその場で寝てしまったらしい。
　迂（う）闊（かつ）に起こせば、また昨日のように、寝ぼけた彼女に追い回されるかもしれない。
　オレは、アリデッドを避け、はいはいはい、と言いながら玄関に向かう。
「ちょっと、どんだけ待たせんのよ」
　チャイムを押していたのは、スピカだった。
「……なんだ？　今日は休みだろ？」
「あれ？　アリデッドから聞いてない？　今日、魔女（エトワール）の秋合宿なんだけど」
　魔女（エトワール）の合宿……？　初耳だった。特訓とかするのか？　新必殺技とか覚えるのか？
「……なんだ、スピカじゃねぇか……いつもなら、サボりモード全開のおまえが迎えに来るなんて、珍しいじゃねぇか……」
　後ろから、ようやく起きだしてきたアリデッドの眠そうな声。
「それは……だって、合宿所まで、ウチの車で行くことになってるんだから仕方ないじゃない。それより、オザキに、今日から合宿だって知らせてないの？」

「あー、うん。つーわけで、アタシら、これから合宿だから。留守番と掃除、よろしく」
「え？　オザキは行かないの？」
「だって、連れてっても仕方ねぇだろう。彗ほうきで飛べるのか？　こいつが」
「でも……コイツ監視対象じゃ。アタシたちが目を離した隙すきに……何かしないとも」
　物ぶっ騒そうなことを言うスピカ。まだ悪魔ゾディアックじゃないって信じてもらえてないのかよ。
「あー、まァ、それもそうかァ。雑用くらいには使えるだろーし、こいつも連れてくかー」
　スピカに同意するアリデッド。
　というわけで、魔女エトワールの秋合宿、とやらにオレも参加することになってしまったらしい。大おお慌あわてで準備をして外に出れば、そこには黒くて長い漆しっ黒こくのリムジンがどーんと停車していた。しかも運転手つきだった。
　背が低いことを除けば、タキシードに白髪のオールバックに白ヒゲという執しっ事じのアウラを体現したような初老の男性が、優雅な挙きょ措そで一礼する。
「襟きん在ざい一いち郎ろうと申します。本日はお嬢様方のドライバーを務めさせていただきます」
「……お嬢様って、誰が？」
「……アタシで悪かったわね。好きで今の家に生まれたワケじゃないわよ！」
　答えたのはスピカだ。
「聞いてなかったのかァ？　スピカはな、葛西かさい野の家けのお嬢様だぞ」と、アリデッド。
　葛西野といえば、たしか旧財ざい閥ばつの一つだ。突然の新事実にビビるオレ。
「じゃあスピカは、葛西野スピカって言うのか？」

「いんや。ちげーよ。魔女エトワールは、魔女エトワールになった時、元の名前を捨てるのさ」

　名を捨てる——。また、一つ、魔女エトワールの辛つらいさだめを知るオレ。

　彼女たちは、このセカイのために、どれほどのものを捨てなければならなかったのか。

「さ、行くわよ。他の二人も、迎えに行かなきゃなんないし」

　そう言って、執しっ事じに導みちびかれてリムジンに乗り込んだスピカの態度は、人に仕つかえられることに慣れた自然なものだった。ついつい反射的に「どもども」なんて言ってしまう庶しょ民みん体質のオレなんかとは全然違う。記憶を失っても習慣は変わらないんだろうな。

「それよりも——オザキ様」と、車に乗る寸前、襟在が、耳元で囁ささやいた。

「これを見たことはありますか？」

　執事が、ポケットから厳おごそかに何かを取りだす。ピアノ線だった。

「便利なものですよ。執事にナイフは似合いませんでしょう？　私は人を差別しません。全て平等に『虫ケラ』と思っております。オザキ様も同様です。万が一お嬢様との関係に間違いなどあれば——客人といえども容よう赦しゃいたしませんので」

「え？　いやちょっと！」

「では失礼」と、執事は軽く頭を下げ、リムジンの運転席へ。

　背筋が凍った。つまり——脅きょう迫はくされたらしい。お嬢様に手を出したら殺すぞ、と。

　途中でガーネットとミラを乗せ、襟在運転のリムジンは、一いち路ろ郊外を目指す。中心部から離れるにつれ、景色は、急に寂しいものになり、人の気配もなくなっていく。かつては人が住んでいただろう街が、破壊されたまま野ざらしだ。

「魔女エトワールは、天象儀カール・ツアイスを守るのが第一です。郊外だと、どうしても手が回りきらなくて」

「天象儀カール・ツアイスの側そば近くなら、とりあえずは安全だからね」
　だから、中心部には、人がやってくる、か。
「そういや、外の世界からこっちに来る人間は、いるのか？」
「あまり聞きません。出て行く人は、いないわけではない、らしいですけれど」
「アマノは、今も出てるしね……ああ、知らないか。
　伊い都と夏げ駅から出るのは大たい抵てい貨物車だけなんだけど、毎週月曜の夜、最終で人を乗せる列車が来るの。その電車の名前がアマノ。車や徒歩でも出れないことはないけど、道の真ん中で、記憶喪そう失しつになったら、何をするかわからないじゃない？　その点、列車なら、駅までは連れてってくれるから、少しは安心ってワケ」
　そう、スピカが教えてくれた。
　記憶を失ってまで天蓋グレンツエンを越える理由とは何だ？　自分の命が大事？　忘れたい過去がある？　それとも――外に帰らなければならない理由があるか？
　思索の沼ぬまに沈んでいったオレの意識を、
「よーし、そろそろ到着だー！」
　という、ミラの明るい声が引きずりだしてくれた。伊都夏大学侘わび潟かたキャンパスまであと五分、なんて書かれた看板が、道路脇に見えてくる。どうやらそこが目的地らしい。

　魔女エトワールの合宿と聞いて、転がってくる岩石を避けたり、あるいは「ふんぐぬいー」とか謎の呪文を唱えながら、カエルとかサソリとか煮込んだ妖しげなスープを飲んだりするんじゃないか、なんて不安がっていたオレの予想に反して、合宿は終始、和なごやかなものだった。
　到着するや早速、食事の用意が始まった。まずは腹ごしらえということだった。
　この辺りの区域では、秋の季節ならごく一般的に行われている、芋い も煮にとか芋煮会という名前の行事で、要はみんなでサトイモを使った

鍋なべを囲むものだそうだ。



ガーネットはガーネットで「芋(いも)煮(に)に笑う者は芋煮に泣く！　芋煮は社会の縮(しゅく)図(ず)」と料理に燃え、スピカはというと、「アタシ、火が好きなの」なんて微(び)妙(みょう)にアブないこと言いながら、喫(きっ)煙(えん)者(しゃ)でもないのに自前のライターをとりだし、率先して焚(た)き火の番を引き受けていた。

ミラはミラで、合宿所に着いた瞬間、速攻(ソッコー)で環境に適応し、野生化してサイドメニューの魚——ヤマメだぜヤマメ——を現地調達のエサで釣ってきた。

不良司令官というか不良教師のガーネットは、全ての作業を部下たちというか生徒たちというか、まあ、魔女(エトワール)たちに任せ、

「カーッ！　秋晴れの空の下、飲み干すビールのなんと美(う)味(ま)いこと！」と、完全にただのオヤジと化していた。

そんなわけで、みんなで薪(たきぎ)を囲んで、芋煮と焼き魚とおにぎり。

周りを見渡せば緑。どこまでも澄み渡った空。深まる秋の足音が聞こえる。

それは、なんというか、贅(ぜい)沢(たく)な休日という感じで、すっかり観光気分だった。

食休みを終えて、魔女(エトワール)たちは訓練、そしてオレは後片づけ。まあオレがこの種の雑用を一気に引き受ける代わりに、スピカたちが訓練に注力できると思えば、苦にもならない。

そうして、女性陣は訓練で、オレは後片づけやら何やらで一汗かいた後、露(ろ)天(てん)風呂で汗を流す。まあ、なんつーか、実は入り口が別なだけで中身は混浴——的なお約束イベントこそ起こらなかったものの、壁ごしに聞こえる魔女(エトワール)たちの会話は、三人とも本当にリラックスしているようで。

一風呂浴びれば、夜は二人一組に分かれて肝(きも)試(だめ)しだった。

ちなみにオレは、スピカとペア。スピカが極度の怖がりだってのは、驚きだった。本当に、一見、しっかりしている完(かん)璧(ぺき)超人のようで、弱点の多いヤツだ。

んで、それが終われば、夜は薪を囲んでの無(ぶ)礼(れい)講(こう)。

みんな笑っていた。この笑顔だ、とオレは思う。スピカが、ずっと、こんな笑顔を浮かべていられるようになってほしい。してみせる。

笑っているうちに、夜も深まり、お開きになった。

合宿は明日も続くのだ。あまり夜(よ)更(ふ)かしするわけにもいかない。

男部屋に戻り、軽く歯を磨いていると、扉(とびら)がノックされた。

「こんばんは……ちょっとだけ……いい？」

なんて珍しく控えめなことを言いながら部屋に入ってきたのは、ミラだった。

「ん？　なんだ？」

ミラは、思い詰めたような顔で近づく。低い背でオレを見上げて——にっこり、笑った。

「キヨヒコ、大好き」

「は？」何だ？　突然の告白か？　と驚くオレに、ミラは言葉を続けた。

「だって、キヨヒコが来てから、スーちゃんも、ガーちゃんも、とっても気分がよさそうだから。だからね、ミラもホッと一息、なのさー。たぶん、みーんな、キヨヒコのおかげ」

「そうか、役に立ててるか、オレ……？　何もできないけど……」

「いてくれるだけでいいのさー。今は、それでいいのだ」

「そっか——」

三人の中では一番子どもっぽいと思っていたミラが、そんなふうに二人を見ていたなんて、驚きだった。

「でも、もしこれから誰かに辛(つら)いことがあって、それで誰かの助けが必要なことがあったら——その時は、キヨヒコの出番だよ。だから、キヨヒコ、みんなの、力になって」

ミラはそっと、オレに手を差しだす。オレは、その手を、握り返した。

「ああ。できるだけ、やってみる」

ドタバタ廊(ろう)下(か)を走り去るミラに、手を振って別れた。

ミラの言うとおり、本当にオレのせいかはわからない。だけど、今日の魔女エトワールたちは、みんな楽しそうだった。彼女たちが、世界を守るために命いのち懸がけで戦う魔女エトワールだなんて嘘うそっぱちに思えた。サークルとか部活の合宿みたいで。スピカも魔女エトワールたちも、普通の女の子たちみたいだった。

スピカに必要なのが、こんな日常なら、オレは、精一杯、彼女たちを笑顔にしてやりたいと思った。オレにもそれくらいならできる。オレにもできることがある。

ミラもきっと、それを望んでいる。

だから、一緒にがんばろうな、ミラ。

そう思いながら、オレは眠りに落ちた。

だいぶ遅くまで寝ていたらしい。

起きると、もう太陽が真上に近かった。

合宿所はやけに静かだった。昨日の宴会の跡もそのままに、魔女エトワールたちは姿を消していた。

どうしてだ？　みんなどこへ行った？　呆ぼう然ぜんとなるオレ。特訓でもしているのか？

明日は朝から特訓。そんなことをアリデッドが言っていなかったか。なのに、どうして誰も起こしてくれなかったんだ？　朝ご飯の準備とか、オレだって手伝えることはいくらかはあるだろうに。

辺りを捜すオレ。だが、魔女エトワールたちの気配はどこにもなかった。

仕方なしに、宴会や芋いも煮にや薪たきぎやらの後片づけを済ませ、放置されたままの機材をまとめる。一人でやると結構な作業だ。そうこうしているうちに、また夜が更ふけた。腹の虫が鳴き、冷めた昨日の残り物を機械的に詰め込む。

昨日はあれだけ美う味まかったはずの料理なのに、何の味もしなかった。

――それでも、魔女エトワールたちは戻ってこなかった。

みんなどこへ行った？　見捨てられたんじゃないよな？　戻ってき

てくれるよな？
　孤独と不安に押し潰つぶされそうになった時、ようやく見覚えのある一台の車がやってきた。
　襟きん在ざいのリムジンだった。みんなが帰ってきた、というのは、だけど、ぬか喜び。
「お待たせして申し訳ありませんでした」
　車に乗っていたのは、スピカの執事、襟在一いち郎ろう一人だった。
「お嬢様たちは、急用があり、昨晩のうちに、合宿所をお出になりました。私はお嬢様より、オザキ様をお迎えに上がるよう、言われております」
「急用って？」
「ご準備下さい。もう、ここに用事はありませんでしょう？」
　オレの質問に答えず、一郎は帰り支度じたくをうながす。一人で乗るリムジンの客室は、むやみに広くて寂しかった。ハンドルを握る一郎は、市街地に着くまで一言も口を利きかず、こちらの質問にも一切、答えてくれない。街までの小一時間が、無限に長く感じられた。
　何かが起きたらしい、ということはわかった。だけどそれが何かはわからなかった。
　一日ぶりに戻ってきたアリデッド邸は、シン——と静まり返っていて、家の主あるじも帰宅していないようだった。いや、一度は帰宅したのかもしれない。出発した時と比べて、ビールの空き缶が増えていたし、部屋もさらに汚くなっていた。
　書き置きとかないのか。どこに行ったとか、何が起きたとか。まさかこの散らかりようが暗号とかじゃねぇよな、と見回せばテーブルの上に見覚えのある文字。
　——『伊い都と夏げ校内新聞』
　そして、見出しの文字。
　——悪魔ゾディアック襲撃！　魔女エトワールミラ墜おちる!!
　慌あわてて、それを手に取る。日付は今日。貪むさぼるように記事を読む。

明け方だ。明け方にまた、悪魔（ソディアック）の襲撃があったのだ。そして迎（げい）撃（げき）には成功したものの、ミラが墜とされた。膝（ひざ）から力が抜け——それでも、ＩＣＵに緊急搬（はん）送（そう）されたものの命に別状はない——という記述に、少しだけ胸を撫（な）で下ろす。

続いて……怒（いか）りが湧いてきた。自分の無力さへの、能天気さへの、怒りだ。

オレは拳（こぶし）をテーブルに振り下ろした。耳（みみ）障（ざわ）りな音を立てて、空き缶が飛び跳ねた。

気の抜けた琥（こ）珀（はく）色の液体がテーブルを伝って床を汚す。

なにが、オレにもできることがあるだ？　なにが、みんなの力になるだ？

みんなが戦っていた時、オレは何をしていた。ただ、幸せにイビキかいて寝ていただけじゃないか。自分は役に立っているなんて自己満足に浸（ひた）りながら。みんなは、他のみんなは無事なのか？　スピカや、ガーネットは？　新聞は速報らしく、簡（かん）潔（けつ）な事実のみしか書かれていなかった。詳しいことはほとんどわからない。思わず固定電話に駆け寄り、そして受話器を握ってから、電話をかける相手など誰一人いないことに気づく。

オレは、スピカたちの住所も知らなければ、恐らくアリデッドが詰めているだろう天象儀（カール・ツアイス）に行こうにも、防（ぼう）壁（へき）を突破するためのスターリットがなかった。

自分には何もできそうになかった。

ただの一般人どころではなかった。オレは、一般人以下だった。

結局、朝を——待つしかなかった。

長い、長い、夜だった。

ほとんど一睡もせずに朝を迎え、日が昇るのと同時に伊（い）都（と）夏（げ）大学園に登校した。

誰か早く登校してきてほしかった。気に食わないクラスメイトとはいえ、それでもオレよりは何か知っているだろう。とにかく誰か来て

ほしかった。

「オ――オザキ――くん……？」

　扉とびらの開く音がして、びっくりした顔で声をあげたのはガーネットだった。

　オレは、彼女に駆け寄る。

「……ミラが墜おちたって、本当か――⁉」

「え、ええ。病院に運ばれて……でも、大丈夫です。心配しないでください。命に別状はないですし、それに、悪魔ゾディアックも、無事、撃退しましたから。それより、昨日はすいませんでした……連絡もしないで、置き去りにしてしまって……」

「オレのことなんかどうでもいい‼　スピカは……⁉　おまえは大丈夫なのか⁉」

「あ、あの……はい……大丈夫です……大丈夫ですから……」

　オレは、思わずガーネットの肩を掴つかんでいた。慌あわてて、手を離す。

「ごめん……でも……オレ、おまえらのこと心配で……」

「私は、オザキくんが心配してくれただけで嬉うれしいです。でも、スピカちゃんが」

「っ‼　スピカがどうかしたのか？　ケガでもしたのか⁉」

「いえ……でも……スピカちゃんが、ミラちゃんが墜ちたのは自分のせいだって……その、戦いのあと、ずっと落ち込んでいて。……自分の口からは言いませんけど、きっと……」

「……そうか……」

　誰かが傷つくことを、仲間が墜ちることをあれほど恐れていた彼女が、どれだけ落ち込んでいるか、あまりにも簡単に想像がついた。

　……オレはどうすればいい？　オレは何をしてやれる？

　そんな思案にオレが耽ふける中に、ガーネットはロッカーから掃除道具をとりだしていた。

「何やってんだ？　当番なのか？」

「いえ……私……クラス委員ですから」

「なんで、そんなことまで……昨日のことで、疲れてるんだろう……」

「私、掃除は好きですから。イヤだったら、断りました。私が、クラスのみんなのためになれるなら、それでいいんです。それに魔女エトワールでもリーダーをやってたでしょう？　私、こういう役は嫌いじゃないんです」

　そう言って床を掃はきだすガーネット。

　どうしてだ？　どうして魔女エトワールだけが、こんな一方的に苦労しなきゃいけないんだ？

　やがて、ぽつりぽつりと生徒たちが登校し始める。

　ガーネットに労ねぎらいの言葉をかけるものはいない。掃除のことも、昨日の戦いのことも。

　スピカは、遅刻らしかった。アリデッドも半休だという。やがて授業が始まった。

　オレにとってはこれが初めての授業だ。記憶喪そう失しつなオレだが、授業についていけないということもなく、かといって、憶えのある内容ばかりということもない。

　オレは、普通に授業を受ける。

　なんていうか、本当に普通の授業、普通の教室の風景だった。

　クラスメイトの一人が、大おお怪け我がをして、入院したというのに。

　休み時間だってそうだ。席にじっと座ったままのガーネットや、あるいは二つの空席、スピカとミラについて話題にする声は一切ない。意識して避けているのではない。それこそが日常で、まるで、三人の魔女エトワールは、最初から存在していないかのよう。だから、いなくなっても誰も気にしないし、いなくなったことにも気づかない、とでも言うように。

　たしかに、魔女エトワールたちは超常の力を持つ存在だ。カルデアという組織に属し、普通の人間が知り得ないことも知っている。そんな彼女たちを、近寄りがたく思う気持ちもわからなくはない。だけど、彼女たちが戦っているは、傷ついているのは何のためだ？　誰のためだ？

　昼休みになり、教室内は明るい雰囲気（ふんいき）に包まれる。それが今のオレには耐えがたい。

　逃げだすように教室の外に出たところで、ようやく登校してきたスピカと鉢合（はちあ）わせた。

「……お、おはよう」

「もう昼よ」と、にべもないスピカ。

「あ、ああ……そうだな。今日は、遅かったな。大丈夫か？　目の下、黒いぞ」

「別に。いつもどおり。アタシにだって、学校に来たくないことくらいあるわよ」

「――昨日、大変だったのか……？」

　スピカはむっつりと黙ったままだ。

「……言いたくないのか？」

「ねえ、アンタ何なの」

　俯（うつむ）き気味だったスピカが顔を上げてこちらを睨（にら）んだ。

「なんでアタシにそんなこと聞くの？　気にしてほしいって、アタシがいつ言った？　誰だって、ほっといてほしい時くらいあるでしょ」

「わ、悪い」

　キツイ言葉に、萎（な）えかけた心が今度こそ、折れそうになる。たしかにそのとおりだ。スピカにとって放っておかれることが一番いいのなら、オレはそれをしなくちゃいけない。

　でも……今のスピカは、とてもそうは見えなかった。だから、オレは引かない。

「そんなつもりじゃないんだ。でも、話したら気が軽くなることだって――」

「重くなることもあると思わない？　話しても無駄なこともあるとか、思わない？　アンタ、なんでこっち側に来たのか知らないけど、アタシの愚痴（ぐち）聞きに来たわけじゃないでしょ」

　一気（いっき）にまくし立てた後、気まずい沈黙。

「オレ、一昨日（おととい）の夜、ミラに言われたんだ。それにガーネットに

も。話を聞いてやれって」

「ミラと……ガーネットが……？」

　いや、まて、オレ。これじゃ、二人に責任をなすりつけているようじゃないか。

「いや誰かに言われたからってわけじゃなくて……おまえがそんな顔してると、嫌いやだしさ。

　何か、オレにできること、ないか？」

　スピカは、なぜか一瞬、泣きそうな顔をし、それから視線を逸そらして言う。

「……さあね。自分で、考えれば」

　おっしゃるとおりである。

「あら、魔女エトワールさん、重役出勤おつかれさま。ちょっと、顔色悪いわよ？」

　そんな皮肉めいた言葉を投げかけてきたのは、クラスメイトの一人だ。

　樋ひのヶけ結ゆ花かといって、新聞部の一員だ。転校早々、新聞部に入れ、カルデアの情報をリークしろ、なんてとんでもないことを言ってきたので、名前を憶えていた。当然、断ったが。

「寝てないんじゃない？　夜よ更ふかしは肌に悪いわよ？　彼氏のせい？」

　スピカがそんなに苦労しているのは、誰のせいだ。思わず拳を握りしめた。

「樋ヶ。アタシ、お腹痛い」

　けれど、スピカはそんな戯ざれ言ごとに付き合うそぶりはカケラも見せず、一方的に宣言。

「保健室行ってくるから。コイツはつき添い」

　そう言ってオレの裾すそを引っ張った。

「ちょ、ちょっと⁉　どこ行くのよ！」

　樋ヶの制止も聞かず、オレの制服の裾を引っ掴つかんで、キャンパスの外へ。

「エスケープかよ。襟きん在ざいに怒られても知らないぞ」
「爺じいやはこんなことで怒ったりしないわ。
　それにアタシの力になりたいんでしょ。アタシと授業どっちが大事なの？」
　是非もない。オレはスピカと並んで、秋の陽と風を感じながら、柳楽山やぎらさんを登る。

　着いた場所はスピカの「とっておき」。柳楽山の中腹、森が開けて、展望台のようになった一角だ。伊い都と夏げ市の駅方向が、一望に見下ろせる。
「いい場所でしょ？　Ｅｓ層の内側で普通の人は、入れないからね。たまに来るのよ」
　自慢気にスピカは言う。
　たしかに、誰かの視線を気にする必要もない。静かに物思いに耽ふけるには、いい場所だ。
　だけど、たまに来て……ここでスピカは何を思っているのだろう……？
「お昼、まだよね。これ、食べる？」
　スピカが、おにぎりを差しだした。普通のコンビニのもの――に見えたが、それは外見だけ。中身は最高級の食材を使った襟きん在ざいの手によるもののようだ。お嬢様扱いを嫌いやがるスピカのための手の込んだ偽ぎ装そうらしい。味は絶品だった。でも、それだけじゃない。
「青空の下で食べるご飯も、美お味いしいでしょ」
　同感だった。合宿の時みたいだった。だけど……オレたちは二人だけ。ミラは今、入院中だ。また一昨日みたいに、みんなでワイワイやれる日は来るんだろうか。
　風が吹く。緑の葉が揺れる。オレが何を考えているか、わかったのだろう。
「ミラのことは……もう少し、整理がついたら、話すわ……」
　ポツリと、スピカが呟つぶやいて、続ける。

「大丈夫。これが初めてじゃないから。魔女(エトワール)になるってことは、仲間が傷つくことを覚(かく)悟(ご)するってこと。いいえ……魔女(エトワール)だけじゃない。この街で生きるってことはそういうことなの。だから、大丈夫……アタシは耐えられる」

　スピカは、気(き)丈(じょう)に言った。

　弓(ゆみ)だ。張り詰めた弓だ。オレはアリデッドの言葉を思いだす。

　今この瞬間にも、弓に張られた弦(つる)の繊維が一本ずつ、プツリ、プツリと切れていく。あと少し、ほんのもう少しなら耐えられるかもしれない。けど、もう時間の問題だ。

　オレは、また前世の記憶を、最初に出会ったスピカの顔を思いだす。

　なあ、スピカ。おまえあの時、オレを助けようとしてくれたよな。おまえは本当に真剣だった。その気持ちに偽(いつわ)りはなかったはずだ。

　でもさ、スピカ。おまえ、それと同じくらい、死にたかったんじゃないのか——？

　だけど、もう、その質問を投げかけるべき相手は——あの時のスピカはどこにもいない。

「話したくなったら、言ってくれ。オレは、いつでも、相手になるから……」

　だから、オレにできるのは気休めを吐くことくらい。

「ありがと」

　本当に、オレは彼女のために何かできるのだろうか。

「もう、六時間目かな。学校サボるのって、アタシ、コレが初めて。アンタは？」

「意外だな。まあ……オレも……記憶の限りじゃ、これが初めてだ」

　当たり前だけど。言ってからそれに気づいて、二人で噴きだす。

「なんか、変な感じ。初めて空を飛んだ日みたい」

　その視線は世界の果て(グレンツエン)を——いや、遥(はる)かその先を見(み)据(す)えていた。

「どうして、学校、サボろうなんて思ったんだ？」

「逃げきれるわけない。それは——わかってるんだけどさ。なんか、疲れちゃった」
「あのクラスにいるのが、か？」
「そんなとこ。アンタは、なんでこの世界に来たの？　逃げてきたの？　それとも……」
「知るか！　オレは記憶喪そう失しっだ！」
「あはは、ゴメン」
「ま、正直思うよ。オレ、なんでこっちの世界に来たんだろうか、って」
「しかも、空から墜おちて、ね」
　本当に、記憶を失う前のオレは何を考えていたんだか。手の込んだ自殺？　生まれ変わるべく空へと飛んだ？　それとも？
「あのさ、思ったんだけど。もしかして、アンタってさ——」
　何か、言いかけて、けれども、スピカは、
「——やっぱやめた」
　その先を飲み込んだ。は？　と拍ひょう子し抜けするオレ。
「やめた、じゃないだろ。言いだしたんだから、最後まで言えよ」
　と問い詰めるが、「やだ。恥ずかしい。絶対に嫌いや」と断固として譲ゆずらない。
　それから、スピカはしばらく、何かを考えるように黙り込んで……。
「あの、さ。人が人を好きになる、ってどういうことだと思う？」
　また、唐とう突とつなことを言いだした。もちろん、いきなり言われても答えられない。
「漠然としすぎてる。たとえば、なんて答えればいいんだ？」
「だから、ええと……なんて言えばいいかな……好きになった人が、無職になったとするでしょ。そしたら、その人が好きでいられなくなると思う？」
「——場合によるだろ。金目当てなら、好きじゃなくなるかもしれない」

「性格が変わったら？　たとえば、記憶を失ったりして」
「そりゃあるだろ。性格が別人になったら、違う人だし」
「じゃ、外見が変わったら？」
「それもあるだろ。人なんて、どっからでも好きになることだってある」
「アタシ、ちょっと思うんだけど、さ。人を好きになるって、外見でも性格でも地位でも何でもなくて、ただ純粋にその人が好きで堪たまらない、ってことじゃないのかな」
「純粋に……何の理由もなく？」
　ちょっと、想像がつかない。
「理由もなく。っていうか、大たい抵ていの理由は後づけで。だからね、たとえ整形手術で見かけが変わっても、仕事の失敗で地位が替わっても記憶喪失になっても――それでも、その人がその人である限り気持ちは変わらない、っていうのが本物だと思うの」
「なんか、理想論の気もするけど」
「でも、恋ってそういうもんじゃないの？」
「さあ、どうだろな。オレ、記憶喪そう失しつだし」
「ゲ。そりゃないでしょ。人が真剣に話したんだから、アンタも答えなさいよ」
「答えなさいって言われてもなー」
　記憶がないんだから答えようがない。辛かろうじて代わりになりそうな経験と言えば。
「傷ついても、どんな手を使っても、なんとかしたいって思うことじゃないか？」
　天国で、生き返りたいと思った時、こいつを救いたいと思った時、オレはそう思っていた。あれは、恋みたいなもの……だったんだろうか？
「傷ついても？」
　頷うなずく。たとえあの激痛を何度味わうことになっても。
「どんな手を使っても？」

頷く。たとえ人の理(ことわり)に反しようが、アリデッドに嘘(うそ)をつこうが。

オレの答えに、スピカは、何事か考えているようだったけど、この話を突っ込まれると前世がどう、という話になるので危険。

「で、実際、どうなんだ？　おまえは、誰かそんなふうに好きになったことがあるのか？」

再び、スピカに水を向ける。

「アタシは——あんまり、そういう機会、なかったから」

スピカの顔が曇(くも)った。初めて彼女と出会った日、二度目の死の直前のあの告白を思いだす。

彼女は、恋なんてできなかった。魔女(エトワール)は恋なんてしてはいけない、普通の人の幸せを望んではいけない、きっと、そんなふうに自分に言い聞かせてきたのだ。

「アタシは逃げても逃げきれないのよ。天蓋(グレンツエン)の中で生まれて天蓋(グレンツエン)の中で死ぬんだから。

それが、魔女(エトワール)になるってこと」

開き直ったように言うスピカ。瞳は遠くを見つめたまま、焦(しょう)点(てん)を結ばない。不可能だと知りながら自由な大空を望む、籠(かご)の中の小鳥のように。

その姿を見て、オレは、ようやく自分のやることを思いだした。

諦(あきら)めたら、ダメだ。だって、オレが諦めたら、誰がスピカにこう言ってやれるんだ？

「……諦めんなよ。やる前から、無理ってゆーな」

オレは諦めない。諦めてる暇(ひま)なんかない。落ち込んでる暇なんてもっとない。

こいつを幸せにする。こいつだけじゃない。ガーネットも入院中のミラも、幸せにする方法がきっとあるはずだ。

「やってみたら、いろいろできるかもしれないだろ。足(あ)掻(が)くだけ足掻いてみようぜ！　そしたらきっと、なんとかなるって。やってみたら、意外と人生バラ色だったりするかもだろ」

「無責任ね……でも……ありがと」

「だから！　そういう気持ちだけ受けとっておきますって感謝の仕方がヤなんだっての。なに一人で完結してんだよ」

「ごめん……でもいいの」

「よくない！　全ッ然、よくないだろ！」

　オレは、なんであのまま死ななかったのか？　なんであんなキッツイ思いまでして、生き返ったのか？　何かを諦（あきら）めた彼女の横顔を、見ていられなかったからだ。

　それでも諦めきれない彼女を——なんとか、救ってやりたかったからだ！

　だから——ああ、そうだ。まだ、終わったわけじゃない。

「オレはやるぜ!!　やってやるぜ!!」

「は？　やるって、何を？」

　立ち上がって拳（こぶし）を握りしめたオレに、スピカが問いかける。

「おまえが、もちっとマシな顔になるためだったら、命（いのち）懸（が）けでがんばる！　なんでもやりまくる！　できることを言ってくれればいい。バナナの皮で滑（すべ）って転んで、それでおまえが笑うってんなら、やるぜ、オレ。空を飛べとか、とんでもないことじゃなければ大（たい）概（がい）はやってみせる。いや、空くらいなら飛んだりもできるかもしれん！」

「ぷっ。ナニそれ？　命懸け？」と、スピカが吹きだす。

「ああ、本気だぞ！　マジで！　ウソだと思うか？　だったらこの瞳を！　見ろ！」

　オザキキヨヒコが命ずる！　オレを信じろ!!

「ははは。それじゃさ、アタシのためなら死ねる？」

「何回でも死ねる！　コレは本当！　真実！　生きてく希望と夢見る勇気と微笑（ほほえ）む余（よ）裕（ゆう）と愛する心を運ぶ男、それがこのオレ、オザキ!!　でもおまえは真（ま）似（ね）しちゃダメだぜ!!」

「それじゃ、さ——」

　続くスピカの言葉には、唐（とう）突（とつ）な会話の多い今日の中にあって、

とりわけ驚かされた。

「私と恋人になってみる？」

「は？　なんで？　何になる？　恋人？」
「そ。試ためしに」
　突然、何を言いだしたのだ。彼女は、オレが好きなのか？　なら、オレがスピカと付き合えば、それでスピカは笑顔になれるのか？　いや、しかし、試しとか言ってるしな。本気じゃないのか？　それとも照れ隠しで実は、本気パターンだったりするのか？　それとも、弄もてあそんでるだけとか？　ただの冗じょう談だんだったりとかか？
「試すって、ナニをですか？」
「相性……とか？　どう？　やってみない？」
　挑いどむような、からかうような笑みを浮かべて言うスピカ。
　やったろうじゃねえか。ここで退ひいたら男じゃねぇ。
「や……やってやるよ」
「じゃ、キスしよ」
「え。いやちょっと。なんか、話が飛んでないか？」
「恋人でしょ。だったら当然」
　ちょっとまて、なんだこの高速展開は。でも冗じょう談だんでも強がりでもないらしい。スピカが近づく。瞳がオレを見上げている。呼こ気きを毛穴で感じるくらいに顔が近づく。こんな突然でいいのか？　もうちょっとソフトにランディングするべきではないか？　電気は消さなくていいのか（←大混乱）。オレにだって心の準備が――。
　――――目が、合った。
　オレの迷いは、スピカの瞳の中に吸い込まれるようにして溶けていく。
　スピカの息は、浅く早く、目ま蓋ぶたは頻ひん繁ぱんに瞬まばたきを繰り返している。指が忙せわしなげに動いている。緊張しているのは丸わかり。だが、それを隠して、微笑ほほえむ。微笑もうと、する。

「あんたも初めてだよね？　記憶喪(そう)失(しっ)だし」

　オレには前世の記憶がある。本当はオレは二度目で、彼女は初めて。

　彼女の強がりが、オレにはわかる。緊張に、声がわずかに震えている。だから、安心させてやるのがオレの役目だ。

　肩に手を当てる。それだけで、スピカの身体が小さく揺れた。

　覚悟を決めて、目を閉ざす。

　身体を寄せて、唇を重ねた。

　風がすれ違うような、微(かす)かな感触。

　それすらも幻(まぼろし)だったかのように、すぐに消えた。

　スピカは顔を真っ赤に染めたまま、必死で息を整えて、それから目を逸(そ)らして囁(ささや)く。

「……ありがと。なんか、助かった」

「ん」と、頷(うなず)く。オレも緊張していた。声を出してようやく、呼吸を再開したような感じ。

　でも、今の彼女には、たぶん、それが必要だった。張り詰めた弦(つる)を緩(ゆる)めるには。

「笑ってる？」

「別に。でも震えてたろ」

「そんなことない。私は天才魔女(エトワール)よ。こんなことくらいでっって……笑うなってば！」

　必要だったのだろうが……非難されるほど、にやけてしまう。

　もう夕方だった。それからオレたちは、二人で座って、しばらく沈む夕日を眺めていた。

「さ、そろそろ日も暮れるわ。送ってあげる」

「——っつかさ、前から思ってたんだけど。なんで立ち乗りなんだ？」

　彗(ほうき)を用意したスピカに、オレは聞いた。

　他の魔女(エトワール)たちは、普通に彗に跨(またが)って飛んでいるのに、スピカ

は、なぜか、まるでスノーボードかサーフボードにでも乗るかのようなスタイルだった。こっちに墜ちてきてから、一度たりとも普通に乗っているところを見たことがない。
「かっこいいとか思ってる？　それとも、こう、身体的なスキンシップを求めてる——？」
「んなわけないでしょ！」と真っ赤になって否定するスピカ。
　そんなスピカの彗に乗るとなると、当然、こっちもバランスが悪いわけで、つい、うっかり不可抗力的に、不可避的に、緊急回避的に、本能的に、スピカの柔やわらかい部分とかを触ってしまうのである。その……胸とかを。初登校の時とかも。ちなみに、登校初日発行の校内新聞に掲載された写真でもがっちり揉もんでいた。日くさ下か部べの写真テク、恐るべし。
「じゃ、なんでだよ」と言えば「なんでそんなにこだわるのよ？」と言い返し、
「おまえが隠すからだろ」と言えば「別に、隠してなんかないわよ」と返す。
「じゃあ、教えろよ……一応、恋人、なんだろ？」
　埒らちがあかないので、オレはマジックワードを告げてやった。
「んぐ…………の……の……」
「聞こえない」
「乗れないの。——立ち乗りだけなの」と、スピカ。なんだって？
「だから——！　アタシ、立ってしか、彗を捌さばけないの!!」
「え……マジで？」
　それは、スピカにとっては一いっ世せ一いち代だいの告白だったようだ。彗に乗りながら俯うつむいて、こちらを見ようとはしない。
「変だな。さすが天才魔女エトワール」
「……はっきり言うわね。それ、全然フォローになってないわよ」
「でも、そこまで別に隠すことじゃないだろ。そんなこと気にしてたのか？　あれだけ飛べるんだから、全然オッケーだろ。完かん璧ぺき主義者はきっついぞ」

　きっと大笑いされて、バカにされると思っていたのだろう。ホッとしたように、
「え……あ……うん。ありがと」
「変なクセは誰にだってあるって。アホみたいにオバケが怖かったり──」
　合宿の時を思いだしながら、オレは言う。
「空から記憶喪そう失しつで墜おちてくる変なヤツもいるし」
　──それはクセじゃない。
　で、まあ、そんなこんなで、オレはうながされるまま、スピカの後ろに立ち乗りする。
「しっかり掴つかまって。落ちないでね」
「努力する」と、オレが答えると、開けた柳楽山やぎらさんの中ちゅう腹ふくから彗が滑りだし、紅くれないに染まる空に躍りでた。彗ほうきからは、伊い都と夏げ市の市街地が見下ろせる。
「ん？　何だあそこは？」
　市街地からちょっと外れた場所に、ぽっかりと開けたところがあった。公園だろうか？　博物館？　それとも何かの記念館だろうか？
「あ、あれ？　アタシんち。ちょっと、普通の人の家よりは大きいかもしれないわね」
　いや、アレでちょっとだったら、悪魔ゾディアックだって「オレより
ちょっと大きい」ですよ？
「そんなことより、上見て、上」とスピカがうながす。
「あ……星が……出てきた……」
　天蓋グレンツエンが少しずつ、夕方から夜へと代わろうとしていた。
「もう少し暗くなったら、こんなもんじゃないわよ。息を呑のむくらい、綺き麗れいなんだから」
「前も聞いたな──」
「そ。アンタ、本当は見たかったでしょ？　こないだ話した時」
「ん？　ああ──実は、見たかった」
「意地っ張り」

「誰かさんほどじゃないさ」
　スピカの彗は、どんどんと街から遠ざかっていく。
　人ひと里ざと離れた森の中に、小さな建物が見えた。あれは——昨日泊まった、合宿所だ。
「おい、どこに行くんだ？　どんどん街から遠くなってるけど」
「世界の果て」と、スピカは、素そっ気けなく答える。
　既すでに日は沈み、辺りは暗闇に包まれていく。夜空には、驚くほど多くの星が瞬またたく。
「綺麗だな」とオリジナリティのカケラもない感想を呟つぶやくオレに、
「偽にせ物ものって言ったでしょ。ほら——」
　と空の一点を指さす。その指先、——星空が、消えていた。闇よりも遥かに黒く、虫食い穴のような空間があいていた。その黒い影は——オレたちのもの？
「そう。アタシたちの影が、夜空に映ってる。星空は、天象儀カール・ツアイスが映した幻まぼろし。だから、焦しょう点てんの側そばに近づくと、影がはっきり見えるの」
「ってことは、あそこが天蓋グレンツエンなのか？」
「そ。あの影のところをくぐり抜ければ、向こう側に行ける」
　スピカの彗は、止まらない。
　オレは一瞬、不安にとらわれる。送ってあげるとスピカは言った。
　だがどこへ？　もしかしてそれは天蓋グレンツエンの外へ、ではないのか？
　スピカがオレを乗せたまま、天蓋グレンツエンを越える気なのではないか？
　それ自体は、すぐに杞き憂ゆうに終わった。天蓋グレンツエンの直前で見事に停止してみせるスピカの彗。なるほど、天才魔女エトワール。
　でも、なんだろう。その機動は妙に手慣れていて、スピカはずっとこんなことを繰り返してきたんじゃないか、なんて気がした。まるで——まるでなかなか思いきれない自殺志願者が、何度も何度も直前で踏み留とどまるみたいに……。

オレは頭をブンブンと振って、益(やく)体(たい)もない想像を頭から追いだす。

「何考えてたの？　外に出たくなった？　なら、今のうちよ」

「バカ。恋人を置いて逃げられるかよ」

オレは、こっちの世界のことを知ってしまった。恋人もできた。試用期間中だけど。

この記憶がある限り、オレは外に出たいなんて思わない。

「そろそろ、行くわね。寒くなってきたし」

スピカは彗(ほうき)をぐるりと回転。滑るように街へと戻る。遠く夜の丘で天象儀(カール・ツアイス)が光を放つ。

「ね。オザキ。下を見て。星も綺(き)麗(れい)だけど、街も綺麗よ」

空から見下ろす夜景は、まるで星空のよう。上下を人工の星空に囲まれて、オレはまるで自分が宇宙のただ中にいるような錯(さっ)覚(かく)を抱(いだ)く。

「ああ、本当だな……」

オレの言葉に応えるように、スピカは、小さな声で、詩みたいな何かを口ずさむ。

さて今、こうして夜(や)警(けい)のように、夜の真っただ中にいて、彼は、夜がみせている、あの呼びかけ、あの灯、あの不安、あれが人間の生活だと知るのだった。影の中のひとつの星、あれは離れ家だ。星の一つが消えた、あれは愛の上に閉ざされる一軒の家だ——

「それは——？」

「サン＝テグジュペリよ。世界で一番、誇り高くて、勇気があって、優しくて、ちょっとだけおっちょこちょいな飛行機乗り」

もしかして、と、思う。スピカが見せたかったのは、夜空じゃなくて、星のように瞬(またた)く夜景だったのかもしれない。自分は、この夜空みたいな景色を守るために、戦うのだ。地上の星々を守るために戦うのだ、と。

　そうやって多くの魔女エトワールも戦って、そして墜おちたのだろう。このプラネタリウムの檻おりの中で。死んでいった彼女たちは何を思ったのだろう。助けてほしい、と。死にたくない、私だって幸せになりたい、と——そうは思わなかっただろうか。

　スピカの彗は、夜間飛行の早さで、十六夜いざよいの闇の空を流れゆく。

　なあ、スピカ。

　——お前を苦しめているのも、この街じゃないのか？

（引用：『夜間飛行』サン＝テグジュペリ／堀ほり口ぐち大だい學がく訳やく）

3

　次の朝の展開は、まあ予想どおりのものだった。

　やっぱり、オレたちの行動は日下部（くさかべ）に捕捉（ほそく）されており、またも新聞の一面を飾っていた。

　見出しは、『恋人発覚？　授業時間に愛の逃避行（とうひこう）！』。またも飛行中にスピカの胸を偶然に不如意（ふにょい）に不随意（ふずいい）に確率的に掴（つか）んでしまった瞬間を激写されていた。日下部は一体、どこに隠れ、どこからこのベストショットをものにしたのか。恐るべき技量。いっそ、スナイパーにでも転職して二代目シモ・ヘイヘでも目指した方がよくないか？

「揉（も）んだのかッ!?　貴様（きさま）はッ！　『あの丘を越えて』を揉んだのかと聞いているッ！」

　そう言って詰め寄ってきたのはクラスメイトの宮本武（みやもとたけし）。このクラスに来て日の浅いオレだが、こいつの説明には困らない。ただのオッパイマニアである。『あの丘を越えて』とは、スピカの胸につけられた名前。ちなみにガーネットは『オッパニア・オッパイ』、ミラは『嘆（なげ）きの壁』だそうだ。何も言うまい。オッパイがあればそれでよし、という思想のこいつは、魔女（エトワール）とも普通に会話しようとする希有（けう）な存在だが。オレの手をがしっと掴んだ宮本。

「間接！　オッパイ！　これでオレたちは義兄弟（ソウル・ブラジャー）！」

　なんつー頭痛のしたくなる行動に出る男と仲良くしたくなる女の子はいないだろう。そして、残念だがあの柔（やわ）らかさはオレだけのもんである……じゃなくて。

「はぐらかすな!!　どうだ？　おまえとスピカは、本当に恋人同士なのか!?」

　面倒くさくなって、オレはスピカに訊（き）けよ、と話を向ける。

「ば——バカ言わないでよ！　なんでアタシとオザキが付き合わなきゃならないの!?」

　とまあ、スピカはいかにも怪しげに対応。

　クラスの疑念(ぎねん)は確信に変わったようだ。遠巻きに聞こえる噂話(うわさばなし)が、いよいよオレも魔女(エトワール)とともにクラスから距離を置かれる存在になったと告げていた。望むところだ。仲間に入れてもらおうなんて最初(はな)から思っちゃいない。
「オレだけはおまえの味方だぜ、ブラジャー」
　ちなみにこんだけオッパイしか頭にない男でありながら、所属は生徒会。貧乳通り越して、もはや無乳と呼ぶほかない生徒会長（宮本の命名によれば『ミス・ノーバディー』。同じ名前の人から少し分けてもらえばいいと思う）にして自衛軍臨時指揮官である沖姫々(おききき)の下でこき使われているのだから、人はわからない。こうして、オレに近づいてきているのも、オッパイへの純粋な下心（と言うほかない）のほかに、カルデアと接触を持つ一般人であるオレを生徒会にとり込みたい、という沖の意向があってのことだ。
　――結局、どいつもこいつも、自分たちのことしか考えてない。
　もう、それにいちいち腹を立てる気もなくなっていた。重要なのは、オレがどうするかだ。
　……そんな感じで、日々は淡々(たんたん)とすぎていった。
　スピカとの恋愛（試用期間）に進展はほとんどなかった。オレも、やっぱり男の子なのでキスの先を期待してしまうのだが、せいぜい、昼食を一緒にする程度。放課後ともなれば、特訓がある、とさっさと天象儀(カール・ツアイス)に行ってしまう。
　サボりの常習犯だったはずなのに、一体、どういう心境の変化なのか。もちろん、止めるわけにもいかない。スピカが訓練への情熱をとり戻したのなら、それは喜ぶべきことである。ではあるが……やっぱりオレは男の子なのである。恋のリビドーが燃えているのである。我が生涯(しょうがい)最大の性衝動の炎なのである。
　おまけにミラの容態(ようだい)も未(いま)だよくわからない。テロ対策だかなんだかで、入院先さえ教えてくれないのだ。さらには、ガーネットとまで疎遠(そえん)になってしまった。なんだか知らないが、オレのことを避けるのである。もしかして、怒っているのだろうか？　そりゃ、スピ

カは魔女（エトワール）で、色恋にうつつを抜かしてていい立場じゃない。しかもミラが大ケガをした矢先である。落ち込んでいたスピカに、オレがつけ込んだ、と思われても仕方がない。真面目（まじめ）なガーネットのことだ。そんなオレを信用ならない男と見なしてもおかしくはない。おかしくはないのだが……やっぱり、スピカには、支えが必要だと思うのだ。

　そんな感じのある日。予鈴（よれい）が鳴ってホームルームが始まった。
　オレは、この時間が嫌いで嫌いで仕方なかった。ホームルームの司会を務めるのはクラス委員。つまりガーネット。クラスメイトたちはろくに彼女に協力しようともせず、時間の大半が、重たい沈黙（ちんもく）に包まれて終わるのが常。いたたまれない時間だった。
「さて、いよいよ学園祭の季節です」
　壇上に立ったガーネットが言う。板書（ばんしょ）されたガーネットの几帳面（きちょうめん）な字によれば、学園祭は今週末。時間はもうほとんど残されていなかった。
「私たちのクラスも、何か企画を行わなければなりません。そこで、学園祭の出し物を決めたいと思います。何か意見のある人は、挙手をお願いします」
　――誰も、手を挙げない。というか、ちゃんと話を聞いてる人間も少ない。
「ちゃんと考えてください。みんなの学園祭です。みんなで成功させましょう！」
　ガーネットの言葉は、誰にも届かない。ほとんどの生徒が、私語を続けている。
「……ガーネットもマジメにやることないのに。勝手に委員にされたんだから」
　隣（となり）の席でスピカが呟（つぶや）く。なるほど、たしかに、立候補するようなタイプじゃない。誰もやりたがらない委員を、押しつけられたのだろう。

「あの……誰か、意見はありませんか？　何でもいいので、お願いします」

　気（き）丈（じょう）に振る舞っているが、ガーネットの声には、悪魔（ゾディアック）との戦いの時見せた強さはどこにもなかった。その視線も、不安そうにうろうろとさまよう。

　どうする——？　と考えたところで、どうしようもない。オレは、ガーネットには相変わらず避けられたまま。助けに入っても喜んだりはしないだろう。スピカはスピカで、これでガーネットも愛（あい）想（そ）尽かすでしょ、といった様子だ。

「あの、誰か、思いつきでもいいんで手を——」

「はーい」と樋（ひの）ケ（け）が、甘ったるい声で手を挙げる。

　女子の中心的な存在である彼女が発言した途（と）端（たん）、ぱたりと私語がやんだ。

「魔（ま）女（じょ）喫（きっ）茶（さ）がいいと思いまーす」

「……えと、魔（ま）女（じょ）喫茶、ですか？　え、ええと、それはどういうものでしょうか……」

「喫茶店の店員が魔（ま）女（じょ）の格好で接客するの。都会じゃ、コスプレする喫茶店流（は）行（や）ってるっぽいし、ウチには本物もいるし、ちょうどいいと思いマース」

　さんせーい！　と、クラス中から、悪意を孕（はら）んだ同意の声が湧（わ）きあがる。

「……わかりました。それじゃあ、クラスの出し物は『魔（ま）女（じょ）喫茶』で。それでは、詳しい内容を決めていきたいと——」

「そこらへん、魔女（エトワール）さんたちで決めたらどうですか？　だって私たち、魔（ま）女（じょ）のこと知らないし。仕方ないですよね。カルデアは私たちに何も教えてくれないんだから」

「あの、でも……」と動揺するガーネットを黙らせようと、クラス中から賛同の声が湧く。

「それじゃ、詳しいことはガーネットたちに決めてもらうことで、解散でいいですね？」

「でも、それじゃクラスで出し物をする意味が……」

「コレがクラスの声だと思うんですけど～」

　――こいつら、どこまで調子に乗るつもりだ!!

　もうガマンできない。避けられてようがなんだろうが知ったことか。放ってはおけない。

　立ち上がろうとしたオレ。だが、その肩が後ろから押さえつけられ、引き寄せられる。

「気持ちはわかるが、抑えろ、オザキ」

　耳元で囁(ささや)いたのは、後ろの席の宮(みや)本(もと)だった。

「ここでおまえが怒鳴れば、余計、ガーネットが孤立する。わかるだろ？」

「だからって……」

「オレに任せろ」

「信用できん。どうせ、またオッパイ関係だろう？」

「あのな、オレだって生徒会のメンバーで、学園祭は生徒会の預かりだ。考えてもみろ。当日に、ガーネット一人がクラス企画を切り盛りなんて、どう考えてもイジメがあります！　って喧(けん)伝(でん)しているようなもんだろう。生徒会のメンツに関わるし、オレの責任にもなる。オレだって、沖(おき)先輩の薙(なぎ)刀(なた)は怖い。まだ揉(も)んでないオッパイは星の数ほどあるんだ」

　揉(も)んだことのあるオッパイが一つでもあるのか――ではなくて――ガーネットはどうでもいいが、自分が困る、ということか。完全に信用はできないが、自分の身の安全が懸(か)かっているのであれば、信じてもいいかもしれない。

「それで、手はあるのか？」

「不本意だが結(ゆ)花(か)に頭を下げるさ。あいつだって根は悪いやつじゃない。新聞部になんて入ったせいだよ。ホントは魔女(エトワール)たちにちょっとした圧力をかけて、バーターで情報を得ようって肚(はら)だったのが、相手が強(ごう)情(じょう)だったせいで、引っ込みがつかなくなってるだけだ」

樋(ひの)ヶ(け)を庇(かば)うような発言をする宮(みや)本(もと)。理由があればガーネットを傷つけていいとでもいうつもりか、と言いたくなったが、グッと堪(こら)えて呑(の)み込む。

新聞部所属の樋ヶと生徒会所属の宮本。所属がゆえに、普段は犬(けん)猿(えん)の仲だという二人だが（まあ統治勢力とジャーナリズムなんだから、仲が悪くて当然で健全でもある）、実は幼(おさな)馴(な)染(じ)みという間柄でもあった。昔からの知人を庇いたいという心情は理解できた。同意しようとはカケラも思わないが。

「で——オレは何をすればいい？　沖(おき)のところに顔でも出せばいいのか？」

「バカ言え。オレとお前はソウル・ブラジャーだろ。友情は見返りを求めない！」

なるほど。貸し一つというわけか。不本意だが、ここは宮本に頼るしかなさそうだった。

「わかった。頼む」

時間を余らせて、ホームルームが終わった。散(ち)り散(ぢ)りに解散する、クラスメイトたち。

オレは、放心状態で教卓に佇(たたず)むガーネットに声をかける。

「おい、大丈夫か？」

「あ……オザキくん？　は、はい。ありがとうございます。大丈夫です！」

途(と)端(たん)に、ガーネットが姿勢を正す。

その緊張した声に、拒絶の匂いを嗅(か)ぎとるオレ。別にオレだって、嫌いな相手との会話、なんて、要(い)らぬ気苦労をさせたくないので、簡(かん)潔(けつ)に要点だけ告げる。

「あんま心配すんなよ……宮本が生徒会の意地で、何とかしてくれるっていうから」

「え……宮本君ですか……？」

不安そうに言うガーネット。もしかして、宮本が苦(にが)手(て)なのだろうか。だけど、オレにとれる手は、ほかにないのだ。それだけ告げて

「じゃ、オレ、帰るから……」と、立ち去ろうとするオレをガーネットが呼び止める。
「あの、あの……」ガーネットの言葉は、なかなか意味を成なさず……。
「あ、いえ！　いいんです！」
　やっぱりあなたの話は聞きたくない、とばかりに立ち上がるガーネット。
「あの、スピカさんに、今日は、ちゃんと特訓に来てください、って伝えてください！」
「え？　――最近は、いつも行ってるんじゃないのか？」
「来てないです。ほら、今、ミラちゃんが来られないから、新しいフォーメーション考えないと、大変なんです。よろしくお願いします！」
「っつか、なんで直接言わないん――」
　オレの言葉を最後まで聞かず、ガーネットは教室の外へ。まるで逃げるように、いなくなってしまった。嫌われたものである。
「ガーネット……なんで、あんななんだ……？」
「……なんでアタシに聞くのよ？」
「だって……同じ魔女エトワールだろ？」
「仲悪いわけじゃないけど、特に良いってわけでもないし」
　いやに刺とげ々とげしいスピカの言葉。こいつの反応も変だ。そういえば最近直接話しているところも見かけない。オレのせいで、スピカまでガーネットに嫌われてしまったのだろうか。
「じゃ、アタシ、カルデアに行くから」
　そう言って、教室をあとにしようとするスピカを呼び止める。
「あー。というかおまえ、カルデアに行ってないだろ。ガーネットが、教えてくれたぞ」
「う…………」と、立ち止まるスピカ。どうやら、図星のようだ。
「なんでサボってんのに一人で帰るんだよ。そんなに一緒のところ見られたくないのか？」

「当たり前じゃない！　だって――」と、スピカは言葉を探す。
「そんなの見られたら……なんか普通の恋人同士っぽい……とにかく、恥ずかしいの！　一人で帰って！」
　有(う)無(む)を言わせない口調で、オレを教室から追いだしにかかるスピカ。
「ってか、今日こそカルデアに行けよ。ガーネット、待ってたぞ」
　と、無駄と知りつつ念を押すのがやっとだった。

　スピカはずっと、みんなの目を気にしていて、ガーネットは、学園祭の準備に忙(ぼう)殺(さつ)されたまま。ミラは、学校にやってくることもない。そしてオレは、特に変化を求めることもない。同じような毎日をすごし……。
　あっという間に、学園祭の本番が近づいた、そんなある日のランチタイム。
「待ってて。すぐ、戻るから」
　昼休み、スピカが席を離れる。これから、いつもの昼食。自分の机で、スピカが買ってきたコンビニのサンドイッチ（に見せかけた襟(きん)在(ざい)手製）を食べる。その後、適当に授業をこなして、一人で帰る。
……はずだった。
「あの……オザキくん。ちょっと、いいですか？」
　そんな「いつも」は、背後からの呼びかけに破られる。声の主は、ガーネットだ。
　オレと目を合わせたくないのだろうか。その顔は、俯(うつむ)いている。
「学園祭で何か問題でも？　それともスピカがカルデアに行ってないとか――」
「そうじゃないんです!!　あ……ごめんなさい。大きな声出して……」
「あ、いや。いいんだけど……。それで、何……？」
「あの噂(うわさ)って、ホントなんですか？　……スピカちゃんと……付き合ってるっていう……」

来るべきものが来た、という感じだ。

訓練の邪(じゃ)魔(ま)になるから、やめろ、とでも言われるのだろうか。スピカが訓練をサボるのはオレのせいだ、とか——そんな予想から、自然とオレの身体は身構えてしまったのだろう。ガーネットが不安そうに身体を縮(ちぢ)こまらせる。

「たしかに付き合ってはいる。試用期間中だけど……えーと、なんか、相性を試(ため)してるんだって。つっても、本人は恋人って見られるのが嫌(いや)らしくて——」

「そうなんですか……。なら、よかった——あの、スピカちゃんって、結構思いつきで動いたりするから。迷惑だったら、私から言いましょうか？」

それは遠回しに、付き合うのをやめろ、と言っているのだろうか。だけど、オレも譲(ゆず)る気はなかった。今のスピカに必要なのは、きっと、フォーメーションだとか作戦とかじゃない。心の余(よ)裕(ゆう)を、とり戻すことなんだ。だから、オレははっきりと言う。

「別にいいよ。迷惑なわけないし。むしろオレを選んでくれて、嬉(うれ)しいし」

「え……？　あ……。そうなんですか」

さあ、何を言われるか——と覚悟したオレ。

「……あの……がんばって、ください」

だが、ガーネットの返答は予想に反して、あっさりとしたものだった。

「スピカちゃん、ホントはすごくいい子だけど、意地っ張りですから。弱いところも隠したり。お母さんが教育ママだったらしくて、できないことを、すごく恥ずかしがるんです」

「ああ、なるほど」と、こないだの彗(ほうき)に関しての告白を思いだす。

「私、スピカちゃんとの付き合いは、長いですから。何か知りたいことがあったら、何でも聞いてください——二人のこと、応援してます」

「ありがとう。……おまえも学園祭、がんばれよ。なんかあったら、

手伝うから」

「はい。任せてください！　じゃあ、私、出し物の打ち合わせがあるんで、失礼しますね」

　じゃあ、とガーネットは、にっこり笑って、廊(ろう)下(か)に出て行った。

　拍(ひょう)子(し)抜けしてしまった。止められるどころか、応援までされてしまった。それに、打ち合わせがある、ということは、クラス企画も順調なのだろう。ほっとする。

　でも、じゃあ、ガーネットはなんでオレを避(さ)けるようになったんだ？　スピカとのことを、怒ってたんじゃないのか？　その後ろ姿を見送ったまま、そんなことを考えていると。

　いつからオレたちの会話を聞いていたのだろう。

「アンタ、ちょっと来なさい」

　と、いつの間にか戻ってきていたスピカに首根っこを掴(つか)まれた。

「お、お二人さん。授業サボってデートか？」

　と宮(みや)本(もと)が声をかけてくる。おまえ、ガーネットと打ち合わせがあるんじゃないのか？

「違うっ！　そんなわけないでしょ！」

　と、オレが突っ込む前に、真っ赤になってスピカが反論。周囲からあがる冷やかしの声に八つ当たりするかのように、強引にオレを引っ張っていく。

　一体どうしたんだ？　いつもは一緒に帰るのさえ嫌(いや)がるのに、こんな強引に。もしかしてガーネットと浮気とでも疑われたのか？

――などなど疑問は尽きないが、どうせ訊(き)いても答えてくれないのは、これまでの経験からわかっているので、おとなしく従う。

　向かった先は、柳楽山(やぎらさん)の斜面を削って作られた遊園地だった。

　というか、とにかく学園から出たかっただけで、行き先は途中で決めたらしい。

「ね、オザキ。あれ、何？」と、辿(たど)り着いた遊園地の入り口で、スピカが訊いてきた。

「あれ？　券売所だろ。入場料払ってチケット買うんだよ」
「え？　なにそれ？」
　参(まい)った。券売所も入場料も知らないときた。これが真性お嬢様というヤツか。
　これでは、どちらが記憶喪(そう)失(しっ)かわかったもんじゃない。
「えーと、つまり、アレだ。乗り物で遊ぶ対価っていうか……」
　当たり前の常識を人に説明するというのは意外に難しい。
「悪かったわね、世(せ)間(けん)知らずで！　仕方ないでしょ。初めてなんだから！」
「——そ、そうなのか？　遊園地入るのが？」
「当然よ！　こんなちゃらちゃらしたトコ！
　アタシは、クラスの連中と違って、遊んでる余(よ)裕(ゆう)なんてなかったんだから！」
「それが……羨(うらや)ましかった——のか？」
「べ……別に。た、ただ人生経験にはいいんじゃないかと、思っただけよ」
　苦しい言い訳。まあしかし、下(へ)手(た)につっつくのはやめた。
「チケット、アタシの分もよろしく。どのくらい要(い)るの？　これで足りるかな？」
　渡されたサイフは、京(きょう)極(ごく)夏(なつ)彦(ひこ)の小説本のように分厚かった。ライフル弾でも止められそうというか、こんなのどこに入っていたんだというか。しかも当然というか全て万札。
　本当なら、デートなんだから、オレが出すのがセオリーだろうが、アリデッドから渡される昼飯代五百円がお小遣いの全てというオレの経済事情は、第一次大戦後のドイツのように逼(ひっ)迫(ぱく)していた。節約くらいでは焼け石に水、ヴェルサイユ条約にローザンヌ会議なのだ。
……って、あれ？　そういや。
「そういや、初めてだな、こうやって、デートするの」
　オレは言った。そうなのである。オレとスピカは、恋人同士（試用期間中）になったものの、一緒に昼飯を食べるくらいしか、していな

かったのだ。
「え……あ……そういえば……そうだったわね……」
　スピカも、今になってその事実に思い至ったようだ。
　オレの言葉を聞いた途と端たん、深呼吸を繰り返し、手を握ったり開いたりしている。
「何、やってんだ？」と、呆あきれ気味に呟つぶやくオレに、
「な、なんでもないわよ！　この天才魔女エトワールのアタシなら、デートの一つや二つ！」
　胸を張って言った。いや、そりゃ、そうだろうが……。
　で。ゲートをくぐれば、思ったより人は少ない。平日だから仕方もないだろうが。
　ぐるりと見渡すに、まあ普通の遊園地といった感じである——が——。
　そして入場前の緊張もどこへやら。「ね、オザキ！　アレ、何？」とスピカは、子どものように目を輝かせ、ジェットコースターに走りだしている。……オレ、絶叫系が苦手だったりしないよな？　なんてことを考えながら、慌あわててあとを追う。
「きゃあああああああああ」（←スピカ）
「のあああああああああああ」（←オレ）
　——大丈夫なようだった。もしかしたらミラの曲芸飛行で、慣れたのかもしれない。
　意外だったのはスピカの反応。
「な、なんなのアレ！　あり得ない。なんで逆さまになったり地表すれすれまで落ちたり——なんであんなのに好きこのんで乗るわけ？」
「いや、そういうもんなんだよ……おまえ、苦にが手てか？　あんなに彗ほうき星で空飛んでるのに？」
「苦手じゃなくて、嫌い。自分で操作するのとは違うの！　大体、なにが悲しくて、自分からあんな怖い思いを——あれ？　あそこにあるの、何？」
　話の途中で、既すでに別のアトラクションに目移りしている。マジで

子どもである。
「ん？　アレか？　ヴァイキングって言って――って、おい、ちょっと待て！」
「早く！　次の便が出るって！」
「わかった、わかったよ……どんなことになっても知らねーぞ」
「きゃあああああああああ」（←スピカ）
「のああああああああああ」（←オレ）
　と、まあ、こんな調子でアトラクションをハシゴする。
「ほらほら、退(ど)いた退いた退いた――っ！」
　ゴーカートで他の客をごぼう抜きしてみたり――。
「いや、ゴメン！　それだけは堪忍(かんにん)！　嫌(いや)ああ！」
　オバケ屋敷の前で周囲の視線も顧(かえり)みず暴れたり――。
「アタシに射撃で勝とうなんて、百年早いわよ」
　射撃場の景品を根こそぎ奪いとってみたり――。
　あっという間に空が紅(あか)く染まる。短時間で連れ回されて、さすがのオレもクタクタだ。
「今日は、ありがとね。アタシこんなに楽しいの、初めてかも」
　スピカの飾らない笑顔に、胸が締めつけられる。
　こんなことくらいで、満面の笑顔を浮かべるスピカは、一体これまで、どんな生活を送っていたのだろう。この世界にはもっと楽しいことがたくさんあるんだ。楽しいことで一杯なんだ。オレが、それをおまえに教えてやる――そんな思いをぐっと飲み込んで。
「来て、よかったな」
　学校では、絶対に見せない笑顔。それが見られただけで、今日は満足だ。
「ね、次はあの観覧車、行こうか？」
「空からの眺めなら、いつも見てるんじゃないのか」
「そういうもんじゃないでしょ。ほら、早く！」
　スピカに手を引かれて、オレは走る。まるで本物の恋人同士だ。今までずっと溜(た)め込んできた鬱(うっ)憤(ぷん)を、一気に全部解き放つみたい

に、スピカは躍動する。オレは、彼女の弱さを知っていて——彼女が普段見せない笑顔も、知っている。

　この笑顔を、ずっと近くで見ていたいと思う。

　だけど。残ざん酷こくなカメラのフラッシュが、それを一瞬で打ち砕いた。

「スクープ」

　その声の主は、もちろん日くさ下か部べだ。「こんなところでデートなんて。我われ々われを誘ってるんですか？　露出狂ですか？　見られると興奮するんですか？」などと、妄もう想そうを逞たくましくする。

「デート？　そんなわけないでしょ？　なんで、アタシが、オザキとデートなんて——！」

「明日のトップ記事は、コレで決定です」

「ちょっと、バカ！　やめなさいよ！　貸して！」

　スピカは顔を真っ赤にして飛びかかるが、日下部の人間離れした動きに翻ほん弄ろうされる。

「ふざけているのは、貴き様さまだろう!!」

　園内に大だい喝かつが轟とどろく——気づけば周囲には、生徒会執行部の面々が並んでいた。

「授業を放ほう棄きして何をしているかと思えば……こんなところで、不純異性交友とはな」

　まるで、犯罪者でも見つけたかのように、オレたち二人を取り囲む。

「スピカよ。自覚があるのか？　貴様は伊い都と夏げ市の住民の命を、任されているのだぞ」

「……わかってるわよ」

「わかっておらん！」と、一喝。沖おきがスピカへと薙なぎ刀なたを向ける。

「わかっているなら、なぜ稽けい古こに精を出さん？　色恋にうつつを抜かしてる場合か？」

「ほっといて！　アタシの勝手でしょ」

「勝手なものか！　先日ミラが墜ちたのも、貴様の怠慢（たいまん）が原因ぞ！」

「――――ッ！」

　スピカが絶句する。その唇は、強く噛（か）み締められ、反論はもう出てこない。

「それなのに、今更（いまさら）、不純異性交友だと？　甘ったれるな！　いいか、何度でも言うぞ！　貴様（きさま）には、この世界を守る、義務があるのだ！」

　胸を張った尊大な態度で、沖（おき）はスピカに告げる。

　スピカは唇を結んだまま。俯（うつむ）いたまま、よろけるようにオレに寄りかかる。

「……黙れ!!」――オレは、叫ばずにはいられなかった。

「おまえらにスピカの何がわかる!?　こいつがどんな気持ちで戦ってるか知ってるのかよ？」

「オザキ。もういいよ。やめて」

　と、後ろからスピカが制止するが、聞く気はなかった。スピカのためでもある。だけど、それ以上に、オレがこいつらを許せなかった。

「こいつは、おまえらの手が届かないところで、一人で、命を懸（か）けて戦ってんだぞ！　わかってんのか？　こいつは今までおまえらを守るので手一杯だった。こんな年頃の女の子が、遊園地に来たこともなけりゃ、恋をしたこともなかったんだぞ。わかるか!?」

　堰（せき）をきって溢（あふ）れでた言葉は止まらない。

　この街を今日まで守ってきたのはスピカだろう。おまえたちが気楽に軍隊ごっこやらジャーナリストごっこに興じていられるのは、スピカがおまえらを守ってくれたからだろう。それなのに、感謝の言葉の一つもないのか。ひとときの休息さえ許さないのか。

「そんなヤツが、たった一度デートをしたからって、なんで文句をつけられる筋合いがあるんだよ？　おまえら一度でも、こいつの身になって考えたこと、あるっていうのかよ！」

「ほほう、言うではないか。では訊（き）くがな。新参者（しんざんもの）の貴様に

は、一体何がわかるというのだ？　なぜ貴様だけが、スピカの本当の心を覗のぞけるのだ？」

　人を小バカにしたような傲ごう慢まんで不ふ遜そんな笑みを浮かべる沖。それこそお笑い草だった。

「わかるに決まってんだろ。オレを誰だと思ってる？」

　わかり合うのに必要なのは時間なんかじゃない。スピカのことを始めから理解しようとしてないおまえらなんて、たとえ百億年かけようが、オレの認識には届かない。

「オレは、スピカの、恋人だ」

　沖の視線を正面から受け止めながら、オレは言う。わずかに沖がたじろぎ——。

　そして——オレの身体が浮いた。

「えっ？　な、あ——ちょっと！　スピカ何を！」

　スピカの怒声。いつの間にか、彗ほうきに乗っていた彼女に、オレは背中から引っ張り上げられ、宙づりになっていた。彗はどんどん高度を上げる。

「卑ひ怯きょう者ものめ！　貴様ら、逃げるつもりか——！」

　叫ぶ沖の姿も、みるみるうちに小さくなっていく。

　逃げだしたスピカの彗ほうきが辿たどり着いたのは、海岸だった。冷たさを帯びた風には、潮しおの匂いが混ざっている。既すでに日は暮れ、天蓋グレンツエンが偽にせ物ものの星空を映しだす。

「余計なこと言って、悪かったか？」

「あ、ううん。嬉うれしかった。だから、その——アリガト」

　それは、いつものように気持ちだけ受けとっておくの「ありがと」ではなく。

　偽いつわりのない言葉に、救われた。

　靴くつには、砂の感触。波の音が繰り返す。微かすかな月明かりに、白い泡あわ飛沫しぶきが生まれて、消える。足下には、乾いた流木にアイスの棒。穴あき浮き輪に、ゴムボール、使い終わった花火。夏の残ざん滓しした

ち、そのどれもが、日に乾き、塩と砂にまみれている。

「まだ、売ってるかな？　すぐ戻るから、待ってて」

「何が？　おい、どこ行くんだ？」

　スピカは、海とは反対側に向かって走りだす。その先に一軒のコンビニが見えた。

　波を見ていると、それだけですぐに時間がすぎる。

「お待たせ。売れ残りだって。オマケしてもらっちゃった。バケツも貸してくれたし」

　そう言う彼女が買ってきたのは、季節外れの花火だった。

「まずは、コレ」

　スピカが手にとったのは、キャンディーのように金テープが巻かれた、手持ち花火。

　ライターを受けとって彼女の前に構えた。火が、ダランと垂(た)れた紙の部分に燃え移る——が、なかなか、火薬に点火しない。

「湿(し)気(け)ってんじゃないのか？」

「そんなわけないって——点(つ)いた！」

　先端から勢いよく飛びだす黄色の炎。黄から青、青から赤とみるみる色が変わる。

「ほら、早く次！　くっつけて！　火、消えないうちに」

「え……？　あ、ああ」

　オレは慌(あわ)てて、新たな花火を引っ張りだす。身体を寄せ、火を貰(も)らった。

「早く、先っぽ近づけて！」「わかってるから、じっとしてろって」

「早くして！」

　なんて微妙に怪しげなこと言いつつ……着火！　火は新たな花火に受け継がれる。

　互いに顔を見合って、微笑(ほほえ)む。

「いや、一仕事やり終えたって感じ？　初めての共同作業？」

「なんだそりゃ——ほら、こっちももうすぐ消えるぞ」

「え？　マズ！」

　人ひと気けのない秋の海で虹にじ色に弾はじける火花がリレーされる。売れ残りの花火は、あっという間に消えていく。締めはコレ、と、スピカが最後にとりだしたのは、線せん香こう花火だった。

「スターマインとか、派手な方が良かった？」

「いや、いいよコレで。ベタにいこうぜ」

　潮しお風かぜから隠すように身体を寄せ合い、火を点つけた。炎が薄紙を燃やす。火の玉ができ、ぷつぷつと音を立てる。微かすかな音を立てて、火花が飛びだす。最初は、様子をうかがうように。やがて、一いっ斉せいに火花が飛びだし、枝分かれする。

　スピカは、吸い込まれるように火の玉を見つめている。

　オレもまた、線せん香こう花火の先に魅み入いる。

　音もなく、火が落ちた。

　砂の上で、真っ赤な火の玉が、燻くすぶるような音を立てる。

「……ミラもね……」とスピカが、久しく口にしていなかったその名を呟つぶやいた。

「ミラも……こんなふうに、墜おちたの……」

　そのまま、心の澱おりを吐きだすように、彼女は言う。

「沖おきの言うとおりよ……ミラは、あたしのせいで、やられちゃったの。でも、どうしたらいいの？　どうすればよかったの？　ねえ、アタシの力が足りなかったから、みんな死んだの？　アタシがもっとがんばればいいの？　なんでアタシなの？　アタシ、誰を守ればいいの？　わかんない。もう……わかんないよ……」

　答える言葉を、オレは持たなかった。



　スピカは顔を俯(うつむ)け、耐えようとする。それでも、噛(か)み殺せない嗚(お)咽(えつ)が、漏(も)れでる。

　地に落ちた火の玉はもう消えていて、どこに落ちたかもわからなかった。

「みんな、みんな、いなくなるの……もう、やだよ。こんなのって、ないよ。アタシ、もう、こんなの、たくさんだよ……」

「ゴメン……オレ、なんにもできなくて、ゴメン」

「やだ……なんでそんな顔するの？」

　そんな顔と言われてもわからないが、きっと酷(ひど)い顔をしていると思った。オレに力があればよかったと思う。魔法でも何でもいいから、彼女たちの代わりに戦ってやれるだけの力が。だけど、事実、オレは単なる一般人でしかなかった。

「オレは、さ。超人じゃないだろ？　だから世界を救ったり、できないんだ」

「うん。そだね。知ってる」

　それでも、オレは絶望しちゃいけないと思った。無力さに絶望するなんて、ただの逃(とう)避(ひ)でしかない。そんな暇(ひま)があるんだったら、彼女のために何ができるか考えるべきだ。

「――でも、言ったよな。おまえが、もちっとマシな顔になるためだったら、なんでもやるって。……変な言い方だけど。おまえの涙くらい、ふけると思うんだ。隣(となり)に座って、話を聞いてやることはできると思うんだ。それでは、役に立たないか？」

　スピカが、無言で、わずかに身を寄せてきた。肩と肩が、触れ合う。

「ううん。そんなことないよ。正直、助かった」

「泣きたくなったら、いつでも、側(そば)にいるから、さ」

　オレは、彼女じゃない。彼女は、オレじゃない。それでも、彼女のためにできることは、あるはずだ。そう、信じたい。嘘(うそ)でも信じる。オレが信じないでどうする？

「あの、ね。わかんないけど、ね……試用期間、終わっていいかも」

「え……？」つまり、それは……。「終わって、でも、一緒にいていいのか？」
「うん。まだ、よくわかんないけど。でもさ、アタシのこと、好き？」
「……ああ。好きだよ——スピカ」
「ありがと。アタシも、オザキのことが、好き」
　そう言ってから、けれど、スピカは「——かも」と、つけ足した。
「かもってなんだよ」
「だから、さ……アタシ、愛のパワーで、アタシをかっさらってくれる？」
「なんだそりゃ。かっさらう……？」
「いや、ない。なんでもない。ゴメン。忘れて。なんでもない！」
　スピカは、立ち上がる。自分の言葉が、恥ずかしくなったみたいに、視線を合わさないまま、逃げるように後始末を始めた。そんな姿を見ていると、オレまで、恥ずかしくなった。けど——それは全部、本当の気持ちだ。その気持ちは、揺るがない。そう思った。

　二人だけの時間はあっという間に過ぎてしまう。
　日が昇れば、また学校だ。
　気が重い。案あんの定じょう、登校してみれば、樋ひの ケけがオレに新聞を突きつけてくる。
「さあさあ、今日の『伊い都と夏げ校内新聞』は大スクープ！　性しょう悪わる魔女エトワールの恋人が発覚よ！」
　案の定、昨日の写真は、一面を飾っていた。極太ゴチック体が躍っている。
『恋の魔法をかけちゃうゾ！　魔女エトワールスピカ、授業をサボって遊園地デート！』
「どうなの？　渦か中ちゅうの人として、何かコメントを!!」
　もう、いい加減いろいろ溜たまっていたので、思わずぶちまけてしまった。

「……で、これが悪魔ゾディアックの謎とどんな関係があるんだ？　オレとスピカのデートコースを聞かせてやれば、おまえらは世界の真理に近づけるのか？　そんなに部数を増やしたいなら、女の裸でも載せたらどうだ？」

「そ……それは……」

　まくし立てるオレに怯ひるんだ樋ヶの手から、新聞紙をもぎとって、力任せに破り捨てた。

「な、なにすんのよ!?　せっかく、私たちが……」

「おまえたちこそ、せっかくこの世界を守ってくれてる魔女エトワールたちになんのつもりだ。もう二度とこんなモン、オレやスピカの視界に入れんな」

　樋ヶのとり巻きの女どもから、非難の声があがる。視線が冷たい。だが、構うものか。もう試用期間は終わりだ。オレがスピカを守ってやらなきゃいけない。

　やがて、スピカが登校してきた。だが、オレの剣幕が少しは効いたのだろう。樋ヶのやつはおとなしくしているようだった。

　昼休みを告げる鐘が鳴る。

　これで、今日の授業は終わり。午後からは、明日の学園祭の準備にあてられている。

「ね……オザキ、悪いんだけど、今日は、一人でご飯食べてくれない？」

　試用期間は終わったはずなのに、なぜか、スピカはそう言った。

「これ、オザキの分のお弁当。あとで、美お味いしかったかどうか聞かせて」

　手渡されたのは、いつもどおりのコンビニ袋……ではなく、可愛かわいい布袋だった。

「それは、いいけど……どうしてだ？　一緒にいられるところ、見られたくないとかかな？」

「違うの。一緒にいたいから、アタシ、ちゃんと言わなきゃいけないの」

「ん？　言うって？」
「なんでもないの。アタシの、ていうか魔女エトワールの問題。じゃ、そういうことで」
　そう言って、スピカはオレの机から離れると、お弁当の蓋ふたで視界を遮さえぎりながら、一人で昼食を摂っているガーネットに声をかけた（なぜか、ガーネットは、お弁当の中身を誰にも見せようとしない）。何事か言葉を交わした後、二人で廊ろう下かへ出て行く。
　魔女エトワール同士の打ち合わせだろうか。クラスメイトの視線を感じる。どうせフラれただの何だのと無責任な噂うわさをしているのだろう。正直、気分が悪いので、オレも教室を出る。
　中庭の適当なベンチに座り、スピカから渡された弁当を広げる。
「弁当……ていうか……おにぎり？」
　しかも非常に不格好だった。どう見ても襟きん在ざい作ではない。感想を聞かせろ、とスピカは言っていた。つまりスピカの手作り……？　期待半なかば、覚悟半ばで食いつく。
「ん。美う味まい」
　ちょっと塩気が効きすぎているが、いろいろお疲れ気味のオレにはいい刺激だった。
　券売所も知らなかったお嬢様だ。料理なんか、したことなかったに違いない。そんなスピカがオレのためにわざわざ慣れないことをしてくれた。
　……そんな感動に浸ひたりつつ、おにぎりを平らげた頃だ。オレと同じように、中庭で昼食を摂っていた学生のうちの一人が、空を指さした。
「お、魔女エトワールだ」「なんだ、またサボりか？」
　ん？　つられて、空を見るオレ。スピカだった。柳楽山やぎらさんの方に飛んでいく。なんだろう。カルデアに用事でもあるのだろうか。……でも。どこか、ヘンだった。なんというか、いつもの天才らしい余よ裕ゆうのある機動じゃない。まるで泣きながら、全速力で逃げ去るような、なりふり構わない不格好な飛び方だった。

　胸騒ぎがした。急いで教室に戻ると、ガーネットが元の席に戻っていた。学園祭の企画に使うのだろう。何か、縫ぬい物をしている。

「ガーネット……スピカが飛んでいったけど、何か、あったのか？」

「あの……すいません……ちょっと、ケンカしちゃって。……えっと……訓練に出てくれるよう、お願いしたんですけど。あの、スピカちゃんのところへ行ってもらえませんか？　今、スピカちゃんの力になれるのは、オザキくんだけですから。私、ずっと、スピカちゃんを待ってます。そう、伝えてもらえますか？」

　頷うなずいて柳楽山に向かおうとするオレの背中に、ガーネットの声がかかる。

「あの……これ、持っていってください……ないと、会えないと思いますから」

　そう言って差しだされたのはスターリット。なんたるマヌケ。スピカが向かったのは、柳楽山のあの場所しか考えられない。で、あそこは、これがなければ入れない。でも……。

「私は、大丈夫です。それ、予備の分ですから」

　そうガーネットは言う。礼を言って、スピカの、――恋人のもとに急ぐ。

　案あんの定じょう、スピカは、あの丘にいて、俯うつむいて座っていた。

　オレが近づいてきたのに気づいていたのだろう。少しだけ、顔を上げる。その顔は、ひどく暗い影が落ちていた。まるで、ミラが墜おちた日の翌日みたいに。

「ゴメン……。今日は、一人にして」

　簡かん潔けつな、しかし、明確な拒絶の言葉。

「何があったんだ？　ガーネットも心配してたぞ？」

「帰って。今日は、このままでいさせて」

　一体、どうしたんだ？　おまえの涙はオレがふいてやる、そう言ったのはつい昨日のことで、おまえだって助かる、と言ってくれたじゃないか。あれから、まだ丸一日と経たってない。なのに、なんでそんな正反対の態度になるんだ？

「開けてくれ。話を聞かせてほしい。恋人同士だろう、オレたち。話してくれよ」

「ごめん。でも——恋人だから、話せないこともあるの……」

　スピカの懇願（こんがん）。俯（うつむ）く顔が、震えている。

　なんと声をかけたらいいものか。ガーネットと何があったのか。わからないことには、手の打ちようがない。だけど、沈黙（ちんもく）が怖くて、オレは言葉を紡（つむ）ぐ。

「ガーネットがな……私、ずっと、スピカちゃんを待ってますって、言ってたぞ。何か、気に障（さわ）ること言われたのかもしれないけど、あいつだってきっと学園祭の準備と魔女（エトワール）の仕事で大変だったんだよ、きっと。放っておいちゃダメだろう。少しは、あいつのことも考えてやれよ。あいつの立場もわかって——」

「わかってるわよ!!　ガーネットの考えていることも、彼女の想いも全部わかってる!!」

　スピカの叫びがオレの言葉を遮（さえぎ）る。それは悲鳴であり怒声でもあった。

「あんたなんかより、ずっと考えてる!!　わかってる!!　アタシにとってガーネットが、どれだけ大切だと思うの？　八十八人いたうちで、たった二人残った魔女（エトワール）なのよ！　アタシが何回、彼女に命を助けてもらったか知ってる？　彼女のために、何回命を投げだしたか知ってる？　ずっと、戦場で命を預けてきた、パートナーなの！　自分の命なんかよりも、ずっと、ずっと大事だって、何の迷いもなく言える人なのよ!!」

　思いの丈（たけ）を吐きだすように言い終えて、スピカは顔を覆（おお）ってしまう。

「ゴメン……オレ……何も知らないくせに、勝手なこと言って……」

　これじゃ、生徒会の連中と何も変わらなかった。

「ううん……オザキのせいじゃないの……。悪いのはアタシだから……これはアタシとガーネットの……ううん。アタシの問題なの。だから、お願い。今日は、一人にさせて……」

　続く嗚咽（おえつ）に、言葉が溶けて消えた。もう、かける言葉が見当たらなかった。
「あのさ。おにぎり、美味（うま）かったぞ。また明日、頼むな」
「え……あ……、ありがと」
　その最後の言葉だけは、昨日までの、お昼までのスピカだった。
　オレのこと、嫌いになったわけじゃないんだよな。そう自分に言い聞かせて、オレは後ろ髪を引かれながらも、引き返した。

　結局、スピカのことが気がかりで遅くまで眠れず、寝不足のまま、学園祭当日を迎えてしまった。身支度（みじたく）を調（ととの）え、リビングに向かうと、相変わらずビールの空き缶を盛大にまき散らしながら、イビキをかいて寝ているアリデッドがいた。テーブルに乗っているのは、荷物を運ぶ魔女（エトワール）のアニメのＤＶＤケース。珍しくマトモな趣味だった。

　起こそうかと思ったが……やめる。どうせ学園祭だ。アリデッドの仕事もないだろう。

　さて。オレは学校へ直行せず、以前、空から見た記憶を頼りにスピカの家の前に向かう。

　あの様子だと、学園祭をサボってもおかしくはない。でも、せっかくのお祭りだ。さすがに今日くらいは、思いきり遊んだところで、生徒会の連中もうるさくは言わないだろう。スピカのためにも、なんとか連れだしてやりたかった。

　それに……ガーネットと、顔を合わせてちゃんと話せば、案外、あっさりと仲直りできるかもしれないし。

「しかし、こうしてみると、ホントにすげぇな」

　一度、空から見たことがあるものの、実際、前に立つと、その大きさには圧倒される。ものすごく高い塀（へい）に囲まれた敷地。端（はし）の方はちょっと霞（かす）んでいた。ここでスピカが暮らしているなんて信じがたい。門の前に立っただけで、畏（おそ）れ多い気がしてきた。

　それでも、オレは意を決して、インターホンを押す。

『これはこれは、オザキ様。ようこそいらっしゃいました』

　返ってきたのは、聞き覚えのある声。襟在一郎（きんざいいちろう）。

『ですが、お嬢様は、ただいま就寝（しゅうしん）中です。昨晩は、なかなか寝つけなかったご様子で』

「そうか……でも今日は学園祭があるんだ。起こしてくれないか？」

『お断りします』ぴしゃりと拒絶。『何人（なんぴと）とてお嬢様の睡眠を妨（さ）

またげることは許されません』
　学園祭など知ったことか、と言わんばかり。あいつが遅刻する理由がよくわかった。
『さ、どうぞ先に学校へお向かい下さい』
「待たせてもらっていいか？」
『わかりませんか？　邪じゃ魔まだと言っているのです。通報しますよ』
　襟在は、頑かたくなにオレを拒絶する。昨日スピカが眠れなかった原因が、オレにあると思っているのかもしれない。となると正攻法は難しい。かくなる上は……。
『先に警告させていただきますが。くれぐれもこっそり侵入しよう、などと思わないことです。侵入者に人権はない――これがテロリストも跨またいで通る我が葛西かさい野の家の防衛スローガンです。ちなみに屋敷に仕掛けられた罠わなは、全て私の手製でございます。捕らえたり、追い返すためのものではありません。目的は唯一つオンリーワン。見敵必殺サーチ・アンド・デスチロイ、繰り返します、見敵必殺サーチ・アンド・デスチロイです。どうかご覚悟下さい』
　――読まれていた。襟きん在ざいは、どうも尋じん常じょうの執しっ事じではない。必殺技の一つや二つは持っているだろうし、四本腕のサムライ野郎とだってタメを張れるかもしれない。朽ち果てし神の戦器エメス・トラブラムの遣つかい手でも驚かない。その執事が守る屋敷だ。きっと吸血鬼に率ひきいられたズルして無敵モードな死人グールの一個中隊でも投入しないと突破は難しいだろう。
　オレはため息まじりに門から遠ざかり、離れた場所で待つことにする。
　十分経たち、三十分経ち、一時間が経った。既すでに学園祭は始まってしまっているだろう。
　それでも中からスピカが出てくる気配はないまま時間が進み、とうとう十一時を回ったところで、唐とう突とつに――巨大な警報が街中に鳴り渡った。
　これは……まさか……悪魔ゾディアックが来たのか？　よりによってこん

な日に？　オレの想像を裏づけるように、屋敷から彗ほうきに乗ったスピカが飛びだしていった。
『アリデッド？　状じょう況きょうは!?』
『今度の悪魔ゾディアックは海からおでましだ！　悪魔ゾディアック落下地点は汐しお鍋なべ港こうの西南！』
　突然、ズボンの中から声がした。スピカとアリデッドだ。驚くオレだが、音の源みなもとはスターリットだ。そうだ、ガーネットから借りてそのままになっていたんだった。
『寄り道せずに真っ直ぐ向かいな！』
『了りょう解かい！』
「スピカ！　おい、スピカ!!」
　スターリットに向けて呼びかけるオレ。だけど、この予備用というのは受信専用なのか、オレの使い方が悪いのか、向こうに通信が届いている様子がない。
　スピカの彗は、どんどん小さくなって、青い空に浮かぶ赤い光点と化してしまう。
『アタシは、逃げられない……』と、スターリットから小さな呟つぶやきが漏れた。
『悪魔ゾディアックと戦う正義の味方。天才魔女エトワールスピカ。それがアタシ。世界の礎いしずえ。伊い都と夏げの空に燦さん然ぜんと輝く魔女エトワール。逃げも隠れもしない。できない』
　まるで、自分に言い聞かせるような口調。だけど、それを本気で信じられるのなら……わざわざ、自分で口に出したりするものだろうか。
「……逃げたっていい、隠れたっていい……絶対、帰ってこいよ……絶対だぞ……」
　届くはずもない言葉をスターリットに告げて、オレは避難所へ急ぐ。
　突然の悪魔ゾディアックの空襲メテオライトに、市内は逃げ惑う人々でパニックに陥おちいる——かと思いきや、伊都夏市は平静を保たもっていた。急いでい

るのはオレくらい。二週間に一度のペースで悪魔ゾディアックが襲来するのだ。避難も手慣れたものなのだろう。

　やがて辿たどり着いた学校。「伊都夏大学園祭」と書かれた盛大なゲートが、オレを出迎える。避難してきた市民たちが、どんどん中に入っていく。

　ゲートをくぐれば、呼び込みの学生たちから、大量にチラシやら何やらを押しつけられる。キャンパスを埋め尽くすように設置された学生たちの模も擬ぎ店が、皆それぞれに、住民たちの関心を惹ひこうと声を張りあげる。

　そこにあるのは、ごくごく普通の、盛せい況きょうな学園祭の光景だった。

　まるで、悪魔ゾディアックとの戦いなんて起こっていないとでもいうように。

　どこか遠くからこだまする悪魔ゾディアックの咆ほう哮こうが、冗じょう談だんのように聞こえた。

「悪魔ゾディアックさまさまだね」「ねー！　人一杯来てくれたし。材料、足りるかなー」

　そんな無む邪じゃ気きな発言が耳を打つ。なるほど、たしかに、この街にとっては悪魔ゾディアックとの戦いは日常なのだ。悪意はないかもしれない。悪魔ゾディアックが来て、魔女エトワールがそれをやっつける。それは昼の十二時に鳩はと時計が鳴る程度の、いつものことなのかもしれない。だけど、スターリットからは、懸けん命めいに戦うスピカの荒い息づかいが聞こえてくる。今、戦っている魔女エトワールは紛まぎれもない人間だ。本当なら、ここで誰かと腕を組んで出店を冷やかしたり、あるいは企画を切り盛りしたりしていただろう少女たちなのだ。そんな彼女たちに戦いを押しつけて……ここにいる誰もが、戦いを忘れているように見えた。

　いや——キャンパスの一角に、一か所だけ、戦いに注目している連中がいた。

　ブックメーカー方式のギャンブルらしい。もともとは学園祭のミス

コンを予想していたようだが……悪魔ゾディアックの空襲メテオライトを受けて、戦闘結果を予想するものに代わっていた。バカでかい看板に躍る被ひ撃げき墜ついゼロ、スピカ撃墜、ガーネット撃墜、魔女エトワール全滅、なんて文字。それぞれにオッズがデカデカと表示されている――一番人気はスピカ撃墜のようだ。
「色ぐるいで練習不足が囁ささやかれるスピカ、不調が予想されます。しかし皆様、お忘れではないでしょうか。彼女たちは、そもそも魔女エトワール。魔女エトワールにとって姦かん淫いんと悪あく徳とくはむしろ力の源みなもと。とすれば、魔女エトワールスピカの不純異性交友に耽ふける日々は、むしろ、彼女に新たな力を与えたのではないでしょうか――？　とすれば、むしろ不安要素は男嫌いのガーネットに!?」
　声を張りあげるブックメーカー役の見知らぬ男子生徒。グッと拳こぶしを握りしめる。オレに、スピカたちみたいな力があれば、今すぐこいつらを全員、吹っ飛ばしていただろう。
　これ以上この場に留とどまっていれば、見み境さかいなく連中に殴りかかってしまいそうで、オレは、キャンパスから逃げだした。体育館の裏を抜け、体育館を通りすぎ、裏門へ――。
　ガーネットから預かったスターリットで、天象儀カール・ツアイスに続く扉とびらを開き、Ｅｓ層を突破する。悲鳴をあげる肺を叱しっ咤たしながら、全力で山道を駆け登り、司令室の扉を開けた途と端たん――。
　視界に入ったのは、中央の球体に映し出された巨大な水柱だった。
　海へと落下した悪魔ゾディアックの体から流れ出るマグマが、海面に着水して爆はぜ、濛もう々もうたる水すい蒸じょう気きが立ちこめている。視界はほとんど利きかない。
『スピカちゃん！　聞こえてる？　しゃっきりして！』
『……大丈夫、聞こえてる。わかってる』
『スピカちゃん！　聞いて！　今までどおりの作戦じゃダメだって――』
　そして……スピカとガーネットの連れん携けいは、お世せ辞じにも良好とはいえない状態だった。

『新しい弾、限りがあるでしょ？　できるだけ、アタシが引きつけるから！』

『危険よ！　スピカちゃん！　スピカちゃん――？　聞こえない!?』

　ブッと何かが途絶(とだ)えるような音。

「あのバカ野郎！　通信も勝手に切りやがったな！　この作戦は、二人一緒じゃなきゃ意味ねぇって――何ィ!?」

　苛立(いらだ)たしげなアリデッドの叫びが、しかし、唐突(とうとつ)に途切れた。

「……ぁあん？　一匹二匹じゃない？　次々に、落ちてきやがるだと？　……五匹!?」

　横で聞いていたオレも戦慄(せんりつ)する。五匹？　一匹でもこんなに手こずっているのに？

「いいか、ガーネット。新たな悪魔(ゾディアック)を五体観測した。優先順位は追って指示する！　連携されたらあとがねぇ。各個撃破だ。まずは、できるだけ早く、そいつを片づけろ！」

　切迫(せっぱく)した口調で指示を出すアリデッド。

　ものぐさな彼女を見慣れたオレには、まるで別人だ。

『わ――わかり、ました。何とかやってみます』

　ガーネットは絶句し、それでも気丈(きじょう)に答える。だけど、動揺しているのは明らかだ。

「こりゃ……打つ手、ナシ……だな……」

　アリデッドが、虚脱(きょだつ)したように呟(つぶや)く。

　司令室に、押し潰(つぶ)されそうな重い空気が立ちこめた。

「まだだろ！　諦(あきら)めんなよ！　やれるって！　諦めんなよ！　熱くなれよ！」

　見ていられない。オレは縋(すが)るように、アリデッドに詰め寄った。

「大丈夫！　スピカたち、今までうまくやってきただろ。だから、信じろよ！　あいつらならきっと――って痛(いて)て！」言葉の途中で、アリデッドに耳をつままれた。

「ふっざけんなよおおおおおおおおおッッ!!」

そのまま、オレの右耳に向け、思いきり叫ぶ。
「てめぇッ、こんなところに今いま更さらノコノコ来やがって！　一体何のつもりだああッ！」
「何のつもりって――オレにも何か、できることがあるんじゃないかって……」
「今更テメーに何ができんだよおッ!!　言ってみろ？　ホラ、いいから言ってみろ？　応援か？　それも無理！　スピカはスターリットの回線切った！　こっちからの通信はとらねぇし――とれるような状況でもねぇ!!」
巨大モニタの向こう。戦場に湧わき上がる蒸じょう気きは、既すでに海岸線まで達していた。
砂浜に浮き上がる、巨大な足跡。それが――六匹分。
その六匹の悪魔ゾディアックが一いっ斉せいに放つ黒球が空を埋め尽くす。その弾幕の密度は尋じん常じょうのものではない。狂乱の域ルナティックである。あれでは回避に精一杯で、とても通信どころではないだろう。
水みず際ぎわで防衛戦を展開する戦車隊もまた、見えない足跡に蹂じゅう躙りんされていく。全てが炎に包まれる寸前――制服を着た少女が映ったように見えた……。
「くそ！　無駄にがんばりやがって！」と、アリデッドが吐き捨てる。
それでも、二人の魔女エトワールは、戦い続ける。後退しながら、懸命に空を舞う。
ジリジリと天象儀カール・ツアイスに向かう悪魔ゾディアックたち。伊い都と夏げ市街地は目の前だ。
『我らに罪を犯す者を我らが許す如ごとく、我らの罪をも許したまえ、我らを試こころみに遭わせず悪より救いだしたまえっきゃあっっ！』
祈りの聖せい句くを唱となえながら、懸命に射撃を繰り広げていたガーネットの悲鳴が響き、ひどいノイズの後、それきりスターリットが沈黙した。
「おいガーネット！　くそッ！　――スターリットがイカレやがっ

た！」
　アリデッドは、怒（いか）りに任せてスターリットを投げ捨てる。
「オイコラ、てめぇオザキっ！　本気でブッ殺すぞ！　自分がやったことに自覚あるか？　テメーなんて、いなきゃよかったんだ！　なんで天蓋（グレンツエン）を抜けてきたんだよ！」
「は？　なんでだよ！　意味わかんねぇ！　逆ギレか？　オレのせいなのか？」
「そうに決まってんだろ！　スピカをフォローしきれてねぇからこうなったんだぞ！　テメーのせいで、あいつらがまともに機能しねぇんだ！　テメーがもーちっとしっかりしてれば、今度の戦いだってもちっとマシになった——」
　モニタから、一（ひと）際（きわ）大きな爆音。黒球に削りとられた街。二つの彗（ほうき）の輝きが消えていた。
「な……嘘（うそ）、だろ……？　おい、スピカ？　ガーネット？　返事しろよ、オイ！」
　巨大モニタに、魔女（エトワール）の輝きは甦（よみがえ）らない。アリデッドの表情にも、怒りの色はなかった。
「——終わり、だ」という言葉とともに、大地が揺れる。
　モニタに映る破壊の跡は、もう既（すで）に天象儀（カール・ツアイス）の目前。黒球が投げつけられた。二度の衝突で、Ｅｓ層は破られる。響く足音が、天象儀（カール・ツアイス）を揺らす。
　目には見えない何かが、しかしたしかに、頭上に乗り上げる。
　さらに一際、大きな叫びが響き、まるで吐（と）瀉（しゃ）物（ぶつ）のように、真っ赤なマグマが流れ落ち——。
　黒い瞳が、深（しん）淵（えん）を覗（のぞ）いた。

　世界が、瞬（またた）いて、消えた。

　気がつくと、また天国——というか、あの世の入り口であった。
　ここ数日、死ぬ機会なんてなかったので、久しぶりな感じがする。

オレはまた、ここに来てしまったのだ。さっさと生き返らねば。
　緊張感は皆かい無む。もう、これだけ来てるとさすがに慣れた。あれ、てか……もしかして、また、最初からやり直しなのか？　空から落ちるところから？
「その心配はないでち」と、テレビに映った幼女（神様）がオレの質問に答えてくれた。
「うんこマンが甦よみがえるのは、一番最近意識をとり戻した時点でち」
　意識をとり戻した時点というと……今日の朝か。
「大たい抵ていは起きた時でちね。つまり一度意識を失うとその前には戻れないので注意でち。
　ついでにそれから先も注意でち。甦った時点で、前世の記憶は夢として処理されるんでちが、未来に選択の余地がない場合、過去の記憶は、夢として無意識的に破は棄きされてしまうでち。選択を迷うような岐き路ろがなければ、前世の記憶は甦らないんでち」
　……よくわからんが、つまり選せん択たく肢しなし、打開策なしの状じょう況きょうで気絶でもしたら、その瞬間にバッドエンド確定、ということなのだろう。ギードの洞どう窟くつに飛ひ空くう艇ていを降ろしてからセーブしたら詰っみというヤツだ。気をつけよう。
　そんなわけで、幼女（神様）に扉とびらを出してもらい、走りだすオレ。例によって後ろから闇が襲いかかる。よっしゃ、せっかくだから（いつもどおり）赤の扉を選ぶぜ。
「もっと真剣に走るでち！　余計なことを考えると、扉が遠くなるでちよ！」
　初耳だった。両手足を動かして、ただ真っ直ぐ扉だけを見ても、生き返る生き返る生き返る生き返る！　呪じゅ文もんのように強く念じながらも走る。
「初心に帰って強く願うんでち。何のために生き返るんでちか？　何をするんでちか？」
　訊たずねられて——オレの脚がわずかに鈍にぶった。
　何のため？　……オレには何ができる？　前回のように、沖おきと協

力して煙(えん)幕(まく)作戦？　だが、悪魔(ゾディアック)は物量で攻めてくる。オレが何か指示した程度で、変わる戦況じゃない。生き返って何ができる？　生き返って、スピカが墜(お)とされて、また生き返って、またスピカが墜とされて……その繰り返しで……それで何も変わらなかったら？　彼女に、百回、二百回と、ただ戦闘の苦痛と敗北の絶望と死の恐怖をもたらすだけだとしたら？

　オレの生き返る理由はなんだ？　オレが生き返ることが本当に彼女のためになるのか？

　追い縋(すが)る闇が、踵(かかと)の裏まで迫る。まだ扉は遠い。なのに走る気力が萎(な)えかける。

　そんな時——。

「どっこい！」と何かが背中にぶつかった。背中を凄(すさ)まじい勢いで押されて走らされる。

「やめろやめろやめろやめろって！　いてててててて」と悲鳴をあげるオレ。

「キヨヒコが！　泣くまで！　頭(ず)突(つ)くのをやめないッ!!」

「って、その声は——ミラ!?」

　入院しているはずのミラが……なんでここに？

「キヨヒコは、最期の日、ミラと約束したでしょ！　スーちゃんを、助けてあげてって。

　途中で諦(あきら)めるなんて、男らしくないぞー！」

「でも……悪魔(ゾディアック)が来たら、何したって無駄だろ」

「どっこい！」と、さらに背中に頭(ず)突(つ)き。いい加減背骨がミシミシ言っている。

「いーかい、キヨヒコ！　よーく聞いて！　世界を救うのは魔女(エトワール)！　それはずーっと前から決まってるのさ！　他には誰も、悪魔(ゾディアック)を倒せない。そういうふうに、セカイはできてる。でもね！　スーちゃんを救えるのは、キヨヒコだけだよ。だから、キヨヒコがスーちゃんを救えなかったらセカイは絶対救われないのさ！　キヨヒコがスーちゃんを救うこと！　スーちゃんを笑顔にしてあげること！　全

てはそこから始まるのさ！」

　ああ——そうだな。ミラの言うとおりだ。

　悪魔ゾディアックをどうすれば倒せるかなんて——オレなんかが考えてもわかるわけがない。

　だから、今は、今だけは、そのことを忘れよう。それは……それは、本当に自分の役立たずっぷりに腹が立つけど……魔女エトワールやカルデアの仕事だ。

　オレは無力だ。てんで役に立たない。だから、無力な一般人であるところのオレは、スピカのことだけ考えよう。それも天才魔女エトワールのスピカじゃなくて、オレの彼女であるスピカ、オレを愛してくれるスピカのことをだ。

　スターリットごしに聞こえた彼女の呟つぶやきを思いだせ。

　——アタシ、逃げられない……。

　なんだか、泣きそうな声じゃなかったか？　彼女、泣いてたんじゃないのか？

　なら、おまえは、生き返らなきゃいけない。



　彼女の涙をぬぐうため、彼女を泣かせないため、そのために、オレはいるのだ。
「オレは、スピカを泣かせない！　あいつを笑顔にしてやりたい！」
　ぐんっと、身体がまるで扉とびらに引き寄せられるように加速する。影のように引っついていた闇が、ぐいぐい離れていく。ミラの助力も、もう必要ない。オレはもう一人でも走れる。
　一気に、扉が迫る。オレの身体は加速する。
　自分の意識すら置いていかれそうな速度で――、
　ふいに背中からミラの頭の感触が消えた。振り返ろうとするオレを叱しっ咤たする声。
「こっち向いちゃダメッ！　見送りはここまでだよ！」
　オレの身体が、扉を越えた。振り返ると、ミラは迫る闇に、消えていた。
　最後の言葉だけが耳に残った。
　――バイバイ、キヨヒコ。

　学園祭の当日だった。
　さっき会ったミラは何者だったのだろう。
　どうして入院しているはずのミラが、天国の入り口に現れたのか……不ふ吉きっな想像が浮かぶが、それを振り払う。考えるのは、あとだ。悪魔ゾディアックの空襲メテオライトまで時間がない。
「……やってやるさ。約束、したもんな」
　問題は、オレが、スピカに会えないということ。生身の身体で襟きん在ざいのトラップを乗りきる自信はない。かといって、屋敷の前で待っていれば、悪魔ゾディアックが来るまでスピカは目を覚まさない。ガーネットから預かったスターリットは受信専用。そして、このままでは、また悪魔ゾディアックがやってきて死亡、という無限ループ。なんとか、可か及きゅう的てき速すみやかに、スピカと連絡を……と思案に暮れていると。
「ガッデーム!!　パーティーに遅れちまうぜッ！　速ソッ攻コー届けっぞニシンのパイ!!」

アリデッドの叫びが、玄関のオレのところまで響いてきた。あ――会うのは難しくても、アリデッドのスターリットを借りれば連絡くらいできるかもしれん。
「あ、アリデ――うおおおおおおおお！」
と、声をかけようとした途と端たん、オレは寝ぼけ眼まなこのアリデッドに足払いをかけられ、洗せん濯たく籠かごにぶち込まれた。
「ちょ、待て！　待てってば！」
何が起きているのか――と考えて、前世の記憶を思いだす。リビングのテーブルの上にあったＤＶＤ。どうやら寝ぼけて今度はその映画の主人公になったつもりらしい。
「おーおー。なかなか活きの良いニシンだぜ！」
誰がニシンだ！　ってオレの抵抗をものともせずアリデッドは彗ほうきに籠ごとオレを吊つるす。
「ＧＯ！」と発進。空に黒い軌き跡せきを描き、オレは瞬またたく間まに大空へ。
ここまで来てしまうと、下へ手たに身動きがとれない。っつか、アリデッドって、空飛べたのか？　振り返ってみれば、家には彗ほうきもあったし、カルデアの司令やってるし、薄々そんな予感はしてたんだけど……。
「やっべー！　コイツは嵐あらしのヨカンがするぜ！　そして届け先はどこだ！　ん？　あのでっかい屋敷に違いねぇ。そうだそうだ！　そうしよう！」
「わ、バカ、やめろ！　本気で、落ちる――」
寝ぼけたアリデッドは、どうやら一ひと際きわ目立つスピカの屋敷に進路をとる。
――あれ――これはチャンスじゃ？　彗で直接スピカの屋敷に乗り込めれば……。
そんなオレの期待どおり屋敷の直上で停止するアリデッド。そして――。
「あっはっは腐くさってやがる！　ニシンのパイがゴミのようだ!!　な

ぎ払えー!!」
　オレをそこで放りだした。ていうか、それ違う映画だって！　ハヤオが怒るって。
　迫るスピカの家の広大な屋根。「バルス！　バルス！　バルス!!」と、また叫んでみるが何も起こらない。そりゃそうだ。オレを助けに来てくれる魔女(エトワール)は就寝中。視界一杯に広がる屋根。飛べないオザキはただのオザキ。みるみるうちに激突。「バル——痛(いて)てぇ!!」目の前に火花。そのまま、屋根をごろごろと転がり、また落ちて、そして——。
「……オザキ——あんた、何やってんの……？」
　どうやら、オレは屋根を転がってベランダに落ちたらしい。戸を開けて呆(あき)れた顔でオレを見下ろしているのは、制服姿のスピカだった。
　彼女の部屋に入れてもらうオレ。意外と女の子っぽい部屋だった。
「一体何があったのよ。ていうか、どっから来たわけ？」
「アリデッドに、ニシンのパイと間違えられた。んで……上から配達された……」
「滅(ほろ)びの呪(じゅ)文(もん)、叫んで？　プッ。やっぱりアレ、聞き間違えじゃなかったんだ」
　スピカの失笑。またも聞かれてしまった。心底恥ずかしい。
「しかもアリデットに配達？　ホントに魔女の宅急便ってワケ？　アタシはお婆(ばあ)ちゃんの愛情もわからない薄(はく)情(じょう)者(もの)ってこと？」
「薄情者かどうかは知らないが、マジでそれ」
「あは、あはははははは！　で、アンタはニシンのパイ？　アタシ、これ嫌いなのよねー！」
　スピカがオレを指さして笑う。
「うっせ！」オレもつられて笑ってしまう。随(ずい)分(ぶん)久しぶりに、二人で笑った気がした。
「……はぁ、もう信じらんない。最初に会った時も、言ってたわよね。好きなの？」

「うーん、まあ、好きかもしれん。男ってのは一度はムスカに憧あこがれるもんさ」

「わけわかんない。パズーになってよ、どうせなら」

「目玉焼きの乗ったトーストでも作ればいいのか？」

「アンタってさ……本当に、こっちの都つ合ごう考えないヤツよね」

「いきなりなんだよ」

「昨日、あんなことがあったでしょう。だから……心配して迎えに来てくれるかな、とは思ってた。でも、ちょっとまだ、いろいろ整理ついてなかったから……会いたくなかったの……爺じいやに追い返してもらうよう頼んでおいたの……」

　そういえば、制服姿のスピカはその気になれば、今すぐにでも登校できそうだ。とても、寝起きのようには思えない。てことは、前世の時も実は起きていたのか……。

「でもね、こんな強引な手を使ってこられたら……拒こばめないね……」

「……来ない方が、よかったか？　……会いたくなかったか？」

「ううん。そんなことない。本当は来てほしかったし、会いたかった。ダメだね。ごめんなさい、とか、さよなら、とか、口先だけでいくら言っても、オザキは、絶対、諦あきらめないんだね。海かい賊ぞくの仲間になってでも、戻ってきてくれるんだね」

「……そりゃ、オレはおまえの……恋人だからな」

　まあ——実は結構、諦めかけてるけどな、前世とか天国で。しかし、そうすると挫くじけかけたオレを一いっ喝かつしてくれたミラの配役はドーラか。

「……あのね、オザキ。信じてくれないかもしれないけど——聞いてくれる？　あんたが初めて墜おちてきた日の前の夜ね。アタシ、ある映画を観てたのよ……そしたら次の日、あなたが落ちてきたの。滅ほろびの呪じゅ文もん唱となえながら……」

　オレは思わず吹きだす。そりゃ——いくらなんでも……。

「って、いや、ないない。そりゃできすぎ！」

「アタシもそう思ってる！　あんまりできすぎでしょ？　だから……この人はアタシを騙(だま)しに来た悪魔(ゾディアック)か、じゃなかったら――運命のひとかも、って、あの映画みたいに、アタシを、このセカイから救ってくれるひとかもって、ちょっとだけ、思ったの」

　ドクン、とオレの心臓が鳴る。オレは、オレがただの一般人だと知った時のアリデッドの落(らく)胆(たん)を思い出す。やっぱり、スピカも期待したんだろうか……。

「ごめんな……。その世界を救うスーパーヒーローとかじゃなくて……」

「そんなことないよ……あの映画だって、そうでしょう？　石とか持ってなくても、スーパーヒーローじゃなくても、オザキはアタシを助けてくれてるよ。アタシの運命の人だよ」

　オレは衝動的にスピカを抱きしめ、唇を奪う。

　強く、深く、唇を重ね、身を寄せ合う。スピカの身体の火(ほ)照(て)りがわかる。互いの心臓の鼓(こ)動(どう)まで、わかってしまう。

「っぷは」と、長い口づけを終えて、スピカが息をつく。

「……ね……オザキは前、言ったよね。恋っていうのは、傷ついても、どんな手を使っても、なんとかしたいって思うことじゃないかって？　本当にそう思う？」

「ああ。オレはどんな手を使っても、おまえの恋人でいる。おまえを幸せにする。

　もう十分におまえは苦しんだ。今度は、おまえが幸せになる番だ。どんだけ傷ついても、どんな手使っても、絶対、幸せになれ。いや、幸せになろう、一緒に」

　オレたちは、そのまま、ベッドに倒れ込む。

　スピカは、恋をしたこともなければ、キスどころかデートさえしたことなくて。

　だから、当然、こういうことも初めてで、その端(たん)整(せい)な顔に不安の色を浮かべている。

「ゴメン……やめるか……？」

「ゴメンとか言わないで！　どうせなら、好きって言って」

　スピカの瞳から、涙がこぼれる。

「ね、言ってよ。言えない？　ここまでやっといて、アタシが嫌い？」

「好きだ。宇宙規模で好きだ。世界の何よりも好きだ」

「じゃあ、世界全部を敵に回しても？」

「当たり前だ」

「――たとえ、記憶を失くしても好きでいてくれる？」

「おまえのことは、絶対、絶対、忘れない。オレは、おまえが、好きだ」

「……アリガト。アタシも、オザキが、好き。だから、ね。入ってきていいよ。遠慮しないで。アタシの中で、いっぱい、いっぱい、感じてよ」

　オレは頷うなずく。大きく息を吸い――緊張に震える彼女の中に――突き立てた。オレたちは身体を重ね合わせて……。

「……その……辛つらかったか？」

　荒い呼吸を整えてオレは聞く。

「すごく、痛かった。気持ちいいとか、そういう問題じゃ、なかった。でもね、身体の中に、オザキが一杯で、幸せだった。ホントにアタシ、がんばったんだから。だから、ね……ご褒ほう美び、くれる？」

　一つになるなんてただの比ひ喩ゆだ。結局オレはオレで彼女は彼女だ。オレには、彼女がどれだけ痛くて、どうやってそれに耐えたかなんて、全くわからない。何もあげられるものはない。できるのは、彼女の涙をぬぐうことだけ。頬に垂たれた涙の雫しずくを、唇でぬぐう……。

　彼女は、シャワーを浴びてくると言って、起き上がり、オレは一人、ベッドの上で横になっていた。妙に時間が経たつのが遅く感じられた。すっかり忘れていたが悪魔ゾディアックがそろそろ来てもおかしくない

んじゃなかろうか。手元の時計を睨(にら)む。針は十二時を指していた。

——なんで？

たしか前世で悪魔(ゾディアック)がやってきたのは、十一時だったはず。もう、とっくに空襲(メテオライト)があるはずだ。オレが知る最初の空襲(メテオライト)では、悪魔は三回とも同じような時間に同じ場所からやってきた。なのに、なんで今回はまだ来ていない？　オレの行動が悪魔(ゾディアック)に影響を与えたってことか？　一体どうやって？　宇宙の彼方(かなた)から悪魔(ゾディアック)がオレたちのことを監視していて、お楽しみを邪(じゃ)魔(ま)しちゃいけない、とか思ってくれてる……？　んなワケあるか……。

「おーい、オザキー。いつの間に寝てんのよ」

なんて悩んでいる間に、すっかり眠ってしまっていたようだ。

「みんな、学園祭やってるのよ。サボってぐーすか寝てるなんて。罪(ざい)悪(あく)感とかないの？」

「……あ、ああ……って、いや、それは、おまえもだろ」

「アタシにはあるわよ……だから、ガーネットに謝りに行くの」

スピカはオレが寝てる間に制服姿になっていた。

「そうか……仲直りは……できそうか？」

「わからない。でもね。アタシ、オザキに勇気を貰(もら)ったから。逃げないよ」

「ＯＫ。それじゃ——」

行こうぜ、と声をかけようとしたところで、部屋の曇(くも)り一つない窓ガラスが震えた。

街を包む警報の響き。ようやくと言うべきか、ついにと言うべきか、悪魔(ゾディアック)が現れたのだ。

「やれやれ、また、か。こんな日に襲ってこなくてもね」

めんどくさいけど、片づけてくるか、なんて。

それは、オレの気のせいかもしれないけど、今のスピカなら、たとえ悪魔(ゾディアック)が何十体現れたって、軽くやっつけてしまえそうに思えた。

「待ってるから。絶対、帰ってこいよ」

「誰に言ってるの？　アタシはね、天才魔女エトワールスピカ様だってば。当然、勝って、帰ってくるから。そん時は、ご褒ほう美びの準備、ヨロシク！」
「了りょう解かい！」と答えて、オレはスピカを笑顔で送りだす。

『悪魔ゾディアックの着水確認！』
　視界に入ったのは、前世と同じ光景。巨大モニタに映った水柱だった。だが——。
『スピカちゃん、行きましょ』
『ＯＫ！　ガーネット、援護ヨロシク！　特訓の成果、期待してるわよ』
『任せて！　それじゃあ——』
　スピカとガーネットの声が、歌のように響き合う。
『ＳＴＡＲ ＭＩＮＥ ＧＩＲＬ！』——赤の光が唄う。
『ＡＥＲＩＡＬ——』——青の光が唄う。
『ＳＨＯＯＴ!!』——二つの光が重なる。
　前世からは予想もつかない息の合ったコンビネイション。
　水みず飛沫しぶきの中に飛び込む赤と青の光。複雑に絡み合い交差する。モニタに、一ひと際きわ大きな花火が舞った。不可視の巨体が海に倒れ、水すい蒸じょう気き爆発が起こる。追って、海岸を襲う津つ波なみ。
「いよっしゃあ！　よくやった！」
「な——何が起こったんだ？」
「スピカが悪魔ゾディアックを仕留めやがったんだよ!!」
　え——？　たった一発でやっつけたっていうのか？　たしかに、スピカはガーネットとのコンビネイションを復活させていた。だけど、それだけで、こうも威力が変わるのか？
　オレが驚いている間にも、刻一刻と状じょう況きょうは推移していく。新たな悪魔ゾディアックの出現だ。
「オイ、ガーネット！　聞こえるか？　新手だ！　速ソッ攻コーで蹴け散ちらしちまえ！」

『はいっ！　聞こえます！　新たな悪魔(ゾディアック)ですね！』
『了解――ガーネット、行くわよ！』
『はい。ディフェンスは任せてください！』
　さすがに数が数、上陸を食い止めることはできなかった。それでも、前世とは違い魔女(エトワール)が優勢に戦いを進めているのが、雰(ふん)囲(い)気(き)だけでも十分わかった。
　一匹、また一匹と確実に悪魔(ゾディアック)を仕留めていく。
「……スピカめ。いいリネア出しやがって。おい、あいつの力は、てめーのおかげか？」
「へ――？」と、唐(とう)突(とつ)に話を振られてマヌケな声を出すオレ。
「隠すなよ。じゃなきゃ説明がつかねー。エロの力は偉大だなあ、オザキくん！　ナイスリネア供(きょう)給(きゅう)！　スピカをテメーに任せてよかった!!　コイツはアタシの慧(けい)眼(がん)だねぇ！」
　前世とは全く正反対のことを言いながら、オレの背中をバンバンと叩くアリデッド。マズったらオレのせい、うまくいったら自分のおかげってだいぶんひでーな、と思うが問題はそこじゃない。スピカの力がオレのおかげって――魔力供給Ｈ？
　……つまり最終決戦間近に、強敵を倒すには、彼女とセックスしてパワーアップする必要が――ってやつ？　オレは知らずにそれをやっていたと？
「いよッ！　このエロザル！　救世主！」
　そんなんでどうにかなっちゃっていいのかなあ……。いやいや。
「ちげーよ。これはスピカがガーネットと仲直りできたからだ。きっと今のあいつらなら魔力なんて増えなくたって、なんとかした。オレはスピカを信じた。その結果だ」
「言うじゃねぇか……。まあいい。この分だとミラなしでもなんとか――」
『アリデッド先生！　あれ！　悪魔(ゾディアック)が、蛹(さなぎ)に――』
「っ！　なんだとぉ！　クソッ!!　ここまで来てそりゃ、ねーだろ!!」
「蛹――？」と、視線を戻せば、オレの疑問に応えるよう、モニタに

映る外の映像。
　七(たな)夕(ばた)通(どお)りに、黒い蛹が映っていた。——でかい。モスラ繭(まゆ)もかくやという大きさだ。
「蛹体(ピューパ)っつってな。あの形態だけは人間にも見える。羽(う)化(か)して成体(イマーゴ)になるための姿だ」
「成体(イマーゴ)——？　まだデカくなるのか？　じゃ、なんで攻撃しないんだよ、今のうちに‼」
「あの状態じゃ、どんな攻撃も効かねーんだよ。羽(う)化(か)してからが、勝負だ」
「……でも……今のあいつらなら、勝てるだろ？　……な、なんだよ、俯(うつむ)くなよ」
「羽化した悪魔(ゾディアック)——成体(イマーゴ)は強い。今まで墜(お)ちた魔女(エトワール)も、半分以上が成体(イマーゴ)にやられた。力だけじゃ勝てねーんだ。……犠(ぎ)牲(せい)がないと、倒せねーんだよ……」
　そう言ったきり、アリデッドは、口をつぐむ。司令部も、街も、時が止まったように、不気味な静(せい)寂(じゃく)に支配されている。あの蛹(さなぎ)が開く時、世界が終わると言わんばかりに。
『ガーネット……』『……スピカちゃん……』
　その静寂を、重なった二人の声が破る。
『スピカちゃんから、話して。きっとそれが私の聞きたいことだから』
『アタシ——言わなきゃならないことがあるの。アタシね。好きな人ができたの。
　その人が、好きで、ホントに、好きで、世界中を敵に回したって、一番大切な友達とちょっと気まずくなっても、それでも、アタシはその人のことが好きなの』
　戦闘中にしては場違いな話題。だけどスピカの言葉も、耳を傾けるガーネットも、どこまでも真剣だった。その雰囲気を察してか、アリデッドも無言。無言のまま、ヒジでオレの脇腹をつつく。まあ……正直、照れくさくは、ある。

　が、赤面するオレのことなんか全く気にせず、スピカは続ける。
『あのね、だから、アタシ、こんなこと、頼める義理じゃないのはわかってるんだけど、アタシのワガママなんだけど。だけど、どんな辛つらい思いをしても生き残る。大好きな人と、大好きな人のセカイを、守る――そのために、力を、貸してくれる？』
『私、昨日、言ったよね』と、ガーネットが応じた。
『私、いつも、スピカちゃんの一番側そばにいるって。だから、どんな答えを選んでも、絶対に味方。大丈夫。勝てる。大好きな人を、守れるよ』
『……ありがとう』
　――スピカとガーネットは、今、この瞬間、真に和解を果たしたのだ。
　それはわかる。……だけど、じゃあ、二人の関係は一体、どうしておかしくなったのか。
『メソメソしないで！　そろそろ、悪魔ゾディアックが来るわ！』
　ガーネットの警告が、魔女エトワール二人だけの世界に終わりを告げた。
　オレの疑問も、頭のどこかに置き去りにされてしまう。
　蛹が開く。鼓膜を破壊せんばかりの咆ほう哮こうが轟とどろいた。辛かろうじて無事だった高層ビルのガラスが一いっ斉せいに割れ、破片が雪のように舞い落ちる。
　一瞬遅れて司令室中央の球体がフラッシュを焚たいたみたいな光を放ち……。
　最初から存在していなかったかのように消えてしまった。
「ちぃ！　イカレやがった！」
　アリデッドが吐き捨てて、司令室を出て行く。オレも慌あわてて、あとを追う。
　彼女の背中を追いかけて、天象儀カール・ツァイスの屋上に上がる。
　その光景に、絶句する。見慣れた街とは、とても思えなかった。
　伊い都と夏げ市の外れに、煮えたぎるマグマを中心とした巨大なクレーターが出現していた。

風に、焦(こ)げ臭(くさ)い匂いが混じっている――まるで地獄に迷い込んだみたいだ。

――羽(う)化(か)した悪魔(ゾディアック)は――、自分の姿だけじゃない、セカイまで変えてしまった。

その姿は見えない。だというのに、今のオレは、たしかに、そこに在(あ)る何かに圧倒されていた。膝(ひざ)が震える――大丈夫、勝てる、勝てるよな、とオレは自分に言い聞かせる。

人の心臓を、いや、魂(たましい)をわしづかみにするような咆(ほう)哮(こう)が轟(とどろ)き――。

成体(イマーゴ)の攻撃が始まった。

それが射(しゃ)出(しゅつ)する黒球は、以前、悪魔(ゾディアック)が六体がかりで発射していた数より、なお多い。まるで、空がイナゴの大群にでも覆(おお)われたかのよう。その密度が濃すぎて、空が青く見えない。黒が七分に空が三分――今は、空にいる魔女(エトワール)を狙(ねら)っているが、こんなものが、地上に向けられた日には、伊都夏市なんて三十秒で全てが灰になるんじゃないか。きっと、オレたちなんて意識する間もなくかき消されるに違いない。

想像を絶する成体(イマーゴ)の力に、オレは圧倒されかける。

『オザキくん――いますか？　聞こえてますか』

そんな時、ガーネットがオレを呼んだ。慌(あわ)てて、応答しようとして、オレの持っているヤツが受信しかできないことに気づく。とっさに、アリデッドのを奪いとって、応じる。



「いる、どうした!!」

『……一つだけ、お願いがあるんです』

　それを懸(けん)命(めい)にかいくぐりながらの通信だ。こうしてしゃべっている間にもガーネットが墜(お)とされてしまいそうで、オレは勢い込んでスターリットに叫ぶ。

「どうした!!　オレにできることなら何でもする!!」

『あの……名前を……本当の名前を……ミサキって呼んでくれませんか？』

　かつてアリデッドが教えてくれた。魔女(エトワール)は元の名前を捨てると。

　ミサキは、きっと、ガーネットの本名なんだろう。

　でも、なんで、唐(とう)突(とつ)にそんなことを？　なんて疑問、口にする余(よ)裕(ゆう)もなかった。

『そしたら、アタシも……スピカちゃんみたいに戦えますから』

　熾(し)烈(れつ)な攻撃に翻(ほん)弄(ろう)される二人の魔女(エトワール)の姿を見ているだけで、そんなことを考える余裕は失われていた。だから、もう、オレはほとんど反射的に、言われたとおりに叫ぶ。

「ミサキ、がんばれ……、がんばれ、ミサキ！」

　そして。その言葉を噛(か)みしめるような沈(ちん)黙(もく)があり……。

『ありがとうございます。スピカちゃんを、よろしくお願いします。

　じゃあ、またすぐあとで、お兄ちゃん……』

　ブツリと、ガーネットの通信が切れた。

　お兄ちゃん……って？　なんだ？　と、呆(あっ)気(け)にとられたオレの横で、

「……覚悟、決めやがったな……」

　アリデッドが、そう呟(つぶや)いた。

　ますます密度を増していく成体(イマーゴ)の弾幕。それはもはや、黒い雲や煙のようだ。

　たまらずスピカが退(ひ)く。だが、ガーネットは退かない。それどころか前進していく。

なぜ？　彼女のスタイルは後方に陣どっての狙(そ)撃(げき)。前に出るタイプじゃない。
なのに、彼女は、あの軽快なスピカでさえ逃げだす、嵐(あらし)のような弾幕の前に身をさらす。
「ガーネット！　何やってんだ、逃げろ!!」
届くわけがないと知っていて、それでもオレは叫ぶ。
彼女へと雲(うん)霞(か)のごとき黒い弾丸が襲いかかり——あっさり呑(の)み込んだ。
思わず目を逸(そ)らすオレ。
だが——ガーネットは墜ちてはいなかった。
悪魔(ゾディアック)の弾幕に埋め尽くされた空から、一筋の光条が煌(きら)めく。
成体(イマーゴ)を狙(ねら)うガーネットの狙撃だ。
青い光の動きは、けして軽(けい)妙(みよう)ではないし、その速度もたいして出ていない。
むしろ這(は)うような動きだ。だが、それでいて、ガーネットは、迫り来る有(う)象(ぞう)無(む)象(ぞう)の弾丸のことごとくを見切り、最小の機動で紙(かみ)一(ひと)重(え)でかわしていく。
少しずつ、ほんの少しずつ、成体(イマーゴ)との距離を詰めていく。
おかしい。あの弾の量は異常だ。当たらない方がおかしい。
なのに、ガーネットは墜(お)ちなかった。
成体(イマーゴ)が、戸(と)惑(まど)うような唸(うな)り声をあげ、先程に倍する黒球を投げつける。
それでもガーネットは墜ちない。それでもガーネットは退(ひ)かない。
じりじりと成体(イマーゴ)との距離を詰めていく。
彼女がまとう青の輝きは、ますますその強さを増していく。
たとえどれほどの弾を投げつけても、今の彼女ならかわしてみせるのではないか。
巨大な成体(イマーゴ)が、まるで、たった一人の少女に圧倒されているようだった。
悪魔(ゾディアック)が吼(ほ)える。だけど、それは、まるで萎(な)えかける戦意を叱

(しっ)咤(た)し、激(げき)励(れい)しようとする悪あがきのよう。そして、不意に、見えない巨体から放たれていた弾幕がやんだ。

　代わって、クレーターの中心、マグマがしたたる巨大な輪(りん)郭(かく)に、ぽっかりと黒い穴があいた。まるで、全てを呑(の)み込む虚(きょ)無(む)の渦(うず)、黒い太陽。

　それが、どんどんと大きさを増していく。

　どういうつもりだ？　あれだけ撃って当たらないのに、あんなのが当たるわけ――。

「ヤベェ！　まとめて吹っ飛ばすつもりだ！」

　なんて、オレの思考は、アリデッドの悲鳴にかき消される。あれは、大きな爆弾みたいなものか。弾丸はかわせても衝撃波までは――。

　ガーネットは、けれど、全く怯(ひる)まない。

　むしろ、この瞬間を待っていたといわんばかりに、成体(イマーゴ)に向けて、黒い太陽へ向けて一直線に加速した。何をするつもりだ？　まるで自分から当たりに行くようなもんだ。

『ダメ、戻って！　ガーネット――――――――ッ!!』

「そうだ！　大丈夫！　自信を持て！　行ける！　おまえならやれる！　ただ真(ま)っ直(す)ぐ進め！

　魔女(エトワール)はパワーだ！　魔女(エトワール)は死ぬ！　死ぬために魔女(エトワール)は存在する！　だが天象儀(カール・ツアイス)は永遠だ！　つまり、おまえたちも永遠だ！」

　そう。バカなオレは、スピカの悲鳴じみた制止と、アリデッドの熱病に浮かされたかのような鼓(こ)舞(ぶ)を聞くまで、彼女の意図が全然わかっていなかった。

　事実、ガーネットは（当たりに行く）つもりだったのだ。

　ガーネットの青い輝きが一(ひと)際(きわ)、凄(せい)烈(れつ)に冴え渡る。

　自(みずか)らの命を燃やし尽くすような蒼(あお)の炎。

　まるで、いつかのミラのよう。リネアの輝きを全身にまとい、流星となって突き進む。

ようやくオレも彼女の意図を察する。
「ガーネットッ!!　やめろ————————————————————————!!」
オレの叫びは、空に虚（むな）しく消える。
青い流星が、黒い太陽に突っ込んだ。
青と黒が一瞬だけ混ざり合い——。
黒い巨大な球体の内部から、龍の息吹（いぶき）のごとき青い光条が、飛びだし——。
次の瞬間、爆（は）ぜた。
漆（しっ）黒（こく）の閃（せん）光（こう）。あり得ない——けれどもそう呼ぶしかない光にして闇が、街を、オレの視界を、そして成体（イマーゴ）自身を呑（の）み込んでいく。
「くっ……くそ！」
異様な光にくらんだ目に、ようやく、視界が戻ってくれば——。
そこに一匹の龍がいた。
一本蒼（あお）い柱が、天蓋（グレンツエン）の空を貫（つらぬ）いて、垂（すい）直（ちょく）に突き立っていた。
闇の光を内側から食い破り——一匹の龍が天に還ろうとしていた。
物悲しげに響いた叫びは、龍の咆（ほう）哮（こう）か、それとも、成体（イマーゴ）の断末魔か。
やがて、蒼の光は、微（び）細（さい）な粒（りゅう）子（し）となって、空の青に溶け込んでいく。
あとには何も残らなかった。
成体（イマーゴ）も、流れ落ちるマグマも、空を覆（おお）う漆黒の球体。
そして——ガーネットも。
みな、蒼い光になって、どこかへ行ってしまった。
あとには、巨大なクレーターと、崩れた街があるだけだった。
力なく空を舞う、赤い光があるだけだった。
「な、なんで……」呟（つぶや）くオレの膝（ひざ）から力が抜けた。
「アタシたちの、勝ちだ……ガーネットだって、後悔しちゃ、いない

はずだ」

　オレの肩に手を置いて、アリデッドが言う。

　――じゃあ、またすぐあとで、お兄ちゃん……。

　ガーネットの声が、急に甦(よみがえ)る。

　なんだろう。わけがわからない。わけがわからないけど、取り返しのつかないことをしてしまったかもという焦(しょう)燥(そう)感(かん)が、オレの胸をざわざわとさせる。

　なんでだ？　なんで彼女は死んだんだ？　お兄ちゃんってなんだよ。ミサキって、オレが呼んだせいなのか？　だから、ガーネットは……ガーネットは、こんなことに……こんなこと、つまりなんだ。だから、ガーネットが……死んだ……のか？

「オザキ、スピカを迎えてやれ。アタシたちは勝ったんだ」

　なんでだよ。こんなの、勝利なわけがない。オレは認めない。

　……なら。認められないなら、やり直せば、いい。

『オザキ……聞こえる？　聞こえる……アタシ、勝ったよ。また、街を、守ったよ。でもね、アタシ、また――アタシね、また、友達を、なくしちゃった』

「いい！　おまえはよくやった！　だから言うな！　何も言うな！」

　嫌(いや)だ。オレは嫌だ。スピカのこんな声、一分一秒たりとも聞いていたくない。間違いだ。こんな結末、何かの間違いだ。だから終わらせよう、なかったことにしよう。

　屋上の柵(さく)に駆け寄る。

　オレの手から、スターリットが滑り落ち、屋上から、ころころ、ころころと天象儀(カール・ツァイス)の壁を、転がり落ちていく――。下はコンクリ。大丈夫だ。ここなら間違いなく死ねる。間違いなく、やり直せる。激痛の記憶が甦(よみがえ)り、強(こわ)張(ば)る身体を、深呼吸してなだめる。

　大丈夫。怖くない。怖いけど、この結果が現実になってしまう方がもっと怖い。

「オイコラ、何する気だ⁉」

　背中にアリデッドの怒声が浴びせられた。

「みんな、おまえのために戦ったんだろ⁉　おまえが死んで、どうするんだよ⁉」

　説明しても仕方がない。もう、この世界はなかったことになるんだから。

「一人だけ逃げだすつもりか？　ガーネットは消えた。悪魔ゾディアックと道連れになった。けど、それが運命だ。悪魔ゾディアックが羽う化かした時は、誰かが、犠ぎ牲せいにならなきゃ倒せない。これが、このセカイのルールなんだ！　アタシたちの限界なんだ！　現実なんだよ！　おまえもこのセカイに、堕おちてきたんだ。だったら、このセカイの現実を、見ろ‼　受け入れろ‼」

　まるで、自分に言い聞かせるみたいなガーネットの叫び。そんなわけあるか。そんな限界、そんな現実、オレは認めない。オレが変えてやる。

　意を決して屋上の柵を乗り越えようとするオレ。

　次の瞬間、首筋に重い衝撃を感じて——。

5

　気がつけば、そこは見慣れた天てん井じょう。アリデッドの家の客間、オレの部屋だった。
「よかった。目、覚めた……？　丸一日、寝てたのよ？」
　心配そうな顔で、覗のぞき込んできたのはスピカだ。左手にぬくもりを感じる。これは、スピカの手？　ずっと握っていてくれたのだろうか。
「痛いところ、ない？　錯さく乱らんしだしたから当て身入れたって……アリデッドが……」
　意識が、次第にハッキリとしてきた。なんとなく自分の置かれた状じょう況きょうがわかってきた。オレは自殺に失敗したのだ。アリデッドに気絶させられて、今、目を覚ました。だから、もう死んでも、ここにしか戻ってこれない。だから……。
「……ガーネットは……もう……」
「……うん……集中治療室に入ったって……」
「っ!?　生きてるのか？　助かったのか!?」
　意外な言葉に、ベッドから身を起こすオレ。だけど、スピカは言葉を続ける。
「ごめん……違うの……違うの。それ、決まり文句なの。戦いでいなくなった魔女エトワールは、みんな、そう言われるの。だけど今まで一人も帰ってきてない。……わかるでしょ？」
　集中治療室に入った魔女エトワールは帰ってこない……？　じゃあ……。
「……ミラも？」
　その名前が、どれだけスピカを苦しめるか。少し、考えればわかりそうなものなのに、オレはうっかりと、それを口に出してしまう。
「アタシのせいなのよ!!」叫んでスピカが、オレのベッドの上に泣き崩れた。
「アタシが全部悪いの、ミラもガーネットもアタシのせいで！」
「お、おい……そんなこと……言うなよ。おまえはしっかり戦った、

そうだろ？」

「違うの。違うのよ……」

　顔を上げて、顔をくしゃくしゃにして、目を赤く充血させながら、スピカは言う。

「合宿の日ね。悪魔（ゾディアック）と戦う前にガーネットが言ったの。オザキが、死んだお兄ちゃんにそっくりだって。悪魔（ゾディアック）に殺されちゃったお兄ちゃんが帰ってきたみたいな気がするって」

　全くの初耳だった。ガーネットがそんなふうにオレを見ていたなんて。

「アタシ、なんか、カッとなって、怒鳴ったの。死んだ人なんかと、一緒にしないで――って……。なんで怒鳴っちゃったのか、今でもわかんない。それで悪魔（ゾディアック）と戦ってる時なのに、アタシとガーネットがぎくしゃくして……ミラが、とりもとうとしてくれたんだけど……全然、ダメで。どんどん、追い込まれていって――ミラが、やられちゃったの。ミラ、アタシのせいで、死んじゃったの」

　スピカの言葉は、堰（せき）をきったように止まらなかった。

「なんであんなふうに怒鳴ったかだってわかってる。アンタのこととられたくなかったの。アタシね、わかってたのよ……。ガーネットがアンタのこと好きだって！」

　さらなる衝撃に、今度こそ、オレの頭が真っ白になる。

「言ったよね、ガーネットはアタシの戦友だったって。何度も命を救ってくれた人だって。彼女がどれだけいい人か、どれだけ幸せになるべきかも、誰より知ってる！　どれだけお兄さんを愛していたかも――どれだけアンタに惹（ひ）かれてたかも、ちゃんとわかってたの！　誰よりも一番わかってたのよ！」

　上体を起こしたオレの胸に、スピカが飛び込んでくる。泣きながら、顔を埋（うず）める。

「それでも……アタシ……アンタに、抱きつきたかったの!!　……涙、ふいてほしかったの!!　キスしてほしかった!!　抱いてほしかった!!　好きだと言ってほしかったの!!」

——スピカの弦つるが切れたのが、わかった。

そして、皮肉なことに、その瞬間、オレの中で、全てが繋つながった。ガーネットがオレのことを避けているように見えたワケも。スピカとガーネットの仲がぎくしゃくした原因も。そしてスピカとガーネットが羽う化かの直前に交わした会話の意味も。

オレは……何を見ていたんだ？　オレはスピカの何なんだ？　スピカが何に悩んでいたのか、これっぽっちも理解せず、ガーネットと仲直りしろ、ガーネットのことも考えてやれ、なんて言って悩みを全部、スピカに押しつけて……。

スピカにとってガーネットは親友で、恩人で、だからスピカにとって、オレと付き合うことはガーネットへの裏切りで。それでも、彼女はオレを愛してくれていて。

彼女にとって、オレと付き合うことは、どれだけの重荷だったのだろう。どれほどの決意を込め、どれほど罪ざい悪あく感かんを抱き、どれほどの傷を心に負おいながら、オレと一つになったのだろう。マヌケなオレは、全然、そんなこと気づかなかった。全然、これっぽっちも気づかず、無責任に彼女を煽あおっていただけだった。

「ねえ……オザキ……アタシ、知ってたのかな……。ああやって言えば、ガーネットは、自分を犠ぎ牲せいにしても、アタシとオザキを守ってくれるってわかってて、だから、あんなところでオザキのことなんか言いだしたのかな……アタシ、ガーネットが邪じゃ魔まだったのかな？　だから、どんな手を使ってでも彼女を排除したいと思ったのかな？」

「違う！　そうじゃない！　ガーネットを殺したのはオレだ！」

今ならわかる。ガーネットが何を思って、あんな切せっ羽ぱ詰つまった状況で、名前を呼んでくれなんて言いだしたか。覚悟を決めるためだ。死の恐怖に抗あらがうためだ。たとえ偽いつわりだと知っていても、命を捨てるための心のよりどころが必要だったのだ。なのに、オレは何も知らず、ガーネットの背中を押した。オレのために死ね、そう言ってしまったのだ。

……誰のせいでこうなったと思っている？　そんなアリデッドの罵ば

倒(とう)が今(いま)更(さら)ながらに甦(よみがえ)る。決まっている。オレだ。オレさえ堕(お)ちてこなければ、スピカとガーネットの仲がぎくしゃくすることもなかった。そうすればミラが死ぬこともなかった。だったら今日の戦いも、三人のチームワークはばっちりで、きっと悪魔(ゾディアック)を羽化なんてさせずにさっさと倒せた。全部、オレのせいだ。オレさえいなければ、ミラも死なず、ガーネットも死なず、スピカもこんなふうに自分を責めて泣かずに済んだ。

　全て、オレが元凶なのだ。オレという存在が、一番、スピカを苦しめているのだ。もしもオレが最初の瞬間に戻れるのなら、どんな手を使っても、スピカに出会う前に自分を抹(まっ)殺(さっ)しただろう。このオレという存在を、塵(ちり)も残さず完全に排除してやっただろう。

　でも、それはただの妄(もう)想(そう)だ。もう、この目の前の現実は変えられない。オレは、スピカと恋するために——たったそれだけのために、ミラとガーネットを殺し、スピカをこんなふうに泣かせているのだ。それがオレのやったことだった。

「ああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

　自己嫌(けん)悪(お)で自分が殺せるなら、どれだけよかったか。

　叫ぶことで自己を抹(まっ)殺(さっ)できれば、どれほどよかったか。

　だけどオレは泣くことしかできなかった。泣きながら叫ぶしかなかった。

「やめてよ！　オザキまで泣かないでよ！　オザキにまで泣かれたらどうすればいいのよ！　……もうやだ……もう、こんなセカイ嫌(いや)……どうして、こんなことに……なんで……逃げたい……もう、アタシ、逃げたいよ……誰か、誰か助けてよ……!!」

　オレの襟(えり)を掴(つか)んで泣きながら、スピカが言う。その悲鳴を、唇を奪って強引に呑(の)み込む。すぐに、スピカが舌を絡ませてくる。その身体を強引に引き寄せる。それは愛を交わすとか、一つになるとか、そんなモンじゃなかった。それはスピカもわかっていたはずだ。ただ、逃げたかったのだ。自分が自分であるということから。刹(せつ)那(な)の

快楽に、暴力的な衝動に身を任せて、全てを忘れてしまいたいだけだった。お互いの中に逃げることで、たとえ一(いっ)時(とき)だけでも、自(みずか)らを苛(さいな)む自意識から解放されたかったのだ。

オレたちは、何もかも忘れて、お互いの身体を貪(むさぼ)り合う。

体力を消(しょう)耗(もう)し尽くしたのだろう、規則正しい吐(と)息(いき)を立てるスピカの頭の重みを腕に感じながら、ぐったりとした疲労感の中でオレは考える。

オレは、スピカのために、何ができるだろうか。

オレには世界を救えない。オレが救えるのはスピカだけ。

そんなことをオレは言った。

オレは、その言葉の意味を、ちゃんと考えたことがあったか？　今の状況を見ろ。ミラも死んだ。ガーネットも死んだ。残る魔女(エトワール)は一人だけ。もう一度、悪魔(ゾディアック)の空襲(メテオライト)があれば、このセカイもどうなるかわからない。ほら。自覚はしていなかったかもしれないが言葉どおりだ。オレはスピカ以外の誰一人として助けていない。

そして、スピカは最後の魔女(エトワール)。このセカイにいる限り、その宿命はどこまでも彼女を追いかける。だが、この街に、スピカが守るべきものがどれほど残されている？　もはや、一緒に戦った仲間たちはいない。魔女(エトワール)たちに守ってもらっていながら、感謝の言葉一つないクラスメイトや街の住民。街を守るためなら魔女(エトワール)たちを犠(ぎ)牲(せい)にすることを当然と考えるアリデッド。彼女たちの戦いを自作自演と貶(おとし)め、ひとときの休息さえ許さない沖(おき)たち生徒会。その私生活を暴(あば)き立てることを報道の使命と勘違いした日(く)下(さ)部(か)や樋(べ)ひの(ひの)ケ(け)たち新聞部。

そんなセカイのために、どうしてスピカが戦わなければならない？　どうしてスピカが死ななければならない？

世界全部を敵に回しても、スピカが好き。

そんなことも言ったはずだ。もう答えは出ているだろう。スピカを救うためには、何だってやる、そう決めたはずだ。おまえが、本当

に、そう思っているなら、できることがあるはずだ。あとはおまえの覚悟の問題だ。おまえの意志の問題だ。

　オレは――オレはセカイを救わない。オレはスピカしか救わない。

　覚悟を、決めた。

　セカイを滅ほろぼそう。

「ん……オザキ……？　アタシ……寝てた？」

　眠い目をこすりながら、ぼやけた声で言うスピカに、オレは訊きく。

「オレのこと、好きか？　オレを本当に好きか？」

「――う、うん。どうしたの？　いきなり。好きだよ、オザキ」

「言ったよな。人を好きになるってことは、たとえ記憶を失っても、その相手を好きでいられるってことだって」

「――で、でも……」

「こんなところで終わっていいのか？　このまま人生終わっちゃってそれでいいのか？」

　それはあの時、スピカがオレに投げかけた台詞せりふ。

　でも、それは、本当は彼女が彼女自身に投げた疑問。

「まだたくさんやりたいことあるだろ？　やってないことばっかりだろ？」

　いつか、オレが彼女に言ってやらないといけないと思っていた。

「遊びたいし腹を抱かかえて笑いたいし幸せになりたいし恋だってしたいし、こんなところで終わりなんて、そんなの嫌いやだろ？　こんな思いして戦って、好きでもないのに命を懸かけて、見返りは何もなくて、ただ仲間たちが死んでいくだけで――そのまま、おまえを死なすわけにはいかねーだろ」

　だから今、オレが言ってやる。オレがちゃんと彼女に言ってやる。

「おまえだって、幸せになっていいはずだろ？」

　答える代わりに。スピカは、唇を重ねてきた。

　オレたちは、もう一度求め合う。

「じゃ……今晩な。切符はオレが買っておく」

「切符って？」
「……なんでもない。とにかく準備は全部、オレがやる」
　翌、早朝。相変わらずなお嬢様のスピカをそっと送りだす。今日は月曜。学校では、学園祭の後始末が行われているだろう。
　そして月曜は、アマノの出発日でもあった。街の外へと向かう唯ゆい一いっの旅客列車。
　そっと部屋に戻ろうと思えば――、「いよう！　オザキ！」とリビングから声がかかった。
「なんだ、ビビったツラして。アタシが起きてたら、なんか都合わりーのか？」
　オレは密ひそかに、顔を観察。目の下にクマ。酒さけ臭くさい。明らかに、疲れている。テンションが異様に高いのも、寝起きというよりはむしろ、眠れない夜をすごした後のようだ。
「いやなァ？　眠ろうと思ったんだが、誰かさんたちがうるさくてよー。いや、若いってのは素晴らしいなァ？　オイ。若者の体力ってヤツを甘く見てたぜ！」
　赤面するオレ。
「ま、結構結構。ガーネットがいなくなった今、街の未来はスピカの双そう肩けんにかかってるんだからよ。四日後の鉄槌の日マレウスまで、全力で魔力を注いでやってくれや！」
「――まれうすって……なんだ？」
　下品な発言は受け流して、耳慣れぬ単語について問う。
「言ってなかったか？　一種の『晴れの特異日』みたいなもんでな。その日は毎年、必ず悪魔ゾディアックがやってくるんだよ。それが四日後だ。くれぐれも妙な気起こすなよ？」
「変な気ってなんだよ？」
「さあな。なあ。おまえは、このセカイが好きか？」
　アリデッドはさらに問うてくる。
「アタシは好きだ。できることなら、このセカイから離れたくない。たとえ魔女エトワールが一人になっても。このセカイを守るためだったら、

誰に恨（うら）まれてもいい。そう思って、やってきた。今も、気持ちは変わらない。だから――変なこと考えるなよ」

　オレは答えない。

「どうしたんだよ。機（き）嫌（げん）わりぃぞ。おまえの好きな女だって、きっと同じ思いだぜ。このセカイを守りたい、離れたくない、そう思ってるはずさ」

　そんなわけあるものか。このセカイはスピカを苦しめる牢（ろう）獄（ごく）だ。

「なんだよ、その目は。信じられませんみたいな目、すんなって。オレ、悲しくなっちゃうぜぇ。魔女（エトワール）は、このセカイを捨てられねぇ。捨てられないから、魔女（エトワール）なんだよ。

　――八年前だったかなァ。アマノに乗ってよ、一人の魔女（エトワール）と一人の男が、このセカイを出ようとしたんだよ。まあ、アリガチな愛の逃（とう）避（ひ）行（こう）ってやつだろうなァ。記憶を失っても、愛の糸は二人の絆（きずな）を結び続ける、とかトチくるってたんじゃねぇの？　まァ理由なんてどうだっていいんだ。それで、どうなったと思う？　その二人は――？」

　知るかよ。答えられないってわかってる質問してくんな。

「天蓋（グレンツエン）手前の土（ど）壇（たん）場（ば）で、魔女（エトワール）の方が行きたくない、降りるって言いだしてな。結局、二人で電車を降りちまった。誰に邪魔されたわけでもねぇ。魔女（エトワール）自身が、自分の意思で、このセカイを出るのを拒否したのさ」

「――それで、どうなったんだ？　その男と女は？」

「さあなァ。魔女（エトワール）の方は、もうとっくに墜（お）とされちまったんじゃねぇかなァ。まあ、もし万が一、生きてたら、若いヤツが同じ過（あやま）ちを繰り返そうとしないように言い聞かせてるかもしれねぇけどな。男の方は……知らねー。知りたくもねー。まだ生きてるって聞いたが、どうだろーなァ。裏切られたのがよっぽどショックなんだろうよ、それからは、もう、女のところには顔出せなくなっちまったみたいだからよ。全く、ヘタレ野郎だぜ」

　もしかしたら、とオレは思う。
　その魔女エトワールというのは、アリデッド自身なのかもしれない。
　だけど、それがなんだと言うのだ。その魔女エトワールが、おまえが天蓋グレンツエンを抜けられなかったとしても、スピカがそうだとは限らないじゃないか。
　適当に、話を切り上げ、そのまま、二階に上がっていく。
「ま、最後まで、おまえを信じさせてくれ、って話だよ。それが、おまえのためにもなる」
　追い打ちのように、背中にそんな言葉が投げつけられる。
　知ったことか。オレは、スピカが好きだ。スピカを守るためなら、誰に恨うらまれてもいい。全てを敵に回しても、全てを裏切っても構わない。もう、そう決めたのだ。
　学校には行かなかった。クラスメイトの……宮みや本もとたちの顔を見れば、決意が揺らぐ気がしたのだ。もしも、もっと普通の出会い方をしていたら、ここ以外の場所で出会っていたら、友達にもなれていたかもしれない連中。それを、ほかの誰でもない。オレが殺すのだ。ミラやガーネットと同じように。
　やがて、日が沈み、夜は更ふける。オレはそっと部屋を出た。
　後ろを振り返ることもなく、駆けだした。
　思えばオレは、走ってばかり、逃げてばかりだ。追いかけるのは何だろう？　伊い都と夏げ市で積み重ねた記憶？　それとも、このセカイの住民を皆殺しにすることへの躊ちゅう躇ちょ？
　余計なことは考えるな。ただ、前だけを見ろ。ただひたすら、走れ。
　辿たどり着いたのは――スピカの屋敷。彼女が、待っていた。
「ホントはね」とスピカが言う。
「アンタ、来ないんじゃないかって思ってた。
　最後の最後で、怖おじ気けづいちゃうんじゃないかって」
「んなわけ、あるか。オレは本気だ。おまえのためなら全世界だって敵に回してやる」

オレたち二人は手をとって走りだす。カルデアに感知される危険は冒せないから、彗(ほうき)もスターリットも持たない。だから、今のスピカは、ただの普通の女の子だ。そして、彼女の手を引いてセカイの外へ連れだせるのは――このオレだけなのだ。

ふと、視線を感じて後ろを振り返れば、襟(きん)在(ざい)が屋敷の塀(へい)の陰に溶け込むようにして、優雅に一礼していた。いってらっしゃいませ、とでもいうように。

そうだ。認めてくれるヤツだっている。オレは間違っていない。

これがスピカの幸せなんだ。これが、スピカが幸せになるただ一つの方法なんだ。

人(ひと)気(け)のない駅。無人改札を通ってアマノに乗り込む。乗客は、オレたちだけ。オレとスピカは、ボックス席の一つに向かい合って座る。やがて発車を知らせる音楽が鳴りだす。オレたちはお互いを見つめ合い、手を握り合う。

空気の抜けるような音がして――扉(とびら)が閉まった。

心地よい加速とともに、アマノが走りだす。

しばらく無言の時がすぎる間に、電車は街中を出た。伊(い)都(と)夏(げ)市はもともと、米どころで知られているそうだ。少し中心部を外れれば、そこは田園地帯だった。

「アタシがいなくなったら、セカイはどうなるのかな……。次に悪魔(ゾディアック)が来たら……」

「やめろよ。あれだけ、おまえらに守っておいてもらいながら、感謝の一つももたない連中だぞ。そんなヤツらのこと……考えてどうするんだ」

半分はスピカの気持ちを軽くするためであり、半分は本音だった。

セカイが滅(ほろ)ぶというのなら、そこに住む者たちが、スピカを、魔女(エトワール)たちを追い詰めた結果なのだ。自分を弁護するつもりはないが……自(じ)業(ごう)自(じ)得(とく)だろうと思う。

「樋(ひの)ケ(け)たちも、クラスの子たちもね……アタシたちが嫌いなんじゃ

ないと思う。ほら、魔女エトワールは、戦って……いなくなるでしょう……？　いつか消えてしまう人と、友達になるって、すごく大変なことだから……」

　そんなスピカの言葉を聞いても、理解したいとは思わなかった。友達を失うのが辛つらい？　だから魔女エトワールたちに辛く当たってもいいのか？　彼女たちは、おまえらを守るために、現に傷ついて、辛い思いをして、命まで落としているというのに。そんであれだろ、いなくなった後で、「あの子いいやつだった」なんて、話したこともないくせに言うんだろ。

「おまえが庇かばうことなんてないんだ、スピカ。それに、おまえが責任を感じる必要もない。オレがおまえをさらって、セカイの外に無理矢理、連れだすんだ。悪いのは全部、オレだ」

　スピカを、抱きしめる。

「何か……不安か……？　何が怖いんだ？」

「あのね、オザキ。アタシ、今日ね。昔の映画を観たの」

「またジブリか？」

「ううん。違うの。『小さな恋のメロディ』っていう映画——知ってる？」

　知らないタイトルだった。オレは、首を振る。

「十一歳の小さな恋人たちが主役でね、まだ早すぎるって言う親や教師たちと、闘うの。それでね、二人は子どもたちだけの結婚式を挙げて、大人たちから、トロッコに乗って逃げていくところで終わるんだ、ラストシーン。で、観終わってから、アタシ、考えたんだ。……あの二人、あの後、どこ行ったんだろうなぁって。オザキ、わかる？」

　わからない。観てもいない映画の話だ。答えられるわけがない。

「きっと——地獄なんじゃないかな……」

　不安そうな、心細そうな声で、スピカは言った。

「アタシ……ちょっと怖くなっちゃった。オザキはさ、天蓋グレンツエンの外、知ってるでしょ？　でもアタシ、このセカイしか知らないから。

だから、外に出ても、大丈夫かなって」

アナウンスが、次の駅名を告げる。降りるとすれば、これが最後のチャンスだ。

アリデッドは、いや、アリデッドの言っていた魔女(エトワール)は、次の駅で降りたのだ。

電車が、減速する。慣性で傾く状態が、彼女の顔を近づけさせる。

「ね、オザキ。アタシホントに、全部忘れていいのかな？　外に出ても、アタシはアタシでいられるのかな？　外の世界って本当にあるのかな？」

電車が止まり扉(とびら)が開く音がした。外は、郊外の小さな駅。一面の田んぼと、星空が迎える。オレはスピカの手をとって——そのまま、引き寄せ、強引に唇を重ねた。

彼女は、このセカイで生まれ、このセカイで育った。彼女にとっては、このセカイが世界の全てだった。けれど、今は違う。外からやってきたオレがいるからだ。このセカイが全てじゃない、おまえには逃げだせる外があると、オレなら言ってやれる。

だから——オレは彼女の手を、離さない。

電車の扉が、閉まり、動きだす。

もう引き返せない。

オレたちは、これから天蓋(グレンツエン)を抜ける。

全ての記憶を失う。そして、誰でもない、二人の男女としてもう一度出会う。

でも、オレは信じている。

オレとスピカなら、たとえ記憶を失っても、もう一度、恋人同士になれると。

「おまえが、不安なのも、怖いのもわかる。でも、一緒にいるからさ。おまえがおまえでなくなっても、絶対、側(そば)にいるからさあああああああああああああああああああああ!?」

セリフの途中で突然の爆音。衝撃に車(しゃ)輛(りょう)が揺れた。

「な——何だァ？」目(ま)蓋(ぶた)を開けて、唖(あ)然(ぜん)。オレたちの乗った車輛

の前半分が、引き千(ち)切(ぎ)られるように消えていた。夜の風が吹き込んでくる。だいぶ前方に、列車の前半分。どんどん遠ざかっていく。一方こちらは、動力車を失い、速度が次第に落ちていく。

　そして、併(へい)走(そう)するかのように、彗(ほうき)の上で仁(に)王(おう)立(だ)ちになった人影。

　夜の帳(とばり)より、なお昏(くら)い、その漆(しっ)黒(こく)の軌(き)跡(せき)は、どこか悪魔(ゾディアック)を、そして天国でオレに襲いかかった闇を思わせる。

「あ——アリデッド!?」とスピカ。

「そのとーり！　伝説の初代魔女(エトワール)！　黒槌(スヴァアスティカ)——アリデッド様のお出ましだっての！」

　衝撃で割れた窓からアリデッドの叫びが聞こえる。二十年前、初めて伊(い)都(と)夏(げ)市に降り立った、伝説の魔女(エトワール)——黒槌(スヴァアスティカ)。やっぱり、彼女がそうだったか。

「ったく、勝手に愛の逃(とう)避(ひ)行(こう)してんじゃねーぞコラ！　ホラ、帰るぜ。今ならまだ、冗(じょう)談(だん)で済ませてやる！」と怒鳴りつけるアリデッドに、

「断る！　オレとスピカは、天蓋(グレンツエン)を越える!!」と、叫び返すオレ。

「覚悟はできてるってか？　そいじゃ、実力行(こう)使(し)と、行かせてもらうぜ！」

　その言葉を最後まで聞かず、オレはスピカの手をとると走りだす。ほとんど止まりかけた客車から、夜の線路上に飛び降りる。天蓋(グレンツエン)は近い。走ってだって辿(たど)り着けるはずだ。

「なるべくぴったりくっつけ！」

　スピカに指示。アリデッドが魔法を放つが、いずれも近くに着弾するだけ。今のアリデッドにとって、スピカは最後の手下だ。彼女を傷つけるようなことは絶対にできないはず、というオレの読みは当たった。

　スピカを人(ひと)質(じち)にしているようで心苦しいが、背に腹は、代えられない。

　やがて、オレとスピカの息が上がり始める頃、線路がぷっつりと途切れ、漆（しっ）黒（こく）の壁がオレたちの前に現れる。天蓋（グレンツエン）。その先は見えない。これを越えれば、外に出られる。
　全ての記憶と引き替えに。
　追っ手が迫っているというのに、自然、オレたちの足は躊（ちゅう）躇（ちょ）するように止まってしまう。
「やめろよ！　おまえらは、このセカイを見捨てることになるんだぞ！」
　彗（ほうき）から下りたアリデッドが制止する。だが、彗は構えない。天蓋（グレンツエン）はすぐ背後だ。撃てば、オレたちを壁の向こうまで吹き飛ばしてしまうだろう。
「てめーのチンケな愛は、世界を滅（ほろ）ぼしてもいいくらい高（こう）尚（しょう）なものだって言えんのか！　他のやつらのことなんか、どうでもいいって言えんのか！　アタシらを殺すんだぞ！」
　その言葉に、オレの手を握るスピカの握力が少しだけ、弱くなる。
　だからオレは、彼女の手を強く握って、答える。
「言ってやる！　オレはスピカを幸せにする。おまえらは滅びろ、ここで死ね！」
　オレの言葉に絶句するアリデッド。覚悟もなしに、オレがこの決断を下したと思ったか。
「魔女（エトワール）だなんて関係ねぇ！　オレにとっちゃ、たったひとりの最愛の人間だ！　オレにとっちゃ世界の全てだ。セカイの危機なんか知るか！　おまえが戦えばいいじゃないか！」
「ふざけてんじゃ……ねーぞ……。できりゃ……とっくにやってるよ……」
　低く、震えるアリデッドの声。その瞳が揺れて見えるのは——泣いてるのか？
「ふざけんじゃねーぞ!!　なんで行っちまうんだ！　苦しいけど、仲良くやってきたじゃねえか！　そりゃ、このセカイは苦しくて悲しいよ！　でもな、アタシたちが生きるのはここだろ？　このセカイで、

苦しいことも悲しいこともあったから今のアタシたちがいるんだろ？　オレたち、背中を預け合って、肩組み合って、世界を守ってきたじゃねぇか！　夜一緒に飛んで、空に輝くあの星の数だけ、守るべき輝きがあの街にもあるって、だから、どんな苦しいことにも耐えていけるんだって……おまえたちの仲間だって、そう信じたから——だから今、おまえがここにいるんだろ!?　仲間との思い出を忘れていいのかよ!!」

大粒の涙を溢あふれさせながら叫ぶアリデッド。それは、もう、説得というより、駄々をこねる幼児のよう。その言葉に——。

「あ……」

呟つぶやいて……スピカの手から、不意に力が抜けた。

そして……オレの手が振り払われる。

スピカが一歩、進む——天蓋グレンツエンから、一歩、離れる。セカイへと戻っていく。

「ゴメン……オザキ……」

振り向いたその目には、涙が光っていた。そして、涙をぬぐおうともせず、彼女は、空を偽にせ物ものの夜空を見上げる。きっと、今、スピカはアリデッドと同じものを見ている。ガーネットや、ミラや、オレの知らない魔女エトワールたちのこと、そして仲間たちとすごした日々のことを、あの星空に見ている。オレとは違う空をスピカは見ている。

ほんの数歩の距離なのに、スピカが無限に遠くに行ってしまった気がする。

スピカは、オレよりも、仲間との思い出をとるっていうのか？　オレは叫ぶ。

「おまえはもう魔女エトワールなんかやめていいんだ！　そんなの本当のおまえじゃない！　オレから見れば、おまえはただの人間で——ただの、大好きな女ひとだよ！　オレはおまえに死んでほしくはない！　オレはおまえに幸せになってほしい！　言ってくれよ、自分は魔女エトワールの前に、一人の女の子だって！　そうすれば、オレは、このセカイから、おまえを連れて逃げてやる！　おまえのためなら全世界を敵に回

したっていい！　おまえのためなら！」
　だけど、スピカは、アリデッドの隣となりに立って、そして言う。
「ゴメン……アタシは、やっぱり、魔女エトワールなのさ」
「よく言った、スピカ。おまえは、アタシたちカルデアの誇りだ」
　言いながら、アリデッドは、オレを見た。だけど、その瞳には、怒いかりというより、哀あわれみの色が浮かんでいる。――忠告しただろう、とでもいうように。
「アリデッド。何でも言うこと聞くから――これ、貸して」
　スピカは、アリデッドから彗ほうきを受けとり――その先を――オレに向けた。
「な……？　おまえ、何する――」
「今までありがとう。アタシが今ここにいるのは、オザキのおかげ。アタシはずっと、あなたのことを忘れない。死んでも忘れないから――オザキは、アタシのことを忘れてください。アタシなんて、最初からいなかったんだって……　そう、思ってください……」
　スピカの構える彗に、リネアが集まり――。
「さよなら」
　オレに向けて放たれた。オレをセカイから押しだそうと全身を光の波が襲う。
「ふがっ！　ガ――ッ、ぐ――――!!」
　大丈夫！　出力は、絞ってあるようだ。チリチリと肌が焼けるくらい、屁へでもない。
　オレは大地に四つん這ばいになって踏ん張る。枕まくら木ぎを掴つかんで、懸けん命めいに抵抗する。
「な――何やってんのよ！　さよならって言ったでしょ！　こっちに、来ないで！」
「ふざ、けんな……！」歯を食い縛って。
　意識がリネアと一緒に後方に押しやられる感覚。それでもオレは前に這う。右手で枕木を掴んだら次は左手を次の枕木へ。そしたら次は、右手で……。

「来ないでってば！　あっちに行って！　これ以上、出力上げたら——！」

「一人でなんか誰が行くかよ！」薄れる意識を繋つなぎ止めるべく、オレは叫ぶ。

「殺すなら殺せ！　覚悟はできてる！　だけどオレは死んでも諦あきらめないからな！　絶対に、おまえを助ける！　絶対におまえを幸せにする！　絶対に外に連れだしてやる！」

　……叫び終えたあたりで……スピカの放つリネアの出力が弱まった気がした。

　だけどもう、オレには、目を開けているだけの気力も残されていなかった。駆け寄る足音がした。オレを抱き上げる感触。遠くなる意識。耳元になすりつけられる水滴だけが、最後まで、温かかった。

　……そうさ。オレは、おまえの涙をぬぐうためにいるんだ……。

　目を覚ますと、そこは白い壁に囲まれた独どく房ぼうだった。

　オレは、魔女エトワールを連れて逃走しようとした、セカイを滅ほろぼしかけた罪ざい人にんとして、自衛軍の牢ろうに収しゅう監かんされていたのだ。

　一度意識を失ったオレは、もう、戻れない。オレはスピカを連れて逃げだすことに失敗したのだ。テレビどころか、時計も、そして窓すらもない部屋。時間の経過すら曖あい昧まいになる。そんなある日というべきか、ある時というべきか、食事とともに、一通の封筒が差しだされた——スピカからの手紙だった。

　正直、読むのが怖かった。

　オレは、スピカを救うためにこのセカイにいる。でも、もし、スピカがオレを拒絶したら？　スピカは、記憶喪そう失しつのオレにとって全てだ。スピカが、オレを要いらないと言うのなら、オレもオレなんて要らない。オレなんて存在する意味がない。

　だから、お願いだ、スピカ。オレを必要としてくれ。助けてくれと、一緒に逃げてと言ってくれ。そうしたらオレはどんな手を使ってでも会いに行く。

　だけど、そこに書かれていたのは、一方的な、拒絶の言葉だった。

　アタシを連れて逃げだそうとしてくれて、どうもありがとう。失敗しちゃったけど、アタシは本当に嬉うれしかったよ。でも、脱出が失敗に終わって、アタシは本当のこと言うと、少しホッとしています。一人になって、よく考えてみたの。アタシは本当に、みんなを見捨てて外に出たいのかって。それで、決めました。

　やっぱりアタシは、この世界を捨てるなんてできません。

　だってアタシは、正義の天才魔女エトワール。

　オザキには、アタシのせいで迷惑かけちゃったね。勝手なことを言って、ごめんなさい。許してくれると、嬉うれしいけど。無理かな？

　それじゃバイバイ、オザキ。

　結局、スピカは、オレと恋をする女の子ではなく、このセカイのために戦って死ぬ魔女エトワールであることを選んだ。だから、オレは——もう、必要ない。手紙は、そう告げていた。

　白い部屋で、ただじっと時が行きすぎるのを待つ。灯りが点つき、消え、点き、消える。それが、繰り返される。もう何日経たったかは、憶えていない。

　その日オレは、乱暴なノックで目を覚ます。

「オザキ。今日は、まれうすだ。なんだ、腑ふ抜ぬけたツラをして。どうした、貴き様さま。それでも世界を滅ほろぼさんとした男か？」

　主は、沖おきだった。オレは答えない。

　すると、沖が手に持った薙なぎ刀なたをオレの方へと投げてよこす。

　音を立てて、薙刀が床に落ちる。

「あー、しまった薙刀を落としてしまった！　今、ここで薙刀を拾ったオザキに脅きょう迫はくされてしまえば、沖は、スピカのところまで案内せざるを得ないかもしれん！　……しまった、これは大変な失態だ！」

　なんというか——銭ぜに形がた警部なみの演技力で叫ぶ沖。

だけど、オレはここを抜けだしたいとは思わない。スピカに会いたいとは思わない。スピカがそれを望んでいないのだ。

微(び)妙(みょう)な、あまりに微妙な沈黙が、独房を支配して——コホンと、沖は咳(せき)払(ばら)いした。

「貴様、沖の一(いっ)世(せ)一(いち)代(だい)の名演技をなんと心得る！」

「なんで、オレを助けるようなことをするんだ……？　おまえ、オレが何をしたか……」

「そのとおり。貴様はこのセカイが滅ぶと知って、魔女(エトワール)をこの街から連れだそうとした。そして天蓋(グレンツエン)を抜け、その罪(つみ)さえ忘れてのうのうと暮らす、卑(ひ)劣(れつ)極(きわ)まりない生き方を選んだ。

しかしな、一人の女を助けるために、全てを捨てる覚悟、信念だけは認めてやる。それに、貴様には借りがある。以前の襲撃で、貴様が魔女を援護する作戦を呈示しなければ、このセカイはとうに滅んでいた。だから——その恩を今返す。これが最後かもしれん。一目くらい会いたくはないのか。それが、貴様の生き様ではなかったのか!!」

それは、スピカがオレを必要としてくれたからの話だ。スピカはオレを拒絶した。だから、ここにいるのは生ける屍(しかばね)だ。望みがあるとすれば、ただ静かに消えることだけだ。

「——ちぃっ！　腰抜けが。見(み)損(そこ)なったぞ！」

沖(おき)は、薙(なぎ)刀(なた)を拾う。耳(みみ)障(ざわ)りな音を立てて扉(とびら)が閉ざされる——恐らくは永遠に。

一目くらい会いたくないのか——もし会えるなら会いたいと思う。

オレの愛したスピカに、オレを愛してくれたスピカに会えるのなら。だけど、そのスピカはもういない。今いるのは魔女(エトワール)のスピカだ。オレを必要としない、天才魔女(エトワール)のスピカだ。

勝手にすればいい。今までどおり、セカイを守って戦えばいい。戦って——自分で選んだ結末を受け入れれば……いい。

オレは硬いベッドに突(つ)っ伏(ぷ)す。だけど、眠りは迎えに来ない。

サイレンが鳴り、基地内にレッドアラートが轟(とどろ)く。牢(ろう)の外が、一(いっ)斉(せい)に騒がしくなる。

遠くから聞こえる怒声。エンジンが唸(うな)る。キャタピラが独(どく)房(ぼう)を細かく揺らす。

白い天(てん)井(じょう)から、パラパラと埃(ほこり)が落ちてくる。

全てが夢になってしまえばいい。

何もかもが、夢のように、消えてゆけばいい。

あの邪(じゃ)眼(がん)に睨(にら)まれて、光に包まれて、消えてしまえばいい。

スピカがあれだけ苦しんで、それでも戦うことが正しいセカイなんておかしい。こんなセカイ、存在自体が間違っている。こんなセカイ、もう、どうでもいい。

「……バルス……バルス……、滅(ほろ)べ……さあ滅べ……、わはは……」

一人きりの独房で、いつの間にかオレはそんなことをブツブツと呟(つぶや)いていた。

『……聞こえる……？　オザ……聞こえる？』

そんな時、独りぼっちのはずの房内に、誰かの声が響いた。

聞き覚えのある声——スピカだ……。ついに幻(げん)聴(ちょう)まで聞こえるようになったか、と思ったが……顔を上げれば、スピカの手紙が入っていた封筒が、赤い光を放っていた。

『今、悪魔(ゾディアック)のところに向かってる。天象儀(カール・ツアイス)じゃ、もう蛹化(ピューパ)が観察されてるみたい。だから、もしかしたら、これが最後の通信』

中から出てきた赤い星——スターリット。なんたる……マヌケ……。

『結局、返事してくれなかったね。アタシのこと許してくれないよね？　でもアタシ、手紙にも書いたけど——街の外に、出たいとは思わない。やっぱり魔女(エトワール)として、このセカイを守る。たとえ、その結果がわかっていても。

ダメかな？　オザキは、普通の女の子のアタシじゃないと、好きになってくれない？　魔女(エトワール)のアタシは、好きになってくれないかな？』

「お……おい、スピカ……おい！　オレは……」
『そっか。そうだよね。ごめんね。ありがとうね……』
　こっちの声が、届いてない？　これも受信しかできないヤツかよ！
『会いたかったな。最後に、声くらい聞きたかったよ、オザキ。
　でも聞いてるよね？　聞いててほしいな。聞いてくれてるって思って、しゃべるね……。じゃないと……怖いから。あいつら、蛹（さなぎ）で墜（お）ちてきてるんだって。羽（う）化（か）したあいつと、戦うんだよ、アタシ。
　天才魔女（エトワール）にしか、できないから。でも、わかる？　声、震えてんだ。笑っちゃうよね。一人で空を飛ぶの、こんなに怖いなんて、思わなかった……』
　スターリットが、割れんばかりの音を立てる。悪魔（ゾディアック）の咆（ほう）哮（こう）だ。敵が羽化したのだ。
　そして、スピカはその叫びに応えるように言う。話しかけるみたいに、言う……。
『来たわね、ガーネット』
　は……？　ガーネット……？　ガーネットが来たって何だよ？
『この間は、一緒にミラちゃんと戦ったけど。今度は、アタシの敵なんだね』
　悪魔（ゾディアック）の咆哮。
『ゴメンね。でも——アタシ、このセカイが、好きだから』
　スピカの言葉に応えるように悪魔（ゾディアック）が吼（ほ）える。
　混乱するオレを尻目に、スターリットからは、悪魔（ゾディアック）に話しかけるスピカの声が……いや、悪魔（ゾディアック）とスピカの会話が聞こえてくる。
『憶えてる？　最初に会った時のこと。二人とも小さくて、彗（ほうき）の方が身体よりもおっきくて。ミラはその頃からチビで、まだみんなもいて——それでアタシたちはセカイを守る希望の星だって、本気で信じてたよね。いつまで信じてた？　アタシはね、結構ずっと信じてたよ——成体（イマーゴ）を見るまではね』
　悪魔（ゾディアック）が吼える。悲鳴をあげるように。

『アタシたち、考えてみれば一度も、成体イマーゴの話はしたことなかったよね。怖くて、話なんてできなかったよね。だから、悪夢から逃げるみたいに戦って戦って、戦って、戦って。

　昨日まで一緒に戦った仲間がさ、今日は悪魔ゾディアックの格好で、叫ぶんだよね。アタシたちを、見捨てないで、置いていかないで、仲間を殺させないでって。アタシたちに止とどめを刺してって、楽にしてって。ねえ、ガーネット。アタシ、逃げだせないよ。あなた達を裏切って、逃げだすなんて、できないよ。だって——今まで一緒だったじゃない……』

　悪魔ゾディアックが吼える。泣き叫ぶように。

『うん。そうだよね。ホントは、セカイのことなんてどうでもよかった。みんなを守るなんて建たて前まえだった。昨日まで一緒に笑ってた仲間を、裏切れなかっただけ』

　悪魔ゾディアックが吼える。誘うように。

『うん、好きだよ。大好きだよ。一緒になりたいよ。でもね、ダメなんだ。大好きな人が、できたの。だから、あなたのお願いでも、ダメだよ。あいつは、鈍にぶいし決断も遅いし、もうちょっと早く男らしくなってくれてもいいじゃん！　って思ったけど——でも、それが、普通の人だから。オザキには、普通の人の幸せが必要だと思うから。だから——ゴメンね、ガーネット。アタシ、絶対、あなたを——』

　悪魔ゾディアックが吼ほえる。責め苛さいなむように。

『違う！　アタシ、そんなつもりじゃ——嘘うそじゃない！　それは——知ってたけど、知ってたけど、でも——アタシを恨うらんでるの？　アタシ、友達だよ。仲間だよ。そんな……当てつけなんかじゃない！　アタシは……ガーネットを、信じて……信、じ……て…………』

　悪魔の咆ほう哮こうが、何と言っているかはわからない。ホントに悪魔ゾディアックがしゃべっているのか、それともスピカの妄もう想そうなのか、オレにはそれもわからない。だけど、スピカが何を言われているかくらいは当然、想像がつく。どうしてだ。

　どうして最後の最後までこんなふうに苦しまなきゃいけないんだ!?

「やめろ!!　もうやめてくれ!!」

　一体誰に向かって、何をやめろ、と言いたかったのか。オレの叫びは、当然、誰にも届かない。小さな独(どく)房(ぼう)の壁に吸い込まれて終わる。

　巨大な唸(うな)り声が勝ち誇るかのように轟(とどろ)く。

　――気がつけばスターリットの、赤い光が消えていた。

　咆哮が、セカイを包んでいく――。

　オレの意識が、虚(こ)空(くう)に消える。

「なんなんだよ!!　これは!!　なんなんだよ!!」

　天国でオレは絶叫する。

　スピカは逃げなかった。魔女(エトワール)の役目を果たそうとした。そんなスピカが、なんで最期まで苦しまなきゃいけないんだよ！　オレだってスピカの恋人だ。逃げだしたいって言葉が、嘘じゃないってことくらいはわかる。それでも、あいつは街に戻った。立派だよ。それなのに、あんなに苦しんで終わらなきゃいけない！　こんな終わり方、許せるか！

　もう一度だ。オレに、何ができるかわからない。でも、こんな終わりはダメだ。

「うんこマン……やめた方がいいでち。

　これ以上は、もう辛(つら)くなるだけでち。かみしゃまにも慈(じ)悲(ひ)があるでち。ここで終わりにするべきでち。このまま命を失った方が、楽でち」

　だけど、憤(いきどお)るオレに、テレビの中から諭(さと)すように神様（幼女）が言った。

「生き返ってどうするんでち？　今度こそ、トーヒコーでちか？　うんこマンは鈍(にぶ)いから、わからないかもしれないでちが、スピカはぜったい、外には出ようとしないでちよ」

それは……そうだろう。スピカの通信が、幻覚や妄想でなかったとすれば、悪魔ゾディアックの正体は、墜ちた魔女エトワール。どういう理屈か知らないが、死んだ魔女エトワールは、新たな悪魔ゾディアックとなって還ってくる……。だから、彼女はこのセカイに残ろうとした。仲間たちとの思い出。それは単に記憶が大切って意味だけじゃない。

仲間たちの想いを、その死を汚けがさないために、彼女は戦わなければいけないのだ。

悪魔ゾディアックは、いわば、死んだ魔女エトワールたちの動き回る屍しかばねだ。ともに生き、ともに戦った仲間たちが、変わり果てた姿になって、かつて自分が守ろうとしたセカイを壊しに戻ってくる。きっと耐えがたい光景だろう。かつての親友たちが、動き回る屍となって、ギクシャクと街を歩いたり、まるで亡霊のように空を飛ぶ姿を見るのは、あまりに忍しのびないだろう。

だから、彼女はセカイに残ったのだ。

仲間たちに引いん導どうを渡すべく。仲間たちを、本当の意味で眠らせてやるために。

「いい結末は、用意されていないでち。なんどやりなおちても、スピカは絶対、帰ってこれないでちよ。あの成体イマーゴを、犠ぎ牲せいナシにはたおすことはできないでち。ものすごくがんばって、自分の命と引き替えにたおすのがやっとでち。全ては手遅れ。どんな選せん択たく肢しをとっても、どんな奇跡が起こっても——スピカは、戻ってこないでち……だから、もう、やめるでち……」

全ては手遅れだと、神様（幼女）が言う。八はっ方ぽう塞ふさがりだと神様が言う。それを信じていいのか？　いや、そうじゃなくて——神様がそんなことを言ってしまうから、そういうことになるんじゃないのか？　光あれ、みたく。おまえ、ホントに神様なんだろうな？

「そうでちよ。まだ信じられないんでちか？」

だったら、この世界を創ったのもアンタだろ？　創り直せ、今すぐ！　悪魔ゾディアックだの天蓋グレンツエンだの、何考えて創ったんだ？　そんなもんなけりゃ誰も不幸にならなかったじゃねぇか。成体イマーゴは犠牲が

なければ倒せません？　どういう理屈なんだよ！　ふざけんなよ！　どう足掻（あが）いても結局、スピカが不幸せになるように創られてんじゃねーか。なんなんだよ、この設定は！　スピカがどれだけ苦しんだと思ってるんだ？　あんな女の子の恋一つ成就（じょうじゅ）させてやれないなんて、それでも神かよ！　愛を認めないなんて、そんなのがあってたまるか！　オレはちっぽけな人間だ。だがオレは、おまえを神なんかとは認めない！　認めてほしかったら、今すぐスピカが幸せになれる世界を創れ。誰も死なない世界を創れ！　さもなきゃチェーンソーでバラバラに——。

「ひぐっ、ぐ、ぐ……ひっ、ひぐっ、ぐぐぐ——」

　思わず思いの丈（たけ）をぶちまけてしまうオレ。てっきり、神罰（しんばつ）でも下されるかと思いきや……神様（幼女）は突然泣きだした。

「ぐぅゎぁぁぁぁああああああああん!!　あだちのせいじゃ、ないでちよぉぉおおおお……!!

　できないでち！　できないでちよぉぉおおおおお!!　うんこマンはいいヤツでち！　見てると応援したくなるでち！　だからあたちも、力になってあげたいでちけど——でも、できないでち！　かみしゃまは、この世界を創ったわけではないのでちよぉぉおおおお！」

　自分のせいじゃないって、そんな無責任な。この世界を創ったのは……神様（幼女）じゃない？　オレを何度も生き返らせてくれたのに……？

「ユミの言うとおりだ」と、チャンネルがひとりでに切り替わり、現れたるは神様（眉毛犬）。

「おまえの怒（いか）りはもっともだが、それは八つ当たりだ。これ以上、ユミをいじめないでやってくれないか——」

　渋（しぶ）い声で凄（すご）まれる。こんなところで怯（ひる）むわけにもいかないが……でも、本当なのか？

「本当だ。オレたちは数多（あまた）の神の中の、一人と一匹にすぎない。

　できるのは、このテレビから世界の様子を眺めながら、おまえを生き返らせたり、話したりするくらい。せいぜい観客というところだ

な。正直、オレたちだって、このセカイの悪意には、辟易(へきえき)としている。だからユミはおまえを生き返らせることを渋ったんだ。彼女なりのやさしさなんだよ」
　そう、だったのか……。すまん……。
　とオレが心で頷(うなず)けば、チャンネルが切り替わる。
「でも……かみしゃまはプロの観客でち。いままでずーっと、この世界を、この世界で何が起こるかを見てきまちた。どれだけ彼女が天才で、どれだけリネアがあっても——一人では成体(イマーゴ)に勝てないでち……」と、幼女。
「ああ。今の彼女には——絶対に無理だ。だから、おまえが選ぶことができるのは、みっつ。このまま生き返らずに、あの世に向かうか。生き返ってスピカの死を見届けるか。それとも、無理矢理にでも、セカイの外に連れだすか」と、眉毛。
　本当にそれしかないんだな。
「ないな」「ないでち」二人（？）の神さまが頷(うなず)く。
　無理矢理に——たとえば、気絶させるなり眠らせるなりして、彼女を強引に連れだすことはできるだろう。でも、それは本当に彼女のためか——？　いきなり、眠らされて、気がついたら記憶を失って自分じゃなくなってて——って、それは殺人とどう違うんだ？
　それはできない。絶対にできない。スピカがそんなことは望んでいない。
　じゃあ、彼女は何を望んでいる？
　——オザキは、普通の女の子のアタシじゃないと、好きになってくれない？　魔女(エトワール)のアタシは、好きになってくれないかな？
　彼女は、そう言っていた。彼女は、セカイを出ることを拒(こば)んだ。天才魔女(エトワール)であることを選んだ。でも——それでも、彼女は、オレを愛してくれている。
　オレはどうだ？　オレは、魔女(エトワール)の彼女を愛することができるのか？　それが、彼女の死を受け入れることだと知って。
　……いいや。できるのかも何もない。

　オレはスピカが好きだ。

　この気持ちだけは、どうしても誤魔化(ごまか)せない。

「わかってるんでちか？　生き返っても、苦しむだけでちよ」

「どう足掻(あが)いても、ハッピーエンドには辿(たど)り着けないぞ。なのになぜ？」

　もしも願いが叶(かな)うなら、悪魔(ゾディアック)や魔女(エトワール)なんていない世界に生まれ変わって、また二人に戻って恋をして、みんなでニコニコできれば、いいと思う。

　だけど、それが叶わないと言うのなら。

「ハッピーエンドなんて、もう、どうでもいい——」

　だから、オレは口に出して言う。

　そうだ。オレはセカイを救わない。ミラもガーネットもスピカも救えない。

　だけど、スピカが望むのなら。スピカがオレを必要としているのなら。

　オレは生き返らないといけない。だから、オレは走る。扉(とびら)に向けて走る！

「せっかくユミが忠告したというのに、全く、しょうもないやつだなあ」

「こんなダメなうんこマンは、最後まで、見守らなければならないでちね」

　テレビの向こうで神様たちが呆(あき)れたように言う。その温かな視線が背中を押したような感覚。

　ぐん、と身体が加速する。遥か遠くに見えた扉が、一気に大きくなる。

「オレは、最後まで、スピカの側(そば)にいてやるんだ！　それでも幸せにしてやるんだ！」

　肺が空(から)っぽになるほど大きな声で叫んで——オレは、泣きながら、扉を突き破る。

　その日オレは、乱暴なノックの音で目を覚ます。

「オザキ。今日は、まれうすだ。なんだ、腑ふ抜ぬけたツラをして。それでも世界を滅ほろぼさんとした男の……」

　顔を出したのは、沖おき。脳内で鳴り響くファンファーレ。奔ほん流りゅうのように流れでる、記憶！

　――そう。こんなところで腐くさってはいられない。オレにはやることがある。

「……よい。それでよい。それこそ男の面つら構がまえである」

　視線が、枕まくら元もとの封筒で止まった。中にはスターリット。

　今にも赤い光を放ち、スピカの声が聞こえてきそうな気がする。

　だから、オレは、行かなきゃいけない。

　沖がこちらに投げてくる薙なぎ刀なたを、オレはしっかりと受けとる。

「……どうやら、その気だったらしいな。その意気や、見事。沖はおぬしに借りがある。その借り、今返す。沖は不本意ながら、おぬしの人ひと質じちとなる。ついてこい！」

　ついてこいって……人質のセリフかよ。呆れるオレに構わず、ずんずん進む沖。なんというか人質というより、沖を護衛する薙刀兵その一という格好。

　まるで出撃していく将軍を見送るように――いや実際にそのとおりなのかもしれないが――隊員たちが略式の敬礼をする。

　基地の外に出る。

　時間の感覚がさっぱりなくなっていたが、夕暮れの時間帯だった。

　もう日が落ちようとしていた。紅あかい光に照らされた戦車のキャタピラが唸うなりをあげ、バカでかい夕日の中に吸い込まれるように、戦闘ヘリが離陸していく。

　戦車みたいなキャタピラと大砲つきのゴツイのが一台、オレのために用意されていた。

　歩兵戦闘車ってやつらしい。沖おきは操そう縦じゅう席の兵員に話をつける。

「カルデアまで送ってやれ。そうだ。貴き様さまは沖を人ひと質じちに脅きょう迫

はくされたのだ。よいな」

　なんというか——かつて、ここまで優遇された犯罪者がいただろうか。

「沖はここまでだ。これから陣頭指揮を執とらねばならんのでな。安心しろ。兵には、きちんと貴様の人質としての任務を全まっとうするよう指示しておいた」

「その……ありがとうな、沖」

「言ったであろう、借りを返しただけだと。これが終わって無事だったら、貴様、生徒会に入れ。じっくり性しょう根ねを鍛え直してやろう」

「考えとくよ」と、オレは笑って答えた。

「えっと、その……、武ぶ運うんを……祈る。えっと……天てん佑ゆうを、信じろよ？」

「フ……貴様もな。さあ征ゆけ。想い人を待たせるでない」

　オレは後部の兵員室に乗り込む。そこには着替えの学生服まで用意されていた。

　……ここまで、段取りされておきながら、前世のオレはいじけていたのか。全く情けない。

　無限軌道が唸うなりをあげる。さすが軍用車、山道もものともせず、柳楽山やぎらさん橋の手前まで、乗りつけていた。後部兵員室から降りたオレ、

「その……ごめん、助かった——」

　と、操縦席から顔を出した、軍の人に言う。オレより、一回り年上くらいの隊員だった。

「いえ。自分は、あなたをここまで送ることができて、嬉うれしく思います」

　彼は言う。きょとんとするオレ。

「……自分は、子どもの頃、悪魔ゾディアックに襲われ、火の中を逃げ回りました——怖くて怖くて今でも夢に見ます。そんな自分を、だけど今はもういない一人の魔女エトワールが助けてくれたんです。司令官殿どのから、最後の魔女エトワールがあなたを待っていると聞きました。行ってあげ

てください。どうか今度は、自分に代わってあなたが……魔女(エトワール)を助けてあげてください」
　なんてことだ。ちゃんといたじゃないか。魔女(エトワール)に感謝してくれている人は。
　もしかしたら――もしかしたら、オレは、このセカイともう少し、違った出会い方ができたんじゃないだろうか。このセカイは魔女(エトワール)の敵だ、なんて決めつけてしまわねば、沖や日(く)下(さ)部(か)(べ)や、そしてクラスの連中とも、もう少し違った関係を築けたんじゃなかろうか。
　そうしたら、この結末だって――。
　そんな後悔に似た想いが、オレを襲う。だけど、そんな思考を、頭を振って、払いのける。この結末を受け入れると――生き返る時に決めたのだ。
　オレは大きく息をついて、夜の帳(とばり)の落ちかけた山道を天象儀(カール・ツァイス)へと駆けだした。

　天象儀(カール・ツァイス)は、悪魔(ゾディアック)の出現に際し、カルデア職員が忙(いそが)しそうに行き来している。
　オレなんかに注意を払う余裕はないと見た。
　その隙(すき)に、オレはひたすら上階を目指す。スピカはきっと屋上で、出撃を待っているはず。小さな吹き抜けのホールを抜け、あと少しで最後の階段――。
　あと少しでスピカに会える……そんなところで――。
「よぉ」とアリデッドが、廊(ろう)下(か)に立ち塞(ふさ)がった。
　その手には黒い彗(ほうき)。先端が、オレを向いていた。
「今(いま)更(さら)ご登場か？　愛する者のために基地を脱走だなんて、熱いねェ。せっかく預けたっていうのに、沖(おき)のヤロー。簡単に逃がしちまって、どういうつもりだ？」
　無駄話に付き合っている余裕はない。
「退(ど)いてくれ、オレはスピカに会わなきゃいけない。スピカが待ってるんだ」

「通すわけにはいかねーな！　またこないだみたいに、連れてかれたらたまんねー。動くなよ！　一応殺さないつもりだけどな、打ちどころがわりぃと、どうなっかわかんねーぞ」
　死ぬのは怖くない。神様に生き返らせてもらえばいい。だが下手(へた)に出力を絞られて死に損(ぞこ)なえば、二度とこの日に戻れなくなるだろう。
「わかったらおとなしく両手を挙げな」
「頼む、スピカに会わせてくれ。五分だけで、いや、三分間だけ待って……」
「そんな死亡フラグ、誰が立てるか！　しつけー男は嫌われっぞ」
　ならば、とオレは、腰から自衛軍が用意してくれた「着替え」を抜く。一見すると拳(けん)銃(じゅう)に見えるこれはミニＵｚｉ。れっきとしたサブマシンガン……らしい。引き金を引けば大量に弾をばらまく。オレが素人(しろうと)でも、この距離なら一発くらい当たるだろう。



　アリデッドがオレの得(え)物(もの)にギョッと怯(ひる)んだ隙(すき)に、オレはさらに距離を詰める。

　アリデッドとはいえ人殺しは躊(ちゅう)躇(ちょ)するだろう、と判断してのこと。彼女の彗(ほうき)の先が、オレの額(ひたい)に触れようか、というところまで接近。オレの銃口もアリデッドの額を捉(とら)えている。準している。たとえ彗が魔力を放っても、その衝撃でオレの指がちょっとでも動けば、共倒れだ。

「彗を下ろせ！」

「あァ？　どうした、撃ってみろよ？　愛する女に会いに行くんじゃねぇのかァ？」

　オレたちの間で、緊張感が極限まで高まり――そして――。

「――行けよ」

　拍(ひょう)子(し)抜(ぬ)けするくらいあっさり、アリデッドが彗を下げた。オレも慌(あわ)てて銃を下げる。

「本当はよ、テメーが来ただけで驚きだったんだよ。来るとは思ってなかった。佐(さ)草(ぐさ)の野郎は……結局、逃げたからな……。だから、まあ、おとなしく、通してやってもよかったんだがな？　ちっとまァ、スピカのやつが羨(うらや)ましくなったっつーかな？」

「佐草」というのは……彼女とともに逃げた相手だろうか。

「まァ、いいや。それにな。スピカの調子な、正直、よくねーんだ。どうせこのままじゃセカイは滅(ほろ)ぶ。だったら最後くらい、おまえたちに任せようじゃねーか。スピカが戦って滅ぶか、スピカが逃げだして滅ぶか、それとも……。ま、好きにしやがれ。今まで散(さん)々(ざん)、魔女(エトワール)に頼ってきたんだ。最後くらい、そういうのもアリだろ……。

　バカ、なんだそのツラは！　実はいい人とか思ってんじゃねぇだろうな!?　さっさと行きやがれ、この疫(やく)病(びょう)神(がみ)が！　どんだけスピカを待たせんだ！　ついさっき、悪魔(ゾディアック)の蛹(さなぎ)が落ちた！　いつ羽(う)化(か)するかわかんねーぞ!!」

　そんな罵(ば)声(せい)に尻を蹴られるようにして……そして、オレは、天象儀(カール・ツアイス)の屋上に辿(たど)り着く。

　夜の街にはサイレンが鳴り響き、サーチライトが落下した蛹を不気味に照らしている。
　そんな夜空の下、たった一人で、魔女(エトワール)の衣装に身を包んだ彼女が立っていた。まるで彗に縋(すが)るようにして。その視線の先には、きった繭(まゆ)がある。あの蛹が開けば、彼女は飛び立たなければいけない。孤独な、最後のフライトに。
　その時を、たった一人で、どんな思いで待っていたのだろう。
「スピカ……」とその小さな背中に声をかける。
　彼女が、振り返る。
　驚きと、笑顔と、泣き顔と。一体どんな顔をすればいいのかわかんなくて、結局、全部混ぜちゃいました、みたいな表情を一瞬、浮かべてスピカがオレに駆け寄ってくる。
「……遅いよ。来てくれないのかと思った。——何も、言ってくれないし」
「……これ、故障してるぞ。こっちの声、届かない」
「え、あの……」
　なんというか、感動の再会に水をさすような指摘ではある。
「ゴ、ゴメン。送る時は、大丈夫だったのに……えーと……電池切れ、っていうかさ。送信部のリネアが切れてるだけだから——これで大丈夫」
　スピカが、スターリットに彗(ほうき)を翳(かざ)して、言った。
「まあ……大丈夫って言うか、もう直接、来たしな——」
「うん、ありがと」と頷(うなず)いて、スピカは続ける。
「あのね、ゴメン。手紙でも勝手なことばっかり言って。呆(あき)れられても、仕方ないと思う。
　でもアタシ——逃げたくないの。行かなきゃならないの」
　わかっていた。神様たちの言うとおりだ。
　スピカは絶対にここから逃げない。絶対に戦おうとするだろう。
　それが、スピカだ。オレが愛したスピカの、選択なのだ。なら——。

「あのな。オレは、おまえが好きだ」

「その――知ってる。ありがと。でも、アタシ……魔女（エトワール）だから……」

「言ってたよな。本当に好きってことは、記憶をなくしても好きでいられることって」

「うん。でも……でもね、オザキ、アタシは――」

「最後まで聞けよ。でもな、オレ、わかった。そんなの違う。そんなの好きってことじゃない。いいか、オレが好きなのは、もともとスピカだったはずの記憶喪（そう）失（しつ）の誰かさんじゃない。そんなのスピカじゃない。絶対、違う。オレが好きなのは、今ここに立っているスピカだ。普通の女の子で、でも天才魔女（エトワール）で、それでも戦うのが嫌（いや）で仕方なくて、逃げたくて逃げたくてしょうがなくて、だけども、仲間を裏切れないスピカだ！

　いいか、もう一度言うぞ！　オレが好きなのは、今、ここにいる、おまえだ。今、これから戦いに行くスピカを愛してるんだ。だから、だから！」

　スピカが、驚いた顔で、オレの顔を見上げていた。これが――オレの出した結論だ。

　もしも、スピカが普通の女の子として生まれ、普通の女の子としてオレと出会っていたら、オレたちには、もっと違った幸福もあっただろう。もっと違った終わり方もあっただろう。だけど、オレが出会ったスピカは魔女（エトワール）で、そして自（みずか）らも魔女（エトワール）であることを望んでいた。だとしたら、辛（つら）いけど、本当に耐えがたいことだけれど、スピカの幸せは、魔女（エトワール）としてのさだめの中にしかない。そして、そんなスピカをオレが愛しているのならば。

「一緒にいさせてくれ。最期まで……」

　彼女の運命も、選択も、結末も、全部含めて、愛するしかないのだ。

「ありがと。アタシも、オザキが、大好きだよ」

　オレはスピカを抱きしめる。身体を引き寄せ唇を重ねる。肌と肌が

融とけ合うほど、強く。

「ずっと、一緒にいられなくて、ゴメンね」

　スピカの目からは涙が次々と溢あふれでる。きっとオレも同じだろう。気休めの言葉は出てこないし、もうその必要もない。オレたちは、もうそれを受け入れたのだ。だからひたすら、彼女の涙を吸う。オレとスピカは、キスを続け――。

　世界の全てを憎ぞう悪おするような、獣の叫び声が、夜の大気を震わせた。

　――悪魔ゾディアックが羽う化かしたのだ。

　唇を離し、抱ほう擁ようを解き、スピカが、少し沈んだ声で言う。

「あのね、オザキ――悪魔ゾディアックはね、魔女エトワールなんだ」

　その告白は、オレが予想していたとおりのもの。

「成体イマーゴになると、今まで死んだ仲間の顔が浮かぶの。この前はミラだったから――今日のあれはきっと、ガーネット……」

「違うさ。そんなことあるわけがない」

　だけど、オレは断言する。

「――で……でも……」

「ガーネットは、オレたちを祝福してくれただろう。応援してくれるって言っただろう。オレたち二人のために戦ってくれただろう？　あれが嘘うそだって言うのか？」

「そんなことない！　あれはガーネットの本心。彼女は、そういう人だもん！」

「なら、あの悪魔ゾディアックはガーネットじゃない。ガーネットが、おまえを襲うなんて、するはずない。たとえ……本当にガーネットが悪魔ゾディアックになったんだとしても、そんなことをする彼女は、もう彼女とは違う何かだ。そうだろう？　だから、それは、おまえを惑わそうとする悪魔ゾディアックの作戦なんだ。大丈夫。オレは知ってる。天才魔女エトワールのスピカは、そんな卑ひ怯きょうなやつには絶対負けないって」

　オレの言葉に、スピカの顔から、迷いが消えたのがわかった。彼女は、力強く、頷うなずく。
「そうだね。うん。アレはガーネットじゃない。だからアタシ、守らなきゃ。あいつをやっつけて、みんなの守った、ガーネットの守った世界を守る。オザキのいる世界を守る」
「ああ——オレ——ずっと、聞いてるから。ここで見てるからな」
　スターリットをスピカに翳かざし、スピカに言った。
「うん。オザキは、ずっとココにいる」自分の胸をそっと押さえ、答えるスピカ。
「今度の戦い、ちょっとキツいから、泣いちゃうかもしれないけど、最後まで、見ててね」
「おう、任しとけ！　オレは、死んでもここを動かん！　だから、思いきり、行ってこい！」
　オレたちは、もう一度、口づけを交わす。
　お互いに、これが最後だとわかっていた。
　だから、それは、長い長い口づけだった。
　唇を離して、そして、目尻に浮かんだ、涙を吸う。
　彼女の涙をぬぐってやれるのも——これが最後だ。
　スピカは彗ほうきに乗り、その先端を夜空に向けた。
　リネアを宿し赤らんでいく彗。彼女の身体が浮き上がり、ふわりとマントが広がる。オレの愛した、天才魔女エトワールスピカの光が夜の空の向こうへ飛んでいった。
　オレはその光景を網もう膜まくに焼きつけようとする。
　そんなオレに、スターリットから、スピカが呼びかけてくる。
『ね、オザキ……アタシが死んだらね……』
「ああ！　すぐオレも行くからな！　待ってろよ！」
『バカ!!』と、一いっ喝かつされる。『そんなことしちゃだめ！　アタシがあの悪魔ゾディアックをやっつけたらね、きっと、それが最後だよ！　世界は平和になるの！　そうなるの！
　だからね、アンタは、この街で生き残って。別の誰かを好きになる

の！　アタシの守った世界で誰より幸せになるの！　でも、でもね！　だから、今だけ、アタシを好きでいてくれる？　世界中の誰よりも、何よりも、アタシを好きでいて。そしたら、そしたらアタシ——がんばれるから。

　だから……お願い。戦ってる間、名前を呼んで。好きだって、言って』

「——ああ、わかった」

　と、答えて苦(にが)笑(わら)い。ここは天象儀(カール・ツアイス)の屋上。

　プラネタリウムの中心——セカイの中心。

　愛を叫ぶのには、あまりに、うってつけの場所だった。

　大きく、息を吸い込んで、オレは叫んだ。

「オレはスピカが大好きだ!!　大好きだよ、おまえが!!」

『ちょ……いきなり、そんな大きい声で……聞かれるわよ……恥ずかしくないの？』

「照れくさくなんかない！　オレの好きを全部おまえにやる！　大好きだ！　アイラブユー！　オンリーユー！　好きだ！　大好きだ！　好き好き大好き超愛してる！　いいか、おまえが嫌(いや)だって言うまでやめねぇぞ！　嫌だって言ってもやめねぇからな！　加減なんて知らねぇぞ！　全力で叫ぶからな！　全力で愛してるからな!!」

『アリガト！　ちゃんと聞いてるからね！』

　夜の闇に、まるで亡(ぼう)霊(れい)のようにゆらめく光は、成体(イマーゴ)から滴(したた)り墜(お)ちる溶岩だ。

　そして、一筋の赤い光が、空へと昇っていく。あれがスピカだ。

　成体(イマーゴ)が街中をゆるがす咆(ほう)哮(こう)をあげる。それは拒否の叫びだ。純粋な否定の叫びだ。

　死ね、壊れろ、なくなれ、いなくなれ、と悪魔(ゾディアック)が夜空に叫んでいる。

　赤の光が、一層、輝きを増す。鮮烈にして絢(けん)爛(らん)な赤は、スピカの魂(たましい)の叫びだ。

アタシはここにいる――そう、スピカが叫んでいる。

だから、オレも叫ぶ。好きだ、愛している、おまえを信じてる、と。

悪魔ゾディアックが無数の黒球を放つ。夜空から星が消えていく――。

だけど、スピカは、そんな全てを呑のみ込む闇を避けようとするのではなく――。

軽妙な軌き跡せきを描いて飛びながら――キッチリ、堂々、受けて立った。

『天才魔女エトワールスピカの晴れ舞台!!　キッチリ見せてあげるわ!!』

叫ぶスピカ。周囲に、生まれる赤い光の針――それらが一いっ斉せいに夜を征ゆく。

光の流星群が、意志を持ったように闇に舞い――空に、一斉に、赤い華が咲いた。

咲いて咲いて咲き乱れる。

――敵の弾を――、撃ち落としている――？

そう。たしかに彼女は天才だ。オレは、叫びながら思う。

敵がどれほど大量の黒球を放とうが、彼女には関係ない。

数多あまたの漆しっ黒こくの球体を、那な由ゆ他たの赤い花びらが、一切の容よう赦しゃもなしに貫つらぬいていく。

赤く爆はぜて消えていく。次から次へと消えていく。次から次へと爆ぜていく。

夜空にくるい咲く、赤い華々は、まるで、季節外れの花火大会。

秋の夜空のスターマイン。

記憶喪そう失しつのオレだが断言できる。今、オレの目の前に広がる夜空は、これまでのどんな花火なんかより、いや、どんな光景よりも美しい。

スピカの名前を叫びながら、オレは思う。

この夜空が、スピカからの返事なのだ。スピカの愛の言葉なのだ。贈り物なのだ。

オレたちは、世界中のどんな恋人たちよりも、この瞬間、通じ合っ

ているのだと思う。わかり合っているのだと思う。一つになっているのだと思う。
　だから、今、スピカは幸せなのだと、オレは思う。今、オレは幸せなのだと、オレは思う。オレたちは今世界中で一番幸せなのだ、と思う。
　だからオレは叫ぶ。
　夜空を染める爛(らん)漫(まん)の華に照らされながら、それでも決して負けないように叫ぶ。
　好きだ、愛している、と。
　悪魔(ゾディアック)がいくら吼(ほ)えようが、そんなもん耳には入らない。
　今、世界にあるのは、オレがスピカに贈る言葉と、スピカがオレに送る光の花束だけだ。
　今、この世界は、オレたち二人のものだ。
　今、この幸せな瞬間のために二人は生きてきたし、今、このために世界はある。
　スターマインの嵐を抜けて、赤い槍(やり)と化してスピカが飛ぶ。
　遥か上空からの急降下をかけ、地表すれすれから、一条の光線となって疾走(はし)る。
　止めることなど、誰にもできるはずがない。
　スピカのまとう光が膨(ふく)れ上がる——朱雀(すざく)のように、赤い翼がはためく——。
　悪魔(ゾディアック)を貫(つらぬ)いて、再び夜空へと羽ばたいていく——。
　終(しゅう)焉(えん)の咆(ほう)哮(こう)とともに、特大の十尺(しゃく)玉が、地上の星たちの中で花開く。
　赤い光は、そのまま遥か高く、天空の星の世界へ昇っていく。
　まるで、天蓋(グレンツエン)を突き抜けてしまいそうな勢いで——。
『オザキ……』
　スターリットが、オレの名前を呼んだ。
『……大好き……だよ……』
　かすれがちな弱々しい声だった。

それが、スピカの最期の声だと、オレにはわかった。だから、オレも叫ぶ。

その言葉が、スピカの聞く最期の言葉になってくれると信じて。

「オレも、スピカが、好きだ！　愛している!!」

静せい寂じゃくをとり戻した夜空に、赤い光が墜ちていく。

赤い軌き跡せきを描いて墜ちていく。

線香花火のように、最後にちらりと瞬またたいて——そして、夜の闇に溶けた。

悪魔ゾディアックは滅ほろんだ。

セカイは救われた。

そして、最後の魔女エトワールが墜ちた。

これでいいのだ。

これが、これがスピカの望んだ運命だ。

オレが受け入れた彼女の生き様なのだ。

だから、これが、オレたちが望んだ、幸せな結末なのだ。

そして、オレの物語も、もう終わりだ。

オレは、スピカと恋するために、スピカのためだけに生きていたのだから。

天象儀カール・ツアイスの屋上の柵さくを乗り越える。

迷いはない。スピカは来るなと言うかもしれない。

でも中なか原はら中ちゅう也やだって言ってるだろう？

愛する者が死んだときには、自殺しなけあなりませんって。

だから——オレは飛んだ。

そして——気がつくと——夜空が視界を埋うめていた。

ここは——天国——ではないらしい。起き上がる。天象儀カール・ツアイスの敷地内だ。後頭部にわずかな痛みがあったが、どこもケガしてはいないようだった。どうしてだ？

横を見れば、一台の自動車——だったもの。屋根が盛大に潰（つぶ）れていた。どうやら、この自動車がクッションになって、死に損（ぞこ）なったようだ。車の持ち主はいい災難である——そういや、なんかアリデッドの乗ってる車に似てるな、コレ。

それにしても、最後の最後でえらい幸運が発動したものである。なんというか、

——生きろ。

と、スピカが言っているような気がした。あとを追うと言ったオレに、バカと一（いっ）喝（かっ）した彼女の声を思いだす。——アタシの守った世界で誰より幸せになるの！

そう言っていた彼女は、もうこの世界にいないのだ。

その事実に胸が締めつけられ、じわりと視界が滲（にじ）んだ。

彼女は死んだ。

セカイを守るため、悪魔（ゾディアック）と相討（う）ちになり、魔女（エトワール）の使命を果たして死んだ。

天才魔女（エトワール）として、オレと恋をして、自分の人生を精一杯生きて、死んだ。

オレが一度、意識を失った以上、それはもう完全に事実として確定したのだ。

もう、どうあっても覆（くつがえ）らない。

天象儀（カール・ツアイス）のある柳楽山（やぎらさん）の頂上からは、伊（い）都（と）夏（げ）市の全景が見渡せた。

オレが一度は滅（ほろ）ぼそうとした街。そしてスピカが守った街。

夜の闇に目をこらせば、戦いで損（そん）壊（かい）した街の修復が、早くも始まっていた。

スピカは、もう悪魔（ゾディアック）の空襲（メテオライト）はないと言っていた。どんな根拠があるのかはわからない。

魔女（エトワール）の直感とかかもしれないし、口から出任せを言っただけかもしれない。

理由なんか知らない。この際、魔女（エトワール）がいなくなったから、とか

でもいい。

　でも、オレは信じる。

　もう、悪魔(ゾディアック)はやってこない。じきに天蓋(グレンツエン)も消えてなくなるのだ。

　スピカの犠牲と引き換えに、世界に平和が訪れたのだ。

　闇に目をこらせば、深夜だというのに、復旧作業は続いている。

　耳を、微(かす)かにヘリコプターのローターの音が叩く。きっと自衛軍のヘリだ。

　きっと沖(おき)は、復旧作業でも、指揮を執(と)っているんだろう。

　悪魔(ゾディアック)が来なくなっても、沖の仕事はそうそうなくならないだろう。今まで天蓋(グレンツエン)に閉ざされていた街が開放されれば、きっと大きな混乱が起こるはずだし。

　新聞部は何しているだろうか？　取材中だろうか。それとも、今日の戦いをまとめているところだろうか。平和になったら、日(くさ)下(か)部(べ)は今度はどんなスクープを追うのだろうか？　〝悪魔(ゾディアック)空襲(メテオライト)途(と)絶(ぜつ)の謎〟、とかだろうか？　戦いが終わったことで、カルデアが秘密にしていた資料なんかも公表されるだろうし、アイツも退屈しなさそうである。

　クラスメイトはどうだろう。少しは生徒会と新聞部も仲良くなって、宮(みや)本(もと)と樋(ひの)ケ(け)のヘンな関係も普通になるといいのだが……。

　そして——オレはどうだ？

　平和になった、この伊(い)都(と)夏(げ)市で生きていくオレ。

　宮本あたりは、学校に顔を出せば、スピカのことは残念だったな、なんて言って、結構本気で、一緒に泣いてくれる気がする。なんだかんだいって情に厚そうだし。

　けれども、まあ、一週間とか、一か月とか、あるいは半年とか一年とくらい、オレは引きこもって泣いてすごすと思う。それでも、やがて時がその哀しみも癒(いや)してくれるのだろう。それでオレは学校にまた通いだすだろう。そしたら、沖(おき)のやつに生徒会に引っ張られるかもしれないし、何かの間違いで新聞部に入る、なんてこともないとは

言えない。あるいは、元の天文部に戻ったカルデアで、天体観測なんかをするのもいいだろう。
　それでまあ、オレは、きっと誰か、女の子と知り合ったりもするだろう。最初は、ほんの友達付き合いのはずだったのに、いつの間にか、その子を好きになっていて、そして思い出の中のスピカは薄れかけていて——それで二人は付き合いだすのだ。
　うまくいったら、結婚して、子どもを作ったりもするかもしれない。そうして、年をとって、だんだんお爺じいちゃんになって、最期は畳たたみの上で横になりながら、ふと、スピカのことを思いだすのだ。
——アタシの守った世界で誰より幸せになるの！　なんてセリフを思いだすのだ。そうして、約束守ったぞ、なんて思って、それから、人生をともにした別の誰かに手を握られて、看み取とられながら逝ゆくのだ。
　それは、とてもとても幸福な生き方だろう。それは、とても幸せな一生だろう。
　だから、オレは決心して、山を下りることにした。
　天象儀カール・ツアイスのフェンスを抜ければ、柳楽山やぎらさん橋。オレは、その中ほどで、足を止めた。
　たしかに、幸福だけど——。
　でも、オレという存在は、オザキキヨヒコという存在は、スピカのためにある。スピカの側そばにいて、スピカを愛し、スピカに愛されるために、存在している。
　だから、スピカ以外の誰かを好きになって、それで幸せだと思うオレなんて、もうオレであってオレじゃない。
　オレがそんなふうに変わってしまうのは、死ぬことの何倍も恐ろしかった。
　柳楽山橋の柵さくを乗り越える。
　目もくらむほどの高さだ。下は闇に包まれている。ここなら絶対に間違いない。
　空には星空。——星エトワールたちに見守られるようにして、仰向けに、

オレは、手を離した。
　久しぶりの、だけどお馴(な)染(じ)みの、落下感。
　落下するオレめがけて、星の世界から、彼女が迎えに来てくれた。



　そのまま、最初と同じように、オレの身体を抱きかかえて、聞いてくる。

　——こんなところで終わっていいの？　このまま人生終わっちゃってそれでいいの？　まだたくさんやりたいことあるでしょ？　やってないことばっかりでしょ？

　その顔はちょっと怒っていて、泣きそうで、だから、オレは慌（あわ）てて答える。

　終わっていいんだよ。オレは、幸せだった。

　だって世界で一番幸せな恋をしたんだぜ？

　その言葉に——彼女は、しょうがないなあ、という顔で笑ってくれた。

　よかった。許してくれたようだ。

　オレたちは、心地よい浮遊感に身を委（ゆだ）ねながら見つめ合う。

　それから、彼女が言った。

　——ね、キスしよう。

　最後だから、オレは頷（うなず）く。

　オレたちは、静かに、深く——記念のキスをした。

　なあ、スピカ。

　これがオレたちの、精一杯、幸せな終わり方だろう——？

"She May Go" is end.

いや、ちがう。
我々が思うほど、この世界は哀しくプログラムされちゃいない。
何より、もうこれ以上、君の周りに不幸の存在を俺は認めない。

『小さな恋のメロディ』筋肉少女帯／作詞：大槻ケンヂ

But "SMG" is NOT end.

To be continued to "Sad-Mad-Good-bye".

大樹連司

Renji Ohki

１９８２年、茨城県出身。既刊に『ぼくらの～alternative～』（原作：鬼頭莫宏、全５巻、小社刊）。

小学館ｅＢｏｏｋｓ

スマガ１

２０１２年12月１日　電子書籍版発行

者　大樹連司

作　ニトロプラス

行人　佐上靖之

集人　野村敦司

集　望月　充

行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２００８年10月23日　初版第１刷発行

©RENJI OHKI/Nitroplus 2012　ISBN978-4-09-451096-6

ＪＡＳＲＡＣ　出０８１２７５６-８０１

※ご注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に関わらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製など違法行為、もしくは第三者への譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。

Table of Contents

プロローグ
1
2
3
4
5